58. 3. 4.

研究集録第19集
昭和 57 年度

豊かな人間性を育てる特別活動

―集団活動の指導原理とその実践的解明―

昭和58年3月4日

東京都小学校特別活動研究会

目　　次

○　会長あいさつ …… 2
○　まえがき …… 3
○　昭和５７年度研究発表大会要項 …… 4
○　新春座談会 …… 5
○　岡本先生講演要旨 …… 7
○　各研究部の研究 …… 9
Ⅰ　学級会活動 …… 9
Ⅱ　児童会活動 …… 33
Ⅲ　クラブ活動 …… 57
Ⅳ　学級指導 …… 81
○　役員・本部幹事・理事名簿 …… 105
○　あとがき …… 106

今までの研究集録一覧

第１集（昭和３９年度）　特別教育活動における指導計画作成上の諸問題
第２集（昭和４０年度）　特別教育活動の本質をふまえた指導計画のあり方
第３集（昭和４１年度）　特別教育活動の本質をふまえ望ましい指導計画と実施計画
第４集（昭和４２年度）　望ましい指導計画による実践事例とその考察
第５集（昭和４３年度）　望ましい指導計画による実践事例とその考察
第６集（昭和４４年度）　改訂指導要領実施のための具体的方策と問題点
第７集（昭和４５年度）　改訂指導要領実施のための具体的方策と問題点
第８集（昭和４６年度）　新教育課程実践上の諸問題
第９集（昭和４７年度）　教育課程実践上の諸問題
—各内容相互関連と他の領域等の関連—
第１０集（昭和４８年度）　特別活動と他領域との関連
第１１集（昭和４９年度）　ひとりひとりを生かす特別活動の特質と指導のあり方
第１２集（昭和５０年度）　ひとりひとりを生かす特別活動の特質と指導のあり方
第１３集（昭和５１年度）　ひとりひとりを生かす特別活動の指導のあり方
第１４集（昭和５２年度）　楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
—新教育課程をふまえて—
第１５集（昭和５３年度）　楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
—新教育課程をふまえて—
第１６集（昭和５４年度）　楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
—新教育課程をふまえて—
第１７集（昭和５５年度）　楽しく充実した学校生活をめざす特別活動
—新教育課程をふまえて—
第１８集（昭和５６年度）　豊かな人間性を育てる特別活動
—集団活動の指導原理とその実践的解明—
第１９集（昭和５７年度）　豊かな人間性を育てる特別活動
—集団活動の指導原理とその実践的解明—

積み重ねが財産

会長　中田英義

一年間の総決算である第１９集をお届けいたします。

岩園専門部長を中心に，学級会（大谷部長）児童会（星野部長）クラブ（関口部長）学級指導（米本部長）の四部会にわかれ，各区市よりご推薦いただいた多数の研究幹事さんがたの汗の結晶です。昨年に引きつづき「豊かな人間性を育てる特別活動」のテーマと「集団活動の指導原理とその実践的解明」を方向づけとし，研究授業や調査，討議の積み重ねの集約です。

もとより「豊かな人間性を育てる」というテーマは，すべての教育の究極のねらいです。

特別活動は特別活動のねらいの到達を通して豊かな人間性の育成に迫り寄与するという，現在の教育課程の構造になっています。

特別活動の目標である「望ましい集団活動を通して，心身の調和をとれた発達を図り，個性を伸長するとともに，集団の一員としての自覚を深め，協力してよりよい生活を築こうとする自主的，実践的態度を育てる」ことの達成を通して「豊かな人間性」の育成へ迫ります。

この集団的，自主的，実践的な態度を育てるために，学級会も児童会もクラブ活動も学級指導も価値ある教育内容を多分に包含している活動として位置づけられていると考えております。

しかし，四つの部門は集団の規模，構成，学年，活動内容などが異ります。

それにともない各部ごとに解決しなければならない課題は多くあります。

都小特活では現在まで，指導計画のあり方，望ましい実施計画，実践事例，新教育課程実践上の諸問題，各内容の相互関連と他の領域等の関連，ひとりひとりを生かす指導のあり方，楽しく充実した学校生活をめざす特別活動，昨年からの豊かな人間性の育成というテーマで研究を進め，たしかなものを積み重ねてきました。

１８冊，約2,000頁の積み重ねの上に，この１９集を重ねられることは，大きなよろこびであると同時に，研究にたずさわった多くの方々の汗の結晶の積み重ねでもあります。

そのご努力，ご尽力に心からの感謝と成果に敬意を表します。

新記録は破られるためにあるといわれます。私どものこの集録もこれをもとに全部で実践され，書き改められ，積み重ねられていかなければならないものです。

教育研究，実践はこれでよしとする終点があっては，そこで停滞し，進歩も向上もないわけだと考えます。無限に続く前進のための一里塚がこの集録です。

そのように考え，そのようにとらえ，積み重ねが特小特活の財産であると考え，この集録を活用し，また明年度に向けて第一歩を歩み出そうではありませんか。

研究主題

豊かな人間性を育てる特別活動

― 集団活動の指導原理と，その実践的解明 ―

1. 研究主題の設定にあたって

本年度は新教育課程実施の３年目を迎えております。豊かな人間性の育成をめざす各学校のとりくみも，いよいよその実をあげ，定着しつつあることと思います。

さて，都特活におきましては，研究紀要第一集を世にしてからすでに１９年目を迎えております。その間，実践を通した本質の追求として各方面からご好評をいただいております。これは，この会を支えていただいた皆様のおかげと心からお礼申しあげます。

この実績に立ち，特に昭和５２年度からは新教育課程を先取りして，都内各学校の「実施」にいささかでもお役に立てばと，その精神の具体化，指導計画の検討をと進めてきました。特に昭和５６年度からは，集団活動の指導原理を明らかにしたいと，表記主題を設定しました。本年度は，その２年目にあたり，一応のしめくくりをしたいと考えております。

2. 本年度の研究について

(1) 集団活動の指導原理，５つの柱と研究の方向づけ

① 集団で解決すべき課題の発見と，課題を自覚させる指導

② 集団活動における役割体験と，その積極的活動への指導

③ 相互に認め合い高め合う集団活動の指導

④ 個人の願いをみんなの協力で充足する集団活動の指導

⑤ 集団活動を通しての民主的態度の形成

特別活動は集団活動を通して行なわれる。そのために活動の過程では集団優位の側面も当然予想されます。しかし究極においては集団を形成することが目的でなく，そこに到達する過程で一人一人の子どもが何を経験し，何を身につけていくかが問われねばなりません。５つの柱はこの方向づけでもあります。

(2) 本年度の研究の成果

本年度研究の具体的成果については「各部の研究」を見ていただきたいと思いますが，次の２点を特筆しておきたいと思います。

１点は，昨年度の授業を中心とした研究を，本年度更に深めることができた。

２点目は，会長はじめ役員の方々の熱意ある研究推進と懇切な指導，部長・副部長・幹事の方々の熱心な研究，そしてこの会を支えてくださる大勢の方々のご支援，この三者が一体になったということである。この方々に深甚の感謝の意を表する次第であります。

専門部長　岩　園　敏　明

東京都小学校特別活動研究会

昭和５７年度研究発表大会要項

1. 日　　時　　３月４日（金）　午後１：３０～４：００

2. 会　　場　　千代田区立番町小学校

3. 研究主題　　「豊かな人間性を育てる特別活動」

　　集団活動の指導原理とその実践的解明

4. 時　　程

1:30	1:50	2:20	2:30	3:40	4:00
受付	全体会	移動	分科会（児童会・学級会・クラブ・学級指導別）		
	あいさつ オリエンテーション		研究発表・研究討議	講評	

5. 研究会

(1) 全体会　１：５０～２：２０　　進行 … 庶務部長　小河一久

◇ 開会のことば …… 副会長　広瀬英二

◇ あいさつ …… 会長　中田英義

◇ 祝　辞 …… 東京都教育委員会

〃 …… 全国特別活動研究会

◇ オリエンテーション …… 専門部長　岩園敏明

◇ 閉会のことば …… 副会長　斉藤斌

(2) 分科会　２：３０～４：００

	学級会	児童会	クラブ	学級指導
テーマ	ひとりひとりが役割を意識し活動する学級会活動	「よい校風を育てる児童活動のあり方」 ―児童へゆさぶりをかける内容や方法をめぐって―	クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方	授業を通して，指導過程の在り方と資料の活用を考える
運営部長	大谷　武夫（港・青山小）	星野　隆治（中野・桃三小）	関口　照治（墨田・菊川小）	米本　滋雄（葛飾・梅田小）
司会	飯沼　宏（立川・柏小） 持丸　義範（中野・鷺宮小）	柏村喜久子（板橋・若木小） 佐々木善光（足立・梅島小）	宇都宮　透（八王子・陶鎔小）	冨田　喜子（新・東戸山小） 重松　誠（港・高輪台小）
発表者	吉田　健二（板橋・金沢小） 松村　二美（江東・南砂西） 秋元　桂子（目黒・東根小） 青山　啓子（品川・小２小）	中川　秀男（港・青南小） 門馬　茂（豊島・文成小） 穂積　輝子（新宿・淀小） 若林　彰（板橋・板四小）	佐藤　正吉（中野・北原小） 青木　治人（板橋・板四小） 窪田　正視（練馬・豊溪小）	橋本　肇（豊島・仰高小） 篠崎たか子（荒川・赤土小）
記録	野村みや子（小平・十二小） 山本　英一（文京・都町小）	味村美恵子（品川・杜松小） 川島　直子（大田・大森三小）	野口　アヤ（新宿・淀六小） 中嶋美沙子（墨田・緑小）	赤岡　幸子（葛・東柴又小） 篠原　昌子（中・月島一小） 二田　孝（多摩・東愛宕小）
助言者	北区立滝野川四小学校長　広瀬英二 大島野増小校長　島田泰介 板橋区立蓮根小校長　竹石善一 足立区立栗島小校長　早坂一	多摩市立南貝取小校長　外村近 八王子市立清水小校長　岩園敏明 板橋区立志村一小教諭　松野彰夫	豊島区立朝日小校長　古橋宏 港区立桧町小教頭　小川国寿 江戸川区立下鎌田東小教頭　小野真澄	葛飾区立小谷野小校長　斉藤斌 文京区立誠之小教頭　石川和男 新宿区立天神小教頭　岩下紀夫

※全体助言者　元東京都小学校特別活動研究会会長　白井健二・小谷威・久納六郎
前東京都小学校特別活動研究会会長　小島明

新春座談　　特活・８３年を語る　　５８. １. １５

合宿研修会より

純粋特活の確めと
都特活研究活動の推進を

中田英義，広瀬英二，外村　近，古橋　宏，斉藤　斌，
小川一久，島田泰介，小野真澄，岩園敏明，大谷武夫，（司会　岩園）
星野隆治，米本滋雄，竹石善一，松野彰夫，渡辺　寿，
高見沢豊栄，早坂　一。

1. 今こそ「純粋特活」を。

豊かな人間性の育成をめざす新教育課程の実施も３年目を迎えた。ところが昨今，ゆとりの時間が特別活動の中になだれこみ現象をおこし，加えて，教育課程の一つに位置づけられて，ねらい，内容，方法が明確であるべき特別活動が，そのために不明確になっている例も数多く見られる。

豊かな人間性の育成は，特別活動だけの専売特許ではなく，すべての教育の最終目標であるはずである。したがって，特別活動では，特別活動でしか育てられないものの追求，そのことを通して豊かな人間性の育成に寄与するという，いわゆる「純粋特活」の立場から，日々の実践を省りみる必要があると考える。

この推進のために，次の４点は，今後の重要な課題であると考える。

(1) ねらい，内容，特質の共通理解を図る。

同じ学校内でも教えこんでいるクラブ指導もあれば，児童の自治的・自発的力を引き出している先生もいる。クラブ活動だけでなしに他の内容でもそれぞれがどのような教育的価値をねらい，方法をとるか共通理解を図る必要がある。

(2) 全体計画，各活動計画の共有化を図る。

共通理解は，全体計画および各活動計画の共同作成の過程で図れる。共通理解が徹底すれば，「皆んなでやろう」という共有化に発展する。共有化は，全校レベルアップの絶対条件である。

(3) 時間配当および生活時程の改善を図る。

年間７０時間の枠にこだわり，学級会とクラブが隔週であったり，生活時程にゆとりがなく，委員会や係り等の常時活動が出来ない例もあるのでその改善を図る。

(4) 他の教育活動との独自性を図る。

本来，関連を図ることが本当である。しかし現状を見る時，むしろ区別を考えた方がよい

と思われる事が多い。係りと当番，委員会の奉仕活動，生活指導との重複，児童会の全校集会が学校行事か，ゆとりの時間の創意ある活動としての全校集会かがはっきりしない事が多い。

その意味で，関連を考える前に，純粋に特別活動としてのあり方を究明したい。

以上の会長提案に基づいて，東京都の特別活動指導の現状を反省，似て非なるものでなく本物の特活を，そしてこの推進にあたる本研究会の在り方について掘り下げることができた。

2. 研究組織の拡大と，研究活動の深化を。

(1) 本研究会は，都内各学校の皆さんのものである。

会の運営は，各地区代表の理事さんの会で方向づけられ，理事会で承認された役員が中核となって進めていく。会報，研究紀要，及び研究会・講演会の案内も，すべて都内各学校に配布している。

研究活動は，各区・市で推選され，理事さんを通して報告された区・市代表の幹事の方々によって推進されているが，学校事業等で出席の少ない方も多い。特別活動の重要さに立って，校長先生方のご理解をいただき，幹事の方々皆さんの研究活動への参加をぜひお願いしたい。又，研究の成果を各区・市に反映していただければと願う。

(2) 研究の輪を拡げたい。

本研究会では，都特活の研究を真に皆さんのものとし，意欲ある皆さんの希望を生かすために，上記の地区幹事さんの外に，どなたでも参加いただけるようよびかけている。ひしめく５０代の時代はもう終ろうとしている。今後の研究を荷なうのは，若き意欲のある方々である。さそい合って大勢参加いただけるよう願っている。

(3) 研究活動の深化は授業を通すことからはじまる。

ここ２・３年の研究が，授業研究を中核に進められていることは大へん大切なことである。授業を通して教育をする以上，けだし当然の事と言える。しかし，特別活動が全校をあげての活動であるために，なかなかその実現は難しい。しかし，この苦しさをのりこえてとりくんでいる各研究部の努力を大きく評価したい。

(4) 特別活動は，学級経営・学校経営の基盤に立って，はじめて生きたものとなる。

学級会活動研究部が，特定の学級の指導を継続して研究し，児童会活動研究部が「校風を育てる児童会活動の在り方」ととりくんできたのも，ここに発想の起点がある。しかし，ここで重要なのは，児童の自主性をいかにして育てるかという教師の指導性の在り方である。児童の現実の姿に流されることなく，これを高め助長することこそ教師の役割りだからである。

(5) 都特活の活動に創意を

楽しい研究活動の在り方，みんなが参加したくなるような魅力ある総会・研究発表会の在り方等皆さんのアイデアをいただきたい。

講演要旨

「特別活動の特質と指導上の問題」　57. 11. 18(木)　番町小

全国道徳・特別活動研究会会長　岡　本　孝　司　先生

1.　「適切な指導の下に」の意味をめぐって

学習指導要領・特別活動・指導計画の作成と内容の取扱い・1

指導計画は，学校の創意を生かすとともに，児童の発達段階を十分考慮して作成するものとする。児童活動については，教師の適切な指導の下に，特に児童の自発的・自治的な実践活動が展開されるように配慮する必要がある。

● 子どもの発達段階を十分考えよう

適切な指導の下に学習活動（授業）が展開されるように配慮するのは，何も特別活動だけに限ったことではなく，他の教科・領域にも通じることである。それにもかかわらず「児童活動については……」とわざわざ記述してある理由は何であろうか。

それは「不適切な指導とは何か」を考えることにより，おのずからわかってくる。

東北地方のＩ市で「特別活動の特質と実践」をテーマとして県大会が開かれた。児童会の正副会長を選挙によって選ぶ学校が大多数を占めるという。果たして教師の適切な指導がなされた上の選挙であろうか。小学校の段階では無理な面があるのではなかろうか。

自発的，自治的な実践活動をほんものにするには，適切な指導が特に必要であり，不適切な指導は排除しなければならない。（適切なものを残し不適切なものを除去する）

● 活動の過程を大切にしよう

特別活動は望ましい集団活動を通して自主性や創造性を育てると同時に，過程を大切にする教育活動である。積極的に集団活動をとりあげ，集団活動を経験する人間関係を通して人間性豊かな創造性をお互いに磨き合う領域である。したがって媒介となる具体的な実践活動の場面を設けて集団活動をさせることが大切である。過程よければ結果よし。

● 活動の質を高めよう

活合いを活発にするために，発言回数を機械的に記録する方法がしばしばとり入れられるが，それは内容の吟味はなくとにかく発言すればよいという誤解を生む。各教科と学級会の関連で考えれば，もっと指導の工夫が考えられてよいのではないか。

学級会，児童会，クラブのいずれにも不適切な指導がたくさん見られる。例えば，６年の学級会で「十大ニュース」をとり上げ，みんなから出された２０のニュースからどのようにして１０にしぼるかを話し合うことが自治的活動であるのに，議長の一存で機械的に「５回ずつ手を上げて下さい」ではせっかくのチャンスを逸してしまうことになる。

● 特別活動の全体，及び，各内容の役割をしっかりおさえよう

特別活動が領域として教育課程に位置づけられたのは，教科だけでは到達できない目標を達成させることが発想としてあった。

特別活動の役割を全教育活動の中で果たさせるためには，特別活動の役割を明確にすることが前提となる。

児童活動は自発的，自治的な活動に意義があり，学校行事は大きな集団に参加させて社会的訓練をする場であり，学級指導は好ましい人間関係を基盤として日常生活の基礎基本を知って実践することに意義がある。

清水義弘氏は，教師が専門職になれるかどうかは集団活動の指導ができるかどうかにかかっている，という。

児童活動だけにしぼって考えてみよう。なぜ教育過程に位置づけられるか。それは，児童活動が人間形成にとって大切な役割を果たしているからである。

子どもは生活の中で自発的，自治的な活動をしている。スポーツも同様に人間形成に役立つことを認めたい。子どもにとって有意義だからこれを授業として行うわけである。

子ども達のための子どもの活動たらしめるには，遊びの要素を十分とり入れた学級会，児童会，クラブの活動を考え出し，実践してみたい。

学級会は学級生活に関係のない問題をとり上げるのは適当ではない。児童会が校外の道路や公園の掃除をするのにも問題がある。どうしても必要なことであれば，教師の発想で実施すればよい。逆に，教室が暗いので生徒会代表が市長へ請願書を提出して，市長から感謝された例もある。

クラブ活動は同好の児童がみんなで話し合って共通の興味・関心を追求する活動を行うもの，話し合うことは民主的集団を育てるためにきわめて大切である。

村井実氏は，「新教育学のすすめ」―子どもの再発見―の中で「子どもはよくなろうとしている。これを援助するのが教育」と述べている。学ぶのは子ども達自身で，それを援助するのが教師である。

マクルーハンは「教育とは学ぶ者に対する援助によって学ぶ時間を短くしてやることである。病人は自分で病気を治す。医者は治す時間を短くしてやるのが仕事である」という。

2. 特別活動についての教師の姿勢

・教師の権威で，子どもを一定の型にはめてはならない。
・公式やルールに頼り過ぎた考え方をやめよう。子どもの創意が生かされない。
・正しい方法は１つしかないと思いこむな。富士山への登山口はいくつもある。
・常にレディーメイドの答えを求めたがるな。オーダーメイドの答えを出す工夫を。
・新しい問題解決には，一般的，慣習的な方法を固執しない。
・無理に子どもに教師への同調を強いてはいけない。
・評価を急ぎ過ぎないこと，評価・反省は高度の能力を必要とするので慎重に。
・特定の子どもにコミュニケーションが集中しないよう留意しよう。

Ⅰ　学級会活動

テーマ　「ひとりひとりが役割を意識し活動する学級会活動」

Ⅰ　まえがき …… 11
　1.　研究主題について …… 11
　2.　研究への取り組み …… 12

Ⅱ　実証授業１，２，３ …… 板橋区立金沢小　２年　吉田学級 …… 13
　1.　「マンガらくがき発表会をやろう」 …… 13
　2.　「こんどの学級会で，がらくたこうかん会を計画しようと，クイズ３２人に聞きましたを計画しようのどっちを話し合うか決めよう」 …… 16
　3.　「おとしものばこをつくろう」 …… 18

Ⅲ　授業研究 …… 22
　1.　「５の２ミニ運動会をしよう」 …江東区立南砂西小　５年　松村学級 …… 22
　2.　「かかりのしごとを，みんなではなそう」
　　…… 目黒区立東根小　５年　秋元学級 …… 26

Ⅳ　入門期の学級会活動を楽しく，いきいきと展開させるための試み …… 30

Ⅴ　研究の反省と今後の課題 …… 32

＜　学級会コーナー　＞

コーナー　1　どんなことが議題になるか ……（12）
コーナー　2　議題の提案をするときの工夫 ……（21）
コーナー　3　児童の自発性の芽を育てる ……（25）
コーナー　4　話し合い活動における役割意識と計画委員会 ……（29）
コーナー　5　どの子も議長はできる ……（31）

○ 研究の経過

57. 5. 27	（木）	定期総会，分科会，組織づくり，研究の方向について			
57. 6. 17	（木）	研究テーマ決定			
57. 7. 9	（金）	実証授業1	板橋区立金沢小	2年	吉田学級
57. 7. 14	（水）	授業研究	多摩市立南落合小	6年	加藤学級
57. 10. 5	（火）	授業研究	江東区立南砂西小	5年	松村学級
57. 10. 26	（木）	実証授業2	板橋区立金沢小	2年	吉田学級
57. 11. 18	（木）	授業研究	目黒区立東根小	1年	秋元学級
57. 11. 25	（木）	実証授業3	板橋区立金沢小	2年	吉田学級
57. 12. 16	（木）	実践事例についての反省と研究のまとめについて			
58. 1. 17	（月）	執筆原稿検討			
58. 1. 24	（月）	執筆原稿検討，研究のまとめ			
58. 2. 22	（火）	研究発表打合わせ，諸準備			
58. 3. 4	（金）	研究発表会			

研究・執筆者名簿

				遠藤　朋子	江　東・南砂西小
部　長	大谷　武夫	港　・青　山　小	（発表者）	青山　啓子	品　川・小　山　小
（副部長 司　会）	飯沼　　宏	立　川・柏　　小	（発表者）	秋元　桂子	目　黒・東　根　小
（〃 発表者）	吉田　健二	板　橋・金　沢　小		阿部　　均	目　黒・東　根　小
〃	持丸　義範	中　野・鷺　宮　小		岸本　弘子	渋　谷・大　向　小
（〃 記　録）	野村みや子	小　平・十　二　小		鈴木日出子	中　野・桃　二　小
（〃 発表者）	松村　二美	江　東・南砂西小		天田　　隆	豊　島・千　早　小
	金野　　圭	港　・白　金　小		桜井　晴美	豊　島・池　五　小
	佐藤　一夫	新　宿・落合一小		山口　雄民	北　・王子第二小
（記　録）	山本　栄一	文　京・柳　町　小		金子てる子	荒　川・第一日暮里
	木部　久子	文　京・関口台町小		池谷　隆子	荒　川・第三狭田小
	藤田　研治	文　京・駕籠町小		小野　莞一	板　橋・大谷口小
	斉藤　京子	文　京・小日向台町		揚野　好子	江戸川・上小岩小
	菊地　裕美	文　京・大　塚　小		土屋　徳松	町　田・忠　五　小
	倉嶋　ケイ	台　東・忍　岡　小		伊東トミエ	東村山・久米川小
	柳沢あけみ	墨　田・第一寺島小		内山　寿孝	東大和・十　　小
	福元　弘和	府　中・第　七　小		加藤　　明	多　摩・南落合小

Ⅰ　まえがき

1.　研究主題について

新教育課程が実施されて３年が経過しようとしている。しかし特別活動は依然として，充実していないように思われる。それは，児童の自発性や自主性を基盤として成り立っている唯一の教育活動であることに起因しているとも思われる。特別活動の本質をふまえて，学級会活動を，どのように充実させていくかが，私達の研究の課題である。

本年度の学級会活動部のテーマは，昨年度に引続き，「ひとりひとりが役割を意識し活動する学級会活動」とした。

これは，昨年度の都特活のサブテーマ「集団活動の指導原理とその実践的解明」の２年目を受け，昨年度の研究の成果と問題点をふまえて研究を深めようとしたものである。

昨年度は，児童の意識が一体感から連帯感に移行するとき，役割意識を持つと考えた。

すなわち，役割意識を持たない仲間意識（一体感）から，学級の成員として責任を感じ，それを果たそうとする意識（連帯感）を育てる指導を追求してきたわけである。

本年度は，昨年度の仮説を基に，より深く児童の役割意識を芽生えさせ，一人一人が学級会活動に積極的に参加できる指導の方法を実践的に追求することにした。

一人一人の児童が，役割を意識して活動する学級会活動を成立させるためには，どのようなことを修正していったらよいだろうか。

単に学級会活動に参加するというだけでは，児童の役割意識は育たない。例えば，一見活発に発言しているようであるが，発言が一部の児童に偏っていたり，一定の時間内に終わるが，議長が固定していて，議長の意のままになってしまう学級会でもまずい。特定の児童ばかりに大きな役割を担わせてしまうと，はっきりした役割を持たない児童が生じてしまう。

こうした欠陥を一つ一つなくしていく地味な努力と工夫があってこそ，連帯感を育むことができると考える。

それには，全ての児童に目を向け，役割を多様化し，失敗を恐れさせずに学級会活動を推進していくことが必要になってくる。

学級会活動で，発言しなかった児童が発言するようになる。やる気のない児童がやる気を出してくる。また自分のものとして，安心して取り組めるようになる。その様になったとき一人一人が活動意欲を持って，話し合いを重ねていくにつれて，一体感から連帯感へ意識が移行できる。

しかし，児童に役割意識を持たせるには，週一単位の学級会活動の時間の中だけでは，とうてい不可能なことである。児童の学校生活の全て，教科，領域，学級生活との関連の中でとらえていかなければならないであろう。

そのためには，教師と児童が一体となって，よりよい学級経営を基盤とした学級会活動を展開していかなければならない。

課題に迫るために，一つの学級の３回の実証授業を通して，個々の児童の意識の変容と集団としての質の高まりをみることにした。

2. 研究への取り組み

本年度は，昨年度の研究の成果，問題点などを見つめなおして，学級会活動の現状について話し合うことから出発した。各地区，各学校での情報を基に話し合った結果，各地区各学校，各学級ごとに，大きな差があることを認識させられた。学級会活動は学級独自のもので，児童の実態に違いがあるのだから差異が生じるのは当然であるが，児童の活動が不活発であるのは，教師の指導の手だてが十分なされていないのではないかと考えた。

そこで，部員同士，共通な課題を持って，研究を進めていくことにした。

研究を深めていくためには，授業研究を通して，検証していくことが最善であるとの共通認識を持った。

研究の方向は，次のような考え方で行った。

① 各地区，各学校の学級会活動の現状を話し合い問題点を分析して共通理解を図る。

② 昨年度の研究テーマ，問題点との関連からテーマを設定する。

③ 部員の授業研究，研究協議による具体的な研究により，テーマとの関連を図る。

④ 実証授業を中心に問題点の分析し，テーマに迫る。

・一つの学級（２年生）を使い，３度の授業研究（７月，１０月，１１月）を行う。

・児童一人一人の変容と，集団としての質の高まりをさぐる。

⑤ 講師をお迎えして，授業後の問題点，方向づけなどの指導をいただく。

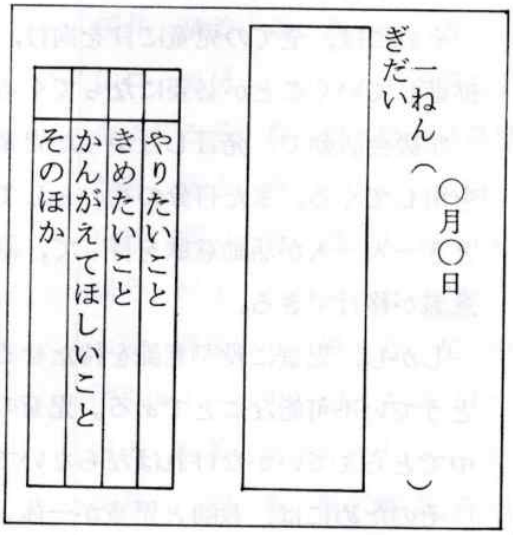
本書，次ページより，実証授業，授業研究に取り組んだありのままの事例である。地道に取り組んだ過程をくみとっていただければ幸いである。

＜学級会コーナー１＞どんなことが議題になるかな

「問題を見つける目」を育てるために，右のような議題用紙を利用しては，どうだろうか。

教師への訴え，子どもとの雑談・子どもたちの観察の中から，担任が学級会の議題にふさわしいものを意図的にとり上げる段階がある。

さらに，一歩進めて，子ども達自身が，自分の提案がどの議題群にあたるのかを考え，○印をつけてポストに入れる。又，議題群に目を向け，学級会の議題を選択する。これらの活動から「問題を見つける目」が育つのではないだろうか。



Ⅱ　実証授業

学級の実態

学級編成替えをした学級である。昨年度は二学級編成ということと，校舎の建築様式の影響もあり，互いに交流があったためか，学級編成替えをしたいという感じがない。

どの児童もおしゃべりは好きなようだが，話し合いはまだ上手ではなく，話し合いの方法を理解していないようである。

しかし，学級会が好きな児童……２９人，嫌いな児童……３人ということからもわかるように，学級会に対して関心と期待をもっているようである。好きな理由としては，自分たちの思ったことができるから・友だちといっしょにできるから・楽しいから・友だちが仲よくしてくれるからであった。嫌いな理由としては，話し合うのがいやだからである。

集会活動の経験は少なく，内容も貧弱であるが，係の活動は活発で，活動内容にも工夫の跡が感じられる。

話し合いは上手ではないが，話し合い後の実践には比較的熱心なので，今後の指導によっては豊かな実践活動が期待できる。

1.　実証授業　1

マンガらくがきはっぴょう会をやろう　　７月９日（金）第５校時

ア．話し合いに至るまでの児童の活動と指導助言

議題箱を開き議題候補を整理する
・ゲーム大会をしよう
・マンガらくがき発表会をしよう
・宝探し大会をやろう

議題候補を整理する。似ているものはまとめて，提出者の了承を得る。

放課後（議長団）

模造紙に似ている議題候補を整理してはり，帰りの会で知らせる。
グループで提案理由を考えさせる。

議題を決める
・マンガらくがき発表会をしよう
話し合いの順序を決める

帰りの会（全員）

ほかの人の考えで，よかったと思うことをメモさせる。

グループごとに自分の考えを発表し合う

帰りの会（全員）

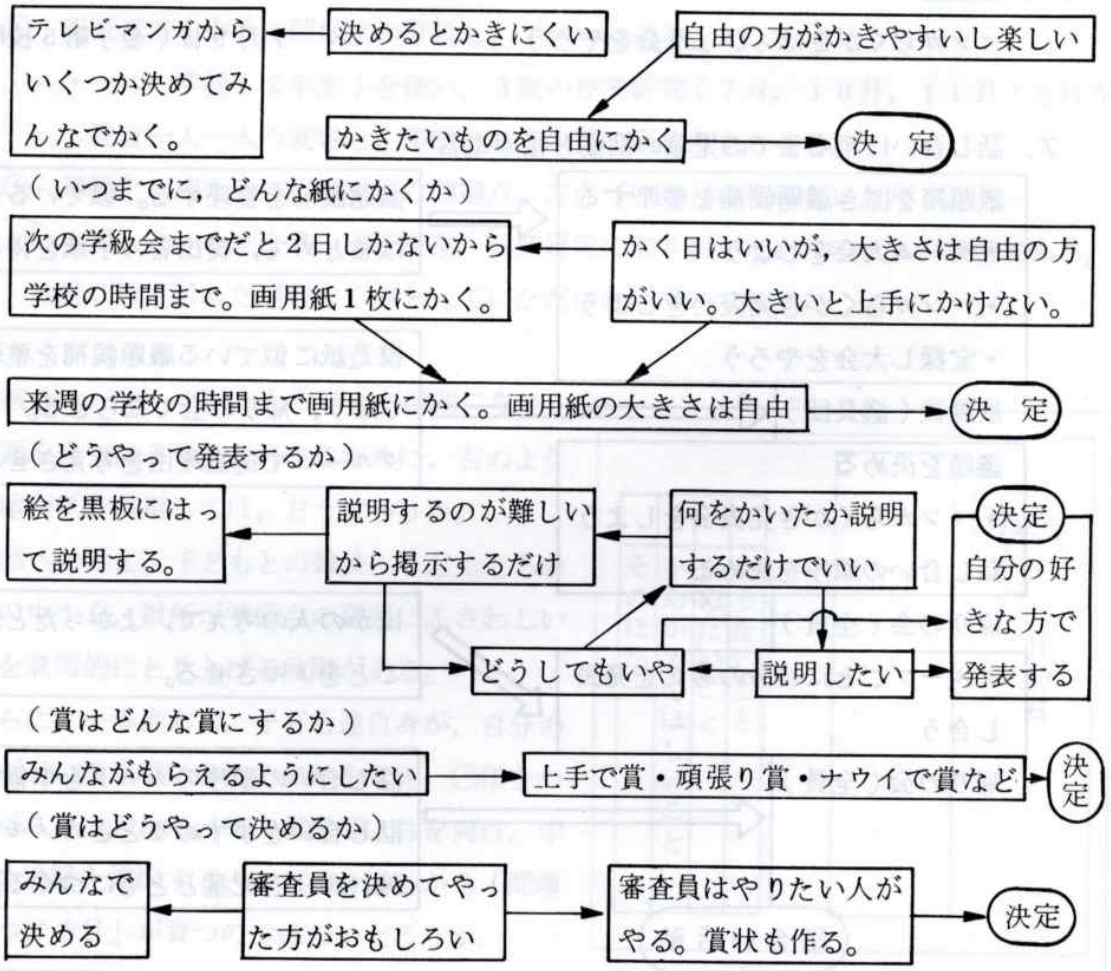
話し合いの順序のカードを準備する。
話し合いをすすめるときのメモ（実施計画）を児童とともにつくる。

話合い活動

イ．実施計画

議　　題	マンガらくが発表会をやろう
提 案 者	中　村　憲　一
提案理由	みんな，休み時間にマンガをかいています。きっと，みんなマンガをかくのが大好きなんだと思います。ぼくも大好きです。今まで，マンガらくがき発表会みたいなことをやったことがないから，やればきっと楽しいと思うからです。
話し合いのめあて	みんなで意見を出し合って，楽しい発表会ができるように計画する。
話し合いの順序	(1) どんなマンガやらくがきにするか　(2) いつまでに，どんな紙にかくか　(3) どうやって発表するか　(4) 賞はどんな賞にするか　(5) 賞はどうやって決めるか
司　　会	議長（岡田郁二）　副議長（高橋奈津美）
記　　録	ノート書記（三木富美枝）　黒板書記（鶴岡正寛）

ウ．話し合いの流れ



エ．実践活動

審査員になった7人の児童は，賞状と首からさげるペンダントを作った。賞状には，上手で賞，よく似てるで賞，ナウイデ賞，まあまあ賞，ほんものよりうまいで賞ということばが書かれていた。ペンダントは，牛乳のキャップに色紙をはったもので，リボンがつけてあり，首からさげられるようになっていた。

児童たちがかいてきた絵は，テレビマンガの主人公，野球選手とタレントの似顔，動物などであった。大きさも切手ぐらいのものから画用紙の大きさまでさまざまだった。

当日の会では，全員が前に出て，自分は何をかいたか説明していった。掲示発表を希望した児童は一人もいなかった。発表が終わった絵は1枚ずつ黒板にはっていき，発表が終わった段階で審査員がそれぞれの絵に対して賞を発表した。いくつかの賞については異論もあったが，楽しい会であった。

オ．児童の変容

（一　般　児　童）

2年生になって7回目の話合い活動であった。自分たちで話し合いを進めることはできない。発言も少ない。

しかし，司会を経験した児童の発言が目についた。これは，司会を輪番制にしているよさではないだろうか。

日常の生活においてもそうだが，男女の対立は少ないが，三つほどのグループの対立がある。それが話し合いにも出てきつつあるようである。相手の意見のよさを認める発言が少なくなってきた。反対に自分の意見を固執する傾向が出てきた。

（抽　出　児　童）

N男．今回も自分から発言しない。指名されても意志表示しない。

Y男．発言回数3回。自分の考えは言うが相手の意見のよさを認めない。

O男．発言回数5回。反対質問しかいわず，自分がどうしたいかもいわない。

S子．発言回数4回。賛成反対の理由をはっきり言える。考えに柔軟性あり。

O子．発言回数3回。常にE子とM子の意見に賛成する。

K子．自分からは発言しない。指名されると賛成反対だけ言う。

カ．研究協議会から

○話し合いの進め方の指導に工夫がほしい。2年生であっても，計画委員会を組織して十分な指導をすれば，自分たちで上手に話し合いを進めていけるのではないか。

○学年の終わりにはどのような学級会活動をするようにさせたいのか。そのためにはどの場面でどんな指導をすればよいのか，指導者は展望をもつべきである。

○活発な話し合いにするてだてとして，学級会カードを活用することと，提案理由の内容についてきめのこまかい指導をすべきである。

○今日の話し合いでは，どんな賞にするかに時間をかけて話し合わせるべきだった。

2. 実証授業　2

次の学級会で，がらくた交換会とクイズ３２人に聞きましたのどちらを話し合うか決めよう。　　１０月２６日（火）第５校時

ア．話し合いに至るまでの児童の活動と指導助言

議題箱を開き議題候補を整理する。
・係へお願いするもの
・帰りの会で話し合うもの
・議題になりそうなもの

⇦ 議題候補を整理する時にみんなで話し合うことは何か，考えて整理させる。

放課後（議長団）

議題を決める。
・どちらを議題にするか，次の学級級会で話し合うことに決める。

⇦ 時間をかけて議題を決定させた方が議題に対する関心が高まると考え，学級会で話し合って決めるように助言する。

帰りの会（全員）

話し合いの順序を決める。

放課後（議長団）

学級会カードに意見を書く。

⇦ 意見ごとのグループに分け，提案理由を考えさせる。
グループの話し合いを参考にさせて自分のカードに書かせる。

話合い活動

イ．実施計画

議　　題	次の学級会で，がらくた交換会とクイズ３２人に聞きましたのどちらを話し合うか決めよう。
提案者	藤　沼　夏　野
提案理由	がらくた交換会を議題にしたい人が１７人，クイズ３２人に聞きましたを議題にしたい人が１５人で，どちらを議題にしていいか決まらなかったから，今日の学級会で話し合ってどちらを議題にするか決めたいと思うからです。
話し合いのめあて	みんなで話し合って，自分の考えをはっきりさせて，次の学級会の議題を選ぶ。
話し合いの順序	(1)　どうしてやりたいのか，両方の意見の代表者の話しを聞く。 (2)　話し合って議題を決める。
司　　会	議長（斉藤梅生）　　副議長（藤沼夏野）
記　　録	ノート書記（小林俊治）　　黒板書記（黒木真世）

ウ．話し合いの流れ

（どうしてやりたいのか両方の意見を聞く）

（がらくた交換会）
この前の交換会はとても楽しかったし，お店屋さんのようにしたり，お金を作ってやったりすればもっと楽しくなる。

（クイズ３２人に聞きました）
２０分休みの時はうまくいかなかったけれど，こんどは学級会の時間にゆっくりやって楽しみたい。

（話し合って議題を決める）

○クイズはこの前やったけどおもしろくなかった。交換会の方がおもしろい。
○自分たちの準備が悪かったからだ。
○交換会とお店屋さんごっことはちがう。交換したものは自分のものになる。
○どうしても交換会をやりたい。交換会の方が楽しいに決まっている。

○上手にできなかったのは男子が協力しなかったからだし，もうがらくたがない。
○お店屋さんごっこはこの前やったばかりではないか。
○私たちもクイズをやりたい。工夫してこんどは成功させる。

このままでは決まらない。両方やってはどうか。

こんどの学級会で時間を半分ずつ使ってやる。
それまでにグループで準備する。やり方もみんなに説明する。

決定

エ．実践活動

互いの勢力が同等であり，どちらか一方を選ばなければならないという難しい話し合いになってしまった。

相手の意見のよさを認めるように何度も助言したが，自分の意見に固執することで終ってしまった。

そのため，以前行った「がらくた交換会」「お店屋さんごっこ」に比べて，盛りあがりのないものとなってしまった。どちらのグループも準備不足であったことも確かだが，それ以上に学級の全員がひとつの目的に向って協力してがんばるという場面がなかったことが原因であった。

クイズグループの児童で途中から，がらくた交換会のグループにかわりたいという児童が3人いた。帰りの会で全員にお願いしたが，がらくた交換会から役割が決まってしまったので，今からでは無理だと言われてしまい，クイズグループに残ることになった。

実践後にリーダー的存在でない児童から，自分の考えで決めなかったことを後悔しているという声が，両方のグループからでた。話合い活動，実践活動を通して多くの問題があったことを児童たちも知ったようである。

オ．児童の変容

（一　般　児　童）

議題に問題があったことも事実だが，今までの話合い活動に比べてマイナスの面が目についた。対立したままで終わるということはなかったが，今回は対立したままで終わってしまった。

話し合っているうちに，自分がやりたい方の意見を指示するというより，相手の意見に感情的に反対するという態度にかわってしまった。

比較的に和やかな感じで話し合えた前回までに比べ，今回はいやな感じを互いにもってしまったようである。

（抽　出　児　童）

N男．指名されて初めて発言した。グループの人の意見と同じことを言う。

Y男．反対意見を言っていたが，最後に相手の意見を認めた。初めてである。

O男．発言回数は相変わらず多いが，反対のための反対意見で終わった。

S子．全体を考えた折衷案が言えたが，受け入れられず，意欲をなくした。

O子．いつもより積極的に発言したが，E子・M子に影響されている。

K子．前回までと同じで，指名されて賛成反対だけを言う。

カ．研究協議会から

○座席が意見別に分けてあったが，あのような配置は対立を深めるだけで相手の意見を認めようという意識は生まれない。

○２年生という発達段階を考えると，自分の意見をはっきりさせ，どちらか一方を選ぶということはとても難しい。議題そのものに問題があった。

○学級会カードを書かせたが生かせなかった。活用できるように工夫しないと形式化してしまい，無意味になってしまう。

3. 実証授業　3

おとしもの箱を作ろう　　１１月２５日（木）第５校時

ア．話し合いに至るまでの児童の活動と指導助言

議題箱を開き議題候補を整理する。

取り上げられなかった議題候補を出した児童にお礼の手紙を書かせる。

放課後（議長団）

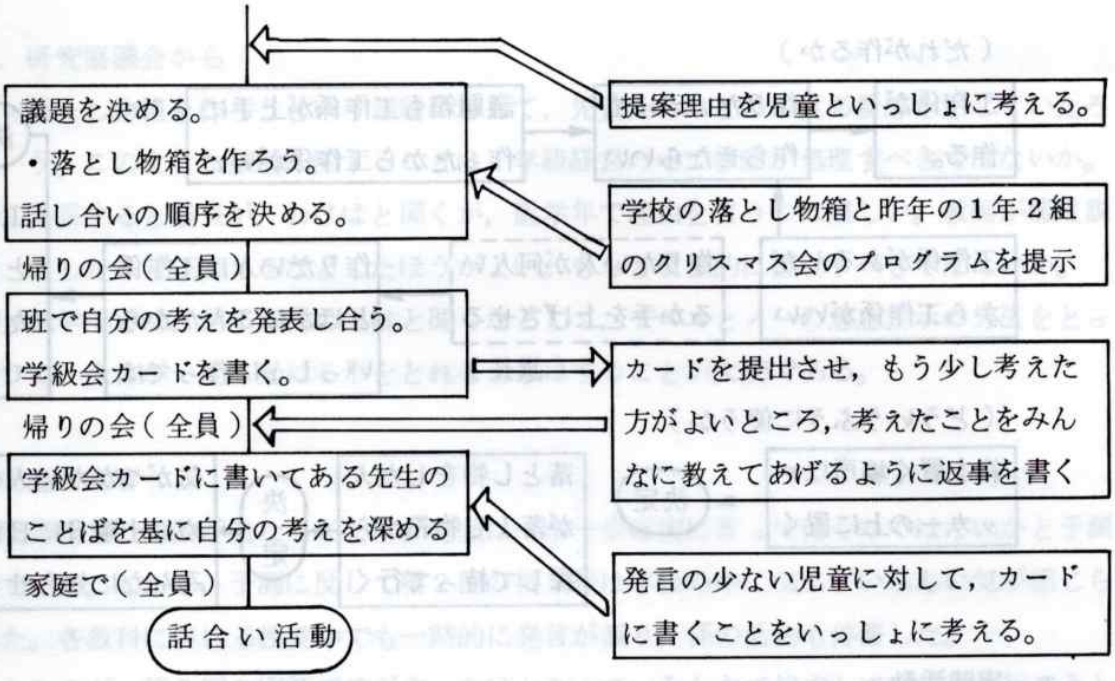
議題候補を掲示し，知らせる。

・クリスマス会を計画しよう。

・落とし物箱を作ろう。

どんなクリスマス会をやったことがあるか。落とし物箱は自分たちの生活に必要か。どちらを先に話し合うか考えさせる。

帰りの会

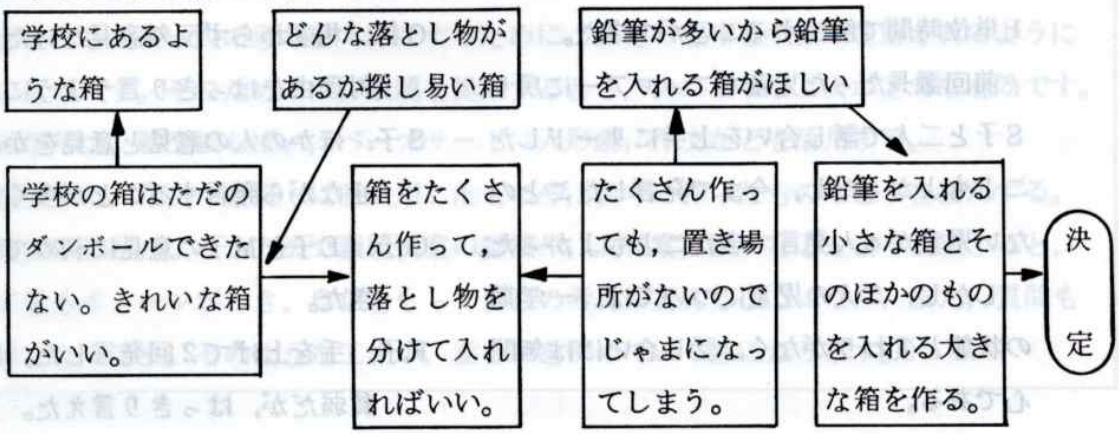


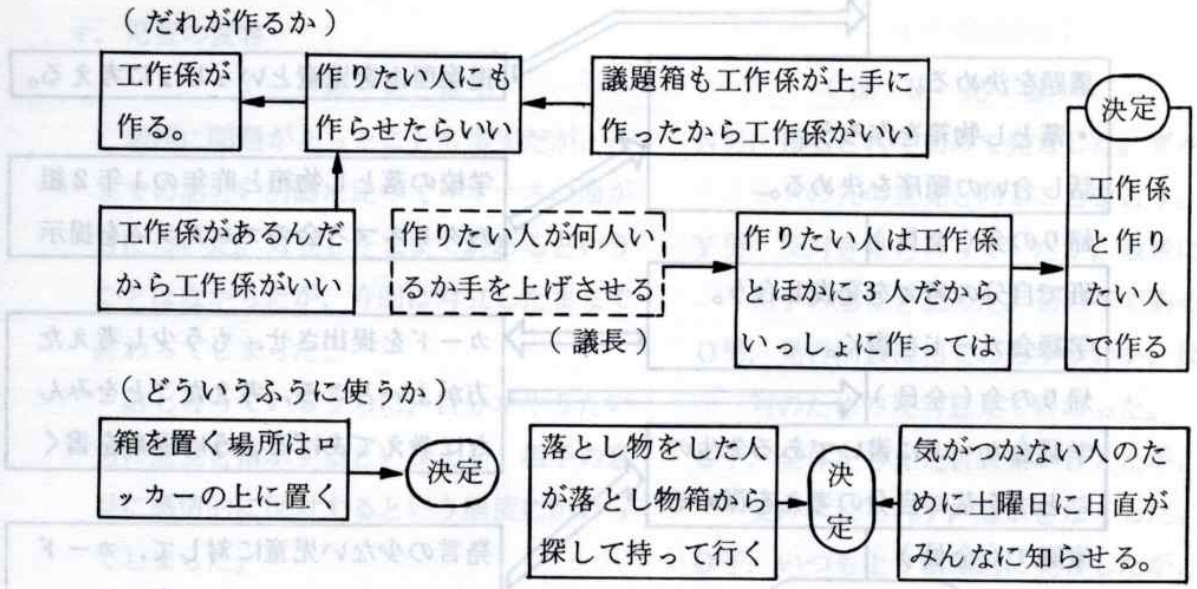
イ．実施計画

議　題	おとしもの箱を作ろう
提案者	桜　井　洋　美
提案理由	みんな落とし物が多いし，落とし物箱があれば自分が落とし物をしてもなくなる心配がない。探すのにもべんりだから。
話し合いのめあて	みんなで意見を出し合って，使いやすい落とし物箱を作れるように話し合う。
話し合いの順序	(1)　どんな箱を作るか　(2)　だれが作るか (3)　どういうふうに使うか
司　会	議長（内田喜之）　副議長（高野明子）
記　録	ノート書記（江柄成美）　黒板書記（中村憲一）

ウ．話し合いの流れ

（どんな箱を作るか）





エ．実践活動

落とし物箱は，鉛筆を入れる小さな箱とその他の物を入れる大きな箱を作ることになった。工作係と作ってみたいという児童3人で作り始めたが，思うように仕事が進まず，女子や日直になった児童から早く作るように催促されていた。いつのまにか話し合いで作ることになっていた児童だけではなく，ほかの児童たちも少しずつ助けるようになった。話し合いから一週間後に色紙やシールをはった落とし物箱ができあがった。

毎週土曜の帰りの会で日直がみんなに落とし物を示し，持ち主に返している。落とした児童が事前に箱から探して持ってゆくので土曜日に箱に残っている落とし物は少ない。

オ．児童の変容

（一　般　児　童）

実証授業2とは違い，相手の意見に対して無意味な反対はなかった。つけ加えや一部訂正の意見が多く，以前にも増した和らいだ感じの話し合いになり，めずらしく1単位時間で解決することができた。

前回議長だった児童がフォロアーに戻り，S子と二人で話し合いを上手にリードしたこともよかったし，今まで発言したことのない児童が4人発言できたこともよかった。

しかし，5人の児童については，一学期の状態と変わりがなく，話し合いには無関心である。

（抽　出　児　童）

N男．カードを読むだけであったが，手を上げて発言できた。

Y男．人の意見に対してうなずいたり，つけ加えの意見を言うようになった。

O男．相変わらず反対意見だけだが，反対理由をはっきり言うようになった。

S子．ほかの人の意見と意見をかみ合わせながら発言することが多くなった。

O子．E子とM子の意見に初めて反対できた。

K子．手を上げて2回発言した。内容は貧弱だが，はっきり言えた。

カ．研究協議会から

○落とし物箱を作ろうという議題に対して，児童たちはどの程度必要感を感じていたろう。このような議題に関することは，学級経営の中で教師が処理すべきではないか。

○発言すると議長が，わけはと聞くが，低学年で理由を言うのは難しい。教師が補足説明したり言い変えるなどしたほうがよい。もっと積極的に援助すべきではないか。

○低学年では，同じ意見の人はと聞くなどして，イエスとノーの意志表示の方法をとって，全体が一度に動ける形をとれるようにすることが大切である。

4．児童の変容

実証授業の回数が重なるごとに，児童は一歩一歩確実に育って行くのではないかと予測していた。しかし，予測に反して第２回の授業後は学級の中に気まずいふんい気が感じられた。各教科における授業中でも一時的に発言が減り，係の活動も停滞した。

ところが，第３回の実証授業がきっかけとなって，みんなで協力して生活して行こうというふんい気が現れてきた。たとえば，係の活動や当番活動などでは，自分の仕事以外はやらなかった児童たちが，友だちの仕事をてつだうようになった。授業中の友だちの発言に対して欠点を指摘するのではなく，一部を修正する意見が多くなり，授業も効果的に進むようになった。

学級会活動では，児童一人一人が自分の意見をもてるようになった。発言することに抵抗を感じる児童もいるが，小集団での話し合いでは発言するようになってきた。

個人的に大きく変容したのはＹ男で，反対意見しか言わなかったが，今では意見と意見の対立の間にはいって，両方の意見のよいところをみつけて発言するようになり，ほかの児童からも認められるようになった。

＜学級会コーナー　２＞――議題を提案する時の工夫

「学級会で発言しない理由はなんですか」という問いに対して，①　急に出された議題なので何を言えばよいか分からない。②　議題の意味がはっきりしない。③　議題がむずかしい。という理由が，どこの学校でも挙げられます。

子どもたち一人一人の意見を大切にするために，議題の意味を十分に理解されるようにしたいものです。そのためには，議題を提案するとき，次のような工夫がとても有効です。

○低学年は，絵や紙しばい，ペープサート，人形劇，作文などを活用する。

○高学年は，作文や資料（以前活用したものや，参考に作ったものなど）を活用する。

提案者が上記のような方法で議題提案の動機や，具体案，願いなどをよく説明すると，他の児童もイメージがわき，自信をもって自分の考えが言えるようになり，また，質問も出し易くなります。そのような工夫が，話合いを深めていく基になります。

Ⅲ　授業研究　1

学　級　会　活　動（話合い活動）

江東区立南砂西小学校
5年2組（男子19名　女子18名）
指導者　松　村　二　美

1. 主題との関連

○　議長団の役割分担は，比較的明確で役割も果たしやすいが，その他の児童が自分の役割を意識し行動するのは難しい。

そこで，すべての児童が発言や意志表示の機会をもてる学級会活動の指導法の工夫をし，単に発言回数のみを増やすのでなく，発言の質の向上をねらってみた。

○　児童の主体性を高めるために，できるだけ係活動，集会活動の中での話し合いを大切にする。

2. 学級の実態とこれまでの指導

○　学級の実態

学級編成替えをした学校である。

4年生の時，学級会の時間の確保が十分で，しかも，学年集会があったためか，どの児童も話合い活動には比較的興味関心を持っている。しかし，よく発言する児童には，まだやや偏りがみられる。それは，①反対意見を出すことに抵抗を感じる。②自分なりに結論を出してしまう児童が若干いる。等の理由による。

男女とも明るく素直で仲良く協力して仕事を進めることができる。

○　これまでの指導

・できるだけ発言する機会を多く持った。

（朝の会，帰りの会の際に順番に司会をする。給食時に今日のニュースを発表する。）

・計画委員会を定期的にもたせ，能率的に話し合いをすすめるようにした。

・生活班の話し合いの機会もできるだけ多くもたせるようにした。

・4年生まで固定していた議長団を輪番制にした。役割を分担することによって，議長団の身になって考え，次回から議長団を助けようという意識がもてるようにした。

・話合い活動は，各教科や日頃の学級経営を土台とするもので，常日頃から何でも言える学級に育つように努力してきた。

○　研究前と研究後の変容

・学級会が特に大切だと考えている児童が10人から28人に増えた。議長団の順番が

まわってくるのを待つようになった。反面，発言しにくくなったと言う児童も出て来た。

3. 本時の指導案

(1) 議題　5の2ミニ運動会をしよう。

(2) 活動の経過

ア．議題選定までの経過

先週，議題箱に入っていた議題，直接計画委員会に申し出があった議題，教師が日記から発見した議題は，次の通りであった。

① 野球大会をしよう。 ② 読書発表会をしよう。 ③ 5の2陸上記録会をしよう。 ④ 班対抗新聞コンクールをしよう。 ⑤ 係活動を見直そう。 ⑥ 自分達の学級会を活発にする方法を考えよう。・⑦ 給食の時間を有効に使う方法を考えよう。 ⑧ 5の2ミニ運動会をしよう。 ⑨ もっと男女仲良くするためには，どうしたらよいかみんなで考えよう。以上である。

以上の議題を検討した結果，⑤ ⑦ ⑨は，帰りの会等で，少しずつ話し合って決める。① は，つごうで三学期にとりあげる。⑥ は，少しでもはやく話し合った方が良いということになり，9月29日（水）の学級会でとりあげることになった。

② ③ ④ ⑧ が，最後まで残って，再度話し合った結果，一学期にスポーツレクリエーション的な集会を一回ももっていないということと，二学期に班替えがあり，班のつながりも深まっていないから……という理由で③ か⑧ ということになった。③ は，体育の延長という感じがするし，能力差も出ておもしろくないということで，⑧ に決まった。② と④ も二学期中にとりあげることに決まった。

イ．活動の流れ

① 計画委員会が，次回の議題を決める。（ 9月21日 火）

② 帰りの会で，議題を知らせる。（ 9月22日 水）

③ 各班で，意見を出し合っておく。（ 9月27日 月までに）

④ ③ の結果を計画委員会に持ち寄りまとめる。（ 9月28日～30日 火～木）

⑤ 計画委員会が原案を知らせる。（10月 2日 土）

⑥ 計画委員会の原案に基づいて話合う。（10月 5日 火と13日水）

本時$\frac{1}{2}$

(3) 本時のねらい

○みんなで話し合ってミニ運動会の計画をたてることができる。

○一人一人の児童が，原案に対し，自分の考えを持つことができる。

(4) 実施計画

第20回学級会活動の計画		10月5日（火）
議題と話し合いの役割分担	議題	5の2ミニ運動会をしよう。
	提案者	計画委員会
	提案理由	1. 9月になって新しく班がかわったので，班で協力し合いつながりを深めるためにやりたい。 2. スポーツの秋なのに春に運動会が終わってしまったのでもの足りないし，体もにぶってしまうから。
	議長団（六班）	議長 → 岡村 次郎　黒板書記 → 真壁 紀子 副議長 → 小川亜紀子　ノート書記→鈴木 晃雄
話し合いの順序	1. はじめの言葉 2. 学級の歌 3. 議題の確認 4. 提案理由の説明と質問 5. 話し合い ① 種目について（太田） ② プログラムについて（中島） ③ 係について（菓子野） ④ 係をどうやって決めるか（松原） ⑤ 賞状・賞品について（豊嶋） ⑥ その他（船山） 6. 決まったことの発表 7. 議長団からの感想・反省 8. 先生の言葉 9. 終わりの言葉	

(5) 指導上の留意点

○ 5の2ミニ運動会の内容をよりよいものにするために，一人一人の発言を大事にする。

○ あくまでも，班のまとまりや協力を深めるためにやるということを忘れさせない。

○ 全員が出場し，係も全員で分担できるようにする。

(6) 評価

○ 議長団や一人一人の児童が，自分の役割を果たしたか。

○ 全員が『5の2ミニ運動会』をやる意欲をもち，係の分担を決め，自分も一生懸命やろうとする気持ちを持ったか。

4. 研究協議のポイントと今後の課題

○ 計画委員に責任をもたせて提案させていたが提案した意見にやや固執していた。話し合いの中でみんなで修正してより良いものにするんだという気持ちを持たせた方が良い。

○ 議長団の最後の一言の中に副議長が成員への評価をしたか，どうか？

・意欲をもたせるため教師がやるべきだ。　・帰りの会等でやるべきだ。　・学級の実態によりちがう。学年差もある。毎回とりあげていたら時間的にも大変なので，年に何回か決めてやったらどうか？　等の意見が出た。

○ 議長団席を黒板の前からはずしたが，計画委員と議長団は，いっしょに座わったらどうか？

○ 集会活動の話し合いに2時間もかける必要があるのだろうか？ 話し合ったことはすぐやらないと児童の意欲がそがれるのではないか？（連帯意識を育てたい場合には，2時間じっくりかける場合もあっても良いのでは？）

○ 学級会が大変活発だったが，このように活発になるための手だては？

（低学年からの指導のつみかさね・児童の能力の開発・学級経営で話し合いの場を多くの三つにつきる。）

5. 事後の児童の感想

○ 副議長をもう一回やりたいです。その時は，議長を助け，初めてやった時以上にがんばりたいと思います。

○ 計画委員会の中で，ぼくが一番意見を言ってしまったので，もう少しほかの人にも発言のチャンスを与えたかったです。

○ みんなうまく意見が言えるかと，人のことばかり気になって，自分が言う時つかえた。

○ 隣のU君が発言していなかったので，思っていることを聞き出し，「こういうふうに言ってみたら」と教えてあげていたら，他の人にその意見を言われてしまい残念だった。

＜学級会コーナー　3＞――児童の自発性の芽を育てる

今からでもすぐできる，こんな指導

1. 児童の意見を大切に……出された意見が，反対意見で取りあげられなかった時，すぐに消さないで，残すくふうをしてあげよう。（色チョークで線を引くなど）

2. 話し合いの時の助言……無理だなと思われる意見が出た時も，助言により正常化しないで，時には，そのまま実践させ，失敗させてみてはどうだろう。「さあ今度はどうしたら成功するか」考えさせてみるのも大切なのではないだろうか。
（失敗を生かして）

授業研究 2

学 級 会 活 動 （話し合いの活動） 授 業 研 究

目黒区立東根小学校

1年3組 （男子２２名 女子１７名）

指導者 秋 元 桂 子

1. 主題との関連

一対一や小集団での話し合いの経験しかもたない入学したての一年生は，まだ一人一人が教師との結び付きの強い段階である。みんな1年生であるため，学級会での話合い活動のやり方も，担任の教師によって様々なようである。発達段階からいってもまだ早いという考えや，小集団での話し合いを充実させるべきだという考えもある。話合い活動を教師中心に進めるだけではなく，一年生の後半から児童にも司会を分担している例なども見られるが，いずれにしても低学年からの積み重ねが，高学年になってから話合い活動の質を高めていく要因といえる。そのことをふまえ，一年生を話合い活動の入門期と考え大切にしていきたい。まず指導の第一歩として，豊かな学級会のイメージや，話合い活動は自分たちで意見を出し合ってみんなで学級の問題を考えたり，集会の計画をたてていく楽しい時間である，という気持ちを持たせたい。楽しい雰囲気の中で，のびのびと意見を言わせるとともに「自分の意見をきちんと言える」とか「友だちの話は最後まで聞く」などの話し合いの基礎的態度も養いたい。そして，話し合いの形式や中身よりも，話し合うことができたという成就感や，計画した集会などができた成功感を大切にしていきたい。

一人一人の児童が喜んで参加するような話し合いを積み重ねることによって，自分たちの学級会であるという意識が高まってくると思う。また一年生であっても，児童の心理的負担にならない程度の簡単な議事進行の役割を経験させることで，話合い活動における一人一人の役割意識を芽生えさせていくことができるものと考える。

2. 学級の実態

声が小さくみんなの前で話すことが不得手な児童が多い。必要なことも教師に自分で言いにこられない児童がいる。積極的に話しかけてくる児童も少ないかわりに，自分の主張を通そうとして友だちともめる児童もいない。全体的におとなしく，発達遅滞児3名を含め，基本的生活態度の自立していない児童もいて，自発性に乏しい学級である。そこで四月から，大きな声で元気よくあいさつをする習慣をつけさせたり，日直に朝の会できのうの話をさせたり，帰りの会の司会をさせることなどに努めてきた。また，学習の場でも班活動を多く経験させ，係当番活動の指導に力を入れてきた結果，積極的にリーダーになる児童はいないが，協力して行事や集会をもりたてていくことができるようになってきた。また発達遅滞児3名の面倒をみながら，みんなで仲良く遊ぶことのできる学級である。

3. 本時の指導案

(1) 議題　かかりのしごとを，みんなではなそう

(2) 活動の経過

二学期は，一学期のお手伝い活動から，係活動をするように指導をすすめてきたが，自分たちの生活を支える活動であるという意識は薄く，教師の指示や注意がないと仕事を継続できないという実態が見られた。そこで１１月の始め，前回の学級会で必要な係を決め直させ，さらに児童の自主性を伸ばし，友だちの仕事に関心を持たせるために，本時の議題を設け話し合うように計画した。

(3) 本時のねらい

自分の係だけでなく友だちの係にも関心を向け，仕事への喜びや責任感や協力する心の芽生えを育てる。

(4) 実施計画

議　題	係の仕事をみんなで話そう　（提案者　教師）
話し合いたいわけ	友だちの係の仕事を知り，みんなで困っていることを考えてあげたり，仕事を見つけてあげれば，もっとみんなが一生懸命，係の仕事をする，よいクラスになると思うから。
話し合いを進める人	司会　教師とさしやさん（佐々木くん）　あいさつと歌（浅野さん） 黒板書記　教師と○×やさん（赤間くん） ノート書記　教師とノートがかり
めあて 準　備	みんなで話し合って係の仕事を考えよう。 係の絵カード
話し合いの順序	1. 学級会係の選出と紹介 2. はじめのことばと学級会の歌 3. 議題の確かめ 4. 提案理由の説明 5. 係の絵カードの順に話し合いを進める。 ○係の仕事と困っていることを発表する。 ○とくに困っていることをみんなで話し合う。 6. 話し合ったことを確かめる。 7. 先生の話を聞く。 8. おわりのことばとおわりの歌。

(5) 指導上の留意点

○　友だちの発言しているときには，思い思いのことを言わずに最後まで聞かせる。

○ さしやさんにさされたら，きちんと最後まで言えるようにさせる。

○ 一人一人の児童が喜んで話し合いに参加するように楽しい雰囲気をつくる。

(6) 評　価

○ 発言をしている友だちの顔を見ながら，最後まで話を聞いたか。

○ 進んで手を挙げ，話し合いに参加しようとしていたか。

○ 自分の意見をはっきり最後まで言えたか。

4. 研究協議のポイント（授業反省から）

○ 特定の児童に偏ることなく多くの児童が発言をしていた。中には理由づけをして意見を言っていた児童もいる。

○ さしやさんになった児童の表情がとても生き生きとしていた。もっと児童に議事進行を任せられそうである。黒板書記の子も，板書を工夫してあげればもっと活動できただろう。本時を見る限りでは，一年生でも司会をすることができそうであるが，いったい一年生に司会はどれほど任せられるのだろうか。

○ 困った問題が出された時，話し合う重要性を教師が決め取り上げていったが，児童の問題意識で話し合いの順番を決めるべきではなかったか。

○ 後半から教師が，議事を多くこなそうと司会のペースを早めたが，低学年では，話し合いの量をこなすより，話し合いそのものをゆとりをもって終わらせるべきである。そのためにも教師は，話し合いの中身を予想し見通しをもって臨まなければならない。

○ 話し合いの結果，「ドアがかり」をなくしてしまったが，そのことが本時のねらいに合っていただろうか。仕事への責任感を芽生えさせるのだったら残しておいた方がよかった。

○「ドアがかりが，ドアを閉めるのを忘れたら，気がついた人が助けてあげればいい。」という思いやりのある意見が出された。教師のその意見の取り上げ方が軽かった。よい意見は取り上げ，児童の心に働きかけ，豊かな心情を掘り起こしていく配慮が必要だ。

○「かわいそうだな。」とか友だちのことを思うつぶやきが聞かれた。意見にはならないが，友だちの意見に反応するつぶやきを生かすため，小集団での話し合いの機会を設けたらどうか。

○ 児童が楽しく話合い活動に取り組めるような工夫があった。

・ 話し合いを行う前にゲームをしたり歌を歌ったりして雰囲気をもりたてていた。

・ 学級会係になった児童にはメダルをさげさせていた。

5. 今後の課題

話し合いの予想をたてることが大切だという意見が出されたが，本時の話し合いで，どんな意見が出されるか見通しがつかず，教師のペースに児童を引っぱっていってしまったよう

に思う。それは，「本時の議題が児童にとって必然性のあるものだろうか。」という疑問が，授業の前日まであったからである。やっと学級会活動のイメージがつかめかかってきた一年生にとっては，議題選びの能力はいつ頃から身につけさせていけばよいのだろうか。自分たちで学級生活をよりよいものとしていくための問題意識を持った児童に育てたいので，今後は，議題箱を作り，議題をみつける力を身につけさせた。

また研究協議会で，「もっと先生は黙って児童に司会を任せるべきだ。」との意見が出たが，一年生段階ではまだ，教師が中心になってよいように思う。司会の仕方を身につけさせるより，一人一人が自分の意見をのびのび言えるように配慮したいからである。話し合いが，道徳的な責任感についての形式的なものにならなかったのは，児童が一つ一つの問題をその係の子の気持ちや，学級の問題という視点から意見を出し合い考えを深めていくことができたからであろう。「ドアがかり」をなくされた子も，その後黒板係の仕事を進んでやっている。

6. 児童の「学級会」についての感想（作文）

○ わたしは，学きゅうがすきです。先生が学きゅうかいがかりをつくったときどんなのかわかりませんでした。でもだんだんわかってきました。わたしは，学きゅうかいがかりのとき，さしやさんになりました。こんどは○×やさんをやりたいです。

○ 学きゅうかいがかりになるときは，○×やさんになりたいです。はらしまくんは，すごいいいいけんをいってじょうずにできます。ぼくもがんばっていけんをいっぱいいいます。

○ わたしは，学きゅうかいがかりをやるとき，ノートがかりをやるとちょっとむずかしかったです。でも学きゅうかいがかりをやってよかったです。それは，学きゅうかいがすきだからです。

○ おたんじょう日かいのけいかくをたてることがおもしろかった。おもしろいいけんがでたり，へんないけんが出たり，ふつうのいけんが出たりしたからおもしろかった。学きゅうかいがかりになったとき，ノートがかりのメダルをもらった。

＜学級会コーナー　4＞── 話合い活動における役割意識と計画委員会

計画委員会を十分に指導したあとの話し合いで，それ以前と比較してどうちがうか感想を聞いてみた。① 自分が何を考えなければならないかよくわかり，意見も言いやすい。② 決まったこともよくわかるので，これから自分が何をやったらよいかよくわかる。③ 議長団にとっては，みんなが話すことをよく知っているので，話がずれなくて会が進めやすいし，記録もとりやすい。……等の声が出た。

何をどのように話し合うか，自分は何を考え，何をしなければならないかを明確にすることが，役割意識を高めることに通じている。その意味で計画委員会の指導，助言にも力を入れたい。

Ⅳ　入門期の学級会活動を楽しく，いきいきと展開させるための試み

品川区立小山小学校　　青　山　啓　子

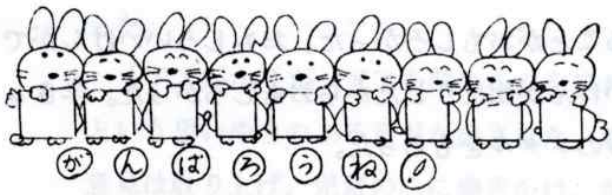
5月13日に第1回の学級会を開いて1年。回数も30回をこえた。何もわからず，自分のことしか考えなかった1年生が，今では，集団の一員としての自覚をもち，力を合わせて立派に話し合いができるようになった。週1回の学級会の時間を楽しみにし，よろこんで参加し殆ど全員が，活発に発言する。まだ，討論するというところまではいかないまでも，とにかく，自分の意見をはっきりと自由にのべ，人の意見をしっかり聞いて，よく考え，よく話し合うようになった。児童の自治範囲内での議題をとりあげ，それが，次々と形になって実現・実行されていったことが学級会を活発にした一因と思う。次にくふうと試みを記してみる。

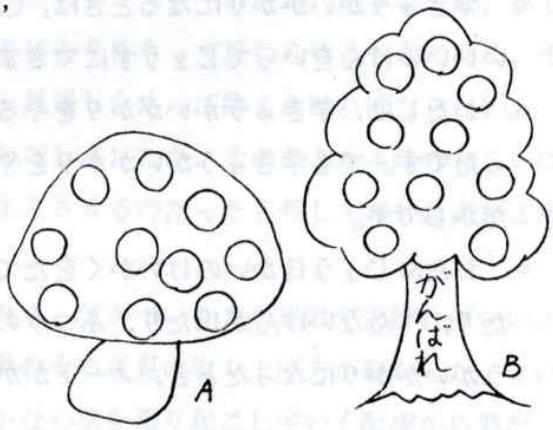
(1)　発言カード

発言の内容にこだわらず，1回でも発言すればシールをはる。

わら半紙半折大の画用紙。学期毎にかえる。

A・Bは，児童が考えたもの。ほかに，列車，ぶどう，ひまわりの図案のカードも作った。





(2)　レクタイム

チャイムと同時にきちんと着席させ，話し合いを開始しても，なかなか緊張していて意見が出せない。そこで，5分程ゲームや歌・ダンスなどを入れると大変リラックスして良いムードになる。これを当学級ではレクタイムとよんでいる。はじめのうちは，学級会も集会室をつかい，机などは一切置かず，ゲームなどから自然とそれぞれが椅子をもちよって円陣を作って開始した。現在は，レクタイムが必要ないくらい，気軽に意見をのべる。

※その場でできて，ふんいきがもりあがり児童がよろこんで参加するやさしいダンス例

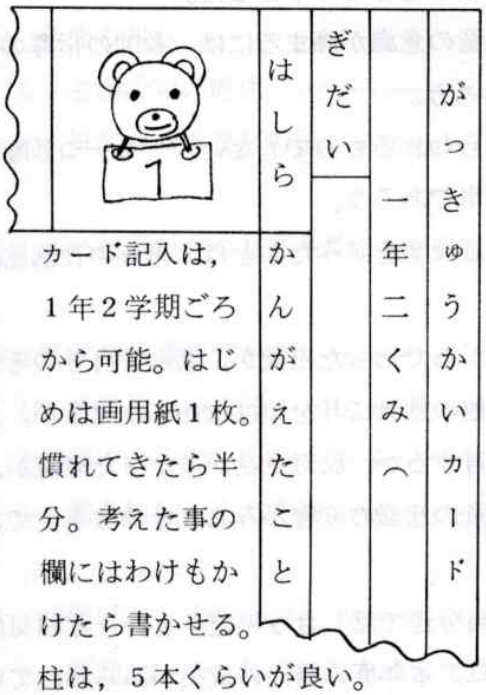
◎ディン・ドン・ダディ（ＳＫ－５４５）　◎アブラハムの子（０５ＳＨ５３９）

◎ホーキ・ポーキ（ＴＳ－４０３９他）　○タタロチカ（ＥＫ－５１７）

○アルプス一万尺（ＴＳ－４０３１）　◎印は，特に児童が好む。（集会にも最適）

(3) 学級会カード

議題の柱にそって各自が意見をまとめ記入し，学級会にのぞむ。発言がまとまり，活発になる。



カード記入は，1年2学期ごろから可能。はじめは画用紙1枚。慣れてきたら半分。考えた事の欄にはわけもかけたら書かせる。柱は，5本くらいが良い。

(4) 板　書

はじめは色画用紙半分くらいの大きさにマジックインキで書いた。次にファックス用原紙についている黒い紙にチョークで書き，マジックで張った。

(5) 特に児童がよろこんで参加し，その過程で，集団意識がたかまった議題

① グループの旗を作ろう　（10月）

② グループごとのワッペンを作ろう　（11月）

③ ジャンボカルタを作って遊ぼう　（1月）

実物大・ワッペン白ボール紙使用。色鉛筆で色をぬり，ニスをかける。後は安全ピン。まわりの小さい朝顔は，グループの一人一人をあらわすなど，いろいろと各グループが創意工夫して作成した。

○グループの旗　色模造紙の半分を使用。

○ジャンボカルタ　取札は，大判画用紙使用。1人が1～2枚作成。集会室いっぱいに広げて取る。読札の文も，勿論児童が考える。

―＜学級会コーナー　5＞―― どの子も議長はできる

議長指導も頭を痛める一つである。能力のやや高い児童に学期を通して，さらには年間を通して，議長をさせがちである。実は筆者も数年前までそのようにしてきたひとりである。学級会の研究を始めて，やっとその非に気づき，直していったのである。

議長団は各班でもちまわりとする。議長・副議長・書記はその都度かえ，同じ仕事にはつかないようにする。全員議長の下地は，日直である。はじめの学級会数回のうちは，比較的能力の高い児童から議長になるので，まあまあうまくいく。もちろん事前の計画委員会をきちんと指導しておく。しかし，教科学習の発表もままならない児童にも順番がまわってくる。どうしたものかとみていると，児童同士，つかえると「次は○○だよ」「○○というといいよ」とフォロアーの児童たちが助け舟をだしたのである。

思わぬ産物であった。児童が児童に助言するのである。もちろんそれで十分ではないがどの子も議長はできるのである。助け舟をだした児童をほめておくのも忘れてはいけない。

V　研究の反省と今後の課題

本年度の研究は，昨年度に引き続き「ひとりひとりが役割を意識し活動する学級会活動」をテーマに研究に取り組んできた。昨年度の研究の反省と問題点の上に立って，授業研究をすることによって児童の意識の変容と集団の質の高まりをさぐろうとした。

実践記録を読んでいただければわかるように，児童の意識が高まるには，教師の指導の手だてと積み重ねがないと活動は十分行われないであろう。

しかし，指導したからといって，すぐに効果があらわれるものでもない。一つ一つ教師が地道に指導法を実態に即して工夫していくことが大事であろう。

特に，本年度は，一つの学級を使っての３回の実証授業を試みたことは，児童の役割意識の変容をみるのに大いに役立った。

例えば，あまり発言しないで，他の意見に同調しがちであった児童が，進んで自分の考えを言えるようになったり，自分の意見に固執して，他の意見に耳を傾けなかった児童が，相手の意見を尊重するようになった。また，活発に発言するが，反対意見が多かった児童が，建設的な意見が言えるようになった。このように児童の意識の変容がみられたのは事実である。

また，学級集団全体としても，「自分達のことを自分達で話し合うのだ」という雰囲気に変っていって，集団の質の高まりがでてきた。そこに，本年度の研究の成果があらわれていたのではないだろうか。

研究は，一年間だけで十分のものとは言えない。本年度の研究を来年度に積み重ね，より確かな指導の手立てを解明していくことが今後の課題であると考える。

本年度は，各地区の部員の先生方が，校務多忙の中をやりくりして研究会場に集まり，互いに総知を出し合って，研究を進めたことは，本研究部の研究の深まり，人間関係の改善に大いに成果があったものと思う。数少ない会合ではあったが，互いに共同で研究する喜びを味わうことによって，今後の研究への意欲が生まれてきた。

終わりに，この一年間，遠方から時間をさいて出席いただいた部員の先生方，快く進んで授業研究を引き受けてくださった先生方，研究会場を提供してくださった校長先生，研究授業校の校長先生がたに厚く敬意を表します。また，研究授業のさい，適切な指導助言をいただいた講師の先生方に厚くお礼を申し上げます。

Ⅱ　児童会活動

テーマ　「よい校風を育てる児童会活動のあり方」

― 児童へゆさぶりをかける内容や方法をめぐって ―

Ⅰ　研究の視点 …… 35

1. 主題設定の理由 …… 35
2. 研究の内容及び方法 …… 35

Ⅱ　よい校風が育つ基底条件 …… 37

Ⅲ　児童の意識調査から …… 39

1. 意識調査の意図 …… 39
2. 調査の内容と方法 …… 39
3. 調査結果とその考察 …… 39～42

Ⅳ　授業研究（実践事例） …… 43

1. 運動会への主体的参加をめざす代表委員会の活動 …… 43
   「運動会のめあてを決めよう」　（代表委員会）　T区　B校
2. 子どもたちの発想を生かす手づくり集会 …… 47
   「全校スポーツ集会」　（全校集会）　S区　Y校
3. 地域社会との連携を図る感謝集会 …… 51
   「I小感謝集会」　（全校集会）　I区　I校

Ⅴ　研究の成果と今後の課題 …… 55

＜　児童会コーナー　＞

1. やっぱり学級会なんだなぁ?! …… (36)
2. 全校集会の財産 …… (38)
3. 汗を流して働く集会 …… (42)
4. 代表委員会を公開する …… (46)
5. 自分でやっている姿を見せることに価値がある …… (50)
6. 街の一隅からの手紙 …… (56)

○ 研究の経過

57. 5. 27	（木）	定期総会，分科会，組織づくり，今年度の研究の方向を求めて
57. 6. 29	（火）	研究計画，各校実践上の諸問題発表
57. 7. 13	（火）	研究の視点と仮説　研究内容と方法
57. 9. 17	（金）	授業研究　（実践事例　1） 「運動会のめあてを決めよう」　（豊島区立文成小学校）
57. 10. 19	（火）	授業研究　（実践事例　2） 子どもたちの発想を生かす手づくり集会 「全校スポーツ集会」　（新宿区立淀橋第一小学校）
57. 11. 22	（月）	授業研究　（実践事例　3） 「感謝集会」　（板橋区立板橋第四小学校）
57. 12. 13	（月）	集録の編集計画　執筆者決定　執筆内容の検討
58. 1. 12	（水）	執筆内容再検討　発表者決定　役割分担決定
58. 1. 21	（金）	集録原稿校正
58. 2. 12	（土）	研究発表会の準備　打ち合わせ
58. 2. 26	（土）	発表会リハーサル
58. 3. 4	（金）	研究発表会

研究・執筆者名簿

部　長	星野　隆治	中　野・桃園三小
副部長	小川　進一	新　宿・西戸山小
〃	水上　洋	小　平・第十一小
〃	宮下　花子	台　東・西　町　小
〃	池田　令子	文　京・礫　川　小
〃（発表者）	中川　秀男	港　・青　南　小
	梅木　栄子	新　宿・落合一小
（記　録）	味村美恵子	品　川・杜　松　小
（記　録）	川島　直子	大　田・大森三小
（発表者）	門馬　茂	豊　島・文　成　小
	加藤　明子	豊　島・長　崎　小
	三上　幸雄	北　・梅ノ木小
	剣菱美智子	北　・滝野川一小
	矢野　裕一	品　川・芳　水　小
	形部　操	足　立・千寿旭小

	小松　幸子	板　橋・赤　塚　小
（発表会）	若林　彰	板　橋・板橋四小
（司　会）	柏村喜久子	板　橋・若　木　小
（前部長）	渡辺　寿	練　馬・開進第三小
	坂本　陽子	中　野・東中野小
（司　会）	佐々木善光	足　立・梅島一小
	猪狩みどり	三　鷹・南　浦　小
（発表者）	穂積　輝子	新　宿・淀　一　小
	加藤　良子	新　宿・鶴　巻　小
	有村　久春	中　野・東中野小
	武山　陽子	千代田・永田町小
	金田　茂雄	荒　川・大　門　小
	前田　美子	青　梅・第　四　小
	藤田　祐三	豊　島・椎名町小
	長谷川雅枝	墨　田・二　葉　小

Ⅰ　研究の視点

1. 主題設定の理由

児童会活動部では，全体テーマの「豊かな人間性を育てる特別活動」―― 集団活動の指導原理とその実践的解明 ―― を受けて，次のように研究テーマを設定した。

「よい校風を育てる児童会活動のあり方」―― 児童へゆさぶりをかける内容や方法をめぐって ――

ア．「校風」の概念をどのように考えるか。

昨年度の段階で，「学校がその特色とする気風」ととらえておいた「校風」を今年度は，もう一歩深めて次のように規定した。「校風とは，その学校に生活する子どもたちが担い，学校独自の精神的雰囲気や行動様式の総称である」

イ．校風づくりにはたす児童会活動の役割

上の様に校風を規定したが，当然，児童会活動によってのみ校風が醸し出されてくるというものではない。しかし，全校児童を対象として展開される児童会活動は，自ずとその学校の特色が現れ，スクールカラー（その学校独自の精神的雰囲気や行動様式）がにじみでてくるのも確かであろう。

むろん，児童会活動は本来のねらいを持っている。校風づくりのために児童会活動があるのではない。校風づくりを視点にすえて，児童会活動のあるべき姿を求めることを通して，都内各校の実態を見極め，あるべき姿への道すじを明らかにしたいと考えて，上の研究テーマを設定した。

2. 研究の方向

(1) よい校風が育つ基底条件とは何か。どのようにおさえたらよいか。

その基底条件と思われる事項を仮説的にとらえ，児童会活動の役割や機能との関わりから考えていく。

各校の具体的な児童会活動の実践から，基底条件の表れを見出し，校風づくりにその条件がどのように働きかけているかを実証的にとらえる。

(2) 児童の「ぼくたち，わたしたちの学校」という意識はどのようなものかを明らかにする。

いわゆる児童の側から見た「校風観」の意識調査を通して，その実態をつかみ，以後の研究と指導のあり方に生かすようにする。

＜実態調査の概要＞

○都内，児童会活動部会研究幹事校　６年生１学級ずつ　，８０校を対象とする。

○１１月実施，１２月集計　調査結果の分析検討をする。

○児童会活動の内容に留まらず，広く学校生活全般に亘って，児童の「校風観」を探る。

○児童会活動に関わる内容を取り出し，校風づくりにはたす児童会活動の役割を探る。

○原則として自由記述形式を採り，児童の生の声をつかむことに努める。

○今後の指導及び研究に役立てる。

(3) それぞれの学校の実態や地域性に根ざした自発的，自治的な児童会活動の姿を実証的にとらえ，よい校風づくりにつながる活動過程を明らかにする。

このために授業研究や実践事例の分析や考察を大切にしながら研究を進める。

今年度実施した授業研究及び事例研究は以下の通りである。

① 運動会への主体的参加をめざす代表委員会の活動

「運動会のめあてを決めよう」 ― 代表委員会 ― T区B校 （紀要p43～46）

② 子どもたちの発想を生かす手づくり集会

「全校スポーツ集会」 ― 全校集会活動 ― S区Y校 （紀要p47～50）

③ 地域社会との連携を図る感謝集会

「I小感謝集会」 ― 全校集会活動 ― I区I校 （紀要p51～54）

(4) 「校風」の概念の明確化を図る。

先行研究，指導助言，協議会を通して，部会としての概念規定をする。

(5) 実態調査，授業研究による基底条件の検証と検討

(6) 今年度の研究成果の確かめ

○研究のねらいの到達度

○研究の内容について

○研究の方法について

(7) 今後の研究課題の確かめ

○残された課題

○その課題の解決の手がかり

―＜児童会コーナー＞―― やっぱり学級会なんだなあ?!―

事前の打ち合わせはしっかりやったし議長は6年生だし，きょうはうまくいくぞ，と安心し，「学級会と同じだから気楽にやりなさい。」でスタートした代表委員会。ところが，意見が出ない時，「僕は○○がいいと思う。だって～。」（ちょっと待てョ。なぜ議長が自分の意見を発表してるんだろう。えっ，こりゃまずい）とあわてて止めると，ポカンとした顔がこちらを見てる。「学級会の時に，議長の役割を教わったでしょ。」「だっていつもの通りにやっていいって言ったじゃんか。」終了後，議長たちと話しあい，なぜの疑問に答えが見つかった。そこで質問「学級会は好きかい。」「きらい。」とあっさり返ってきた。「だって，みんな勝手にさわいで，結局お説教だもんな。」「学級会は，最初からうまくはできないョ。少しずつやり方を教わって，自分達の力でやってごらん。楽しいョ。」うそだョとでも言いたそうな顔をしながら解散した子供達。学級会は叱られる場じゃなく，楽しい時間だョ。みんながそんな気もちをもったら，代表委員会も活発になるだろうな。

Ⅱ　よい校風が育つ基底条件

(1)　よい校風とは

先に主題設定の理由で記したように，私たちは校風を「その学校に生活する子どもたちが担い，学校独自の精神的雰囲気や行動様式の総称」ととらえた。ではこの校風に「良さ」を感ずる時，児童の内にどのような心情が働いているのであろうか。後述する実態調査から推察すると，そこには「誇り」の心情が見えてきていると言える。「学校独自の精神的雰囲気や行動様式」に誇りを感ずる時，よい校風が醸し出されていると言えるのではなかろうか。

(2)　基底条件を設けることの意義

校風は，育てられるものというより，醸し出されてくるものと考えるべきだというのはまさに正しい。校風は，言わば伝統の所産であり，長い時間に営まれたその学校の教育活動の総体の結果であると言えるのである。

だからといって，今日校風を育てていこうとする時，やみくもに教育活動を営んでさえいればそれが可能になるとは考えられない。校風を育てていくために，どんな項目をおさえなければならないか，またそれらの項目の間をどのように関連付けていくかという読みなしでは，けっきょく校風をいつか醸し出すことにはならないのではないか。ここでいう基底条件とは，このことである。むろん以下に記す基底条件が全てを網羅できているとはまだ思えない。現時点での考察であり一層今後深めていかねばならないのも確かである。

(3)　基底条件 ―児童会活動の関わりから―

①　実態の把握とねらいの設定

学校の教育目標がこれに該当する。どんな子どもを育てたいと考えるのかということである。校長を初めとする教師集団の願いがまず確実にされていることが大切である。またこの願いが児童にも共有されていることも，校風づくりの視点から見て，また大切なことである。

②　ねらいの達成に，はたしうる児童会活動の役割のおさえ

児童会活動の特質をふまえながら，児童会の諸活動と学校の教育目標との関わりが常に意図されていることが必要である。

③　役割をはたすための望ましい児童会活動の組織，活動内容，活動方法のおさえ

児童会活動の組織や活動内容もその学校の実態に根ざしていることが大切である。指導書等に示された組織や内容は，むろん私たちが近づくべき到達点を示している。しかし，その学校の実態として，仲々その水準にまで行けないでいることも少なくない。実態に基づきながら，一歩ずつ高めて行くことが大切である。

たて割グループの利用にかかわる実践例が増える傾向にある。これも，実態とねらいに基づいて行われることが最も大切である。ただ，やみくもに方法だけを学び，採り入れるといったことのないよう，自戒が必要である。

④　これらの指導に当たる指導者（集団）の配慮事項のおさえ

ここ数年児童会部会で最も多く語られた問題点は，「児童会活動についての教師集団の共通理解の困難さ」であった。全校児童で組織し，全教員で指導する児童会活動においてこの問題は常に当面する問題である。校風づくりを前提にすると，なおのことこの教師間の共通理解ということも大きな基底条件である。

(ア)　①－②－③が密接に関連し合っていることを共通理解したい。

(イ)　そのためには，特別活動およびその諸内容のねらいや特質について共通理解したい。

(ウ)　ねらいや特質に基づいて必要とされる指導上の配慮事項や，指導に際しての基本的な構えについて共通理解したい。

⑤　特別活動（児童会活動）担当者の配慮事項のおさえ

全教員で指導に当たるのは当然であるが，校務分掌，研究分担の関係で，どこの学校にも特活主任，特活部員が置かれていよう。この任に当たる担当者が，どのようなことに配慮し，どのように問題を提起するかということも，ある意味では大切な基底条件になってこよう。

(ア)　われわれも「なすことによって学ぶ」という指導原理に立つ。

学校の全ての教師が，特別活動（児童会活動）についての知識を持っているとは限らない。児童活動の指導に際して，児童に対して配慮する心構え ― あせらず，待って，にこやかに，一歩ずつ ― を持って，指導者集団にも働きかけるようにしたい。

(イ)　独善を排する。

学校の実態やねらいに基づき，児童会活動の内容や方法が展開される。とはいっても，それが独善に陥らないよう，充分な自戒も大切である。

―＜児童会コーナー＞―― 全校集会の財産 ――

全校集会の財産，それは精神面と物質面，両面からとらえられる。

集会の計画のさい，子供達は必ず「昨年はこうだった。だから，今年はこうしよう。」とか，「ワンパターンにならないためには，このような点で工夫できるのでは……。」と話し合っている。また，集会委員でない子供から，集会担当の私はよく声をかけられる。「先生，豆まき集会，今年も鬼が出てくるの。豆，みんなでまけるの，」……などと。

全校集会に対する，心は集会委員の子はもちろん，委員でない子供達の関心は高い。心に残るような計画が必要であると思う。

今，本校の資料室には集会に使用した物質的な財産がいろいろしまってある。子供達が作ったT.P活用の物語，人形劇の人形セット，動物の面，鬼の面，おひな様，こいのぼり，花かざりのアーチ，鈴わりの鈴など，代々の子供達の手作りのものである。新しい年にはこれらを活用したり，新しく作ったりしている。校風はこんな所に育っていくのでは…。

Ⅲ　児童の意識調査から

1. 意識調査の意図

本研究部では昨年度は，都内各校の児童会担当の指導者を対象にアンケート調査を実施した。伝統的な活動，特色ある活動，創意工夫のある活動が，よい校風の表れと前提して調査したのである。

今年度は，児童の側から見た「校風観」をさぐろうと考えたのである。前述したように，「校風」を精神的雰囲気，行動様式ととらえ，内面的には「誇り」の心情があるという考えに基づき，質問項目を学校生活全般にまで広げ，児童の「校風観」の総体をおさえた上で，後に児童会活動に関わる校風観にしぼりこむことをねらったのである。

2. 調査の内容　（※紙面の都合で言葉を簡略化した）

アンケート

1. 楽しみにしている行事，集会，朝会は？　それらで自慢できることは？
2. 自慢できる教室，プール，体育館，音楽室，運動場，学校園などは？
3. 特に気をつけているあいさつ，学校のきまり，やくそくなどは？
4. 特別使っている学校の服や帽子がありますか。
5. 特に力を入れて取り組んでいる学習があったら書いてください。
6. 集会を計画したり活動したりする時に，特に気をつけたり注意したりすることは？
7. 自分たちの学校をよくするために役立っている委員会や代表委員会の仕事は？
8. 委員会の活動で楽しみにしていることは？
9. 学校をはなれている時，自分は○○小学校の子どもだなと思うことがありますか？あるとすれば，どんな時ですか。
10. 他の学校の友だちに自慢できる自分の学校の良い所はどんな所ですか。
11. 校風ということばを聞いたことがありますか。(はい，いいえ)

㊟　11以外は全て自由記述

3. 調査結果　（回収　44校　　6年生児童約　1,600名）

設問　1

＜行事＞　内容種別の順位で示す。　遠足・旅行的行事 ― 体育的行事 ― 学芸的行事― ― 儀式的行事の順である。保健安全的行事，勤労生産的行事に入ると思われるものは見当らなかった。

＜集会＞　調査学級の内6人以上の児童が挙げているものを列記する。
お正月，クリスマス，音楽，七夕，ゲーム，リレー集会，体育，全校縁日，朝の歌コンクール，球技，六年生を送る会，1年生を迎える会，感謝集会

＜朝会＞　テレビ朝会，なわとび朝会，校長先生の話，鼓笛演奏
＜自慢できること＞　遠足でバスを使わないで歩いていくこと，老人ホームの人を招待する，みんなで仲よく力を合わせてやる，たてわりで活動する，鼓笛隊うまい。先生の話をよく聞く，いろいろな集会がある。

設問　2

音楽室・プールが屋上にある・プールに人工芝がしいてある・屋上にマテフレックスがしいてある・グランドが広い・岩石園がりっぱだ・プレイルームがある・アナライザー室がある・金管楽器がたくさんある・校庭のみかん・体育館が新しく色々な設備がある・花・緑がたくさんある・プールは日本で最初にできた・給食室がりっぱだ・校長室がりっぱ。

設問　3

会釈，廊下は走らない，右側を歩く，オアシス運動，下校時間を守る。集合は早く静かに。月，週のめあて，六本の木（元気，本気，根気，勇気，やる気，克己），忘れ物を取りに帰らない。あいさつをしっかりする，名札をつける。

設問　4

校帽使用している学校が多い。回収校の内ほとんどであった。制服は１０％程度。

設問　5

自主学習，体育，国語の本読み，合唱，作文，戦争や平和のこと，理科，社会，研究
※　学校の研究教科，重点教科などが出てきているようだ。担任の個性もでてきていた。無答が最も多い設問だった。

設問　6

気をつけたり注意したりすることが（ある　と　ない）との比は，ほぼ半々であった。ただし，学校差はかなり大きいといえる。例えば1校で，ある3対ない３３ということもあれば，ある３５対ない3といった具合である。
＜どんなことに気をつけているか＞
全員でできるものを計画する（下級生のことも考えてやる）。きびきびした動作，はっきりとした大きな声，みんなが楽しめるように工夫する。全員が係にとりくむ。お互いに静かにする。時間を守る。細かい所まで計画する。大切なことをまとめて発表する。グループを大切にする。活動を忘れないようにする。みんなの意見をとりいれる。反省をしっかりやる。みんながバラバラにならないようルールを決める。ふざけない。

設問　7

数の多い委員会を調査校４位ずつまでとると，　放送―集会―代表―美化―保健―学校園―運営―飼育栽培の各委員会の順となった。（類似名称は集めて集計した）

＜どんな楽しみを感じているか＞

・放送―きまった時間に放送（音楽）を流す。下校時刻を知らせる，朝会の用意，校内にためになることを知らせる。

・集会―集会の計画と運営，みんなの楽しむ遊び作り，司会がおもしろい。

・代表―学校全体についての話し合いができる，学校をよくする，みんなのこまっていることを解決する。集会や祭りを計画する。

設問　8

委員会の仕事自体の楽しさを書く児童が最も多かった。それ以外のものを挙げる。

友だちと話ができる。友だちといっしょに活動できる。といった友人とのふれ合いの場としての楽しさを訴える表現が多く目についた。先生とのふれ合いを予想してはいたが，ほとんどそれに類する記述は見えなかった。

設問　9

自分を○○小の子どもだなあと思う時，ある対ないの比は１対２である。ほぼ３分の１の子どもはあると答えている。

＜どんな時そう思うか＞

他校の友だちや親類の子どもと合った時，バッチをつけて歩いている時，どこの学校か聞かれた時，すばらしい集会ができた時，他の学校の自慢話を塾などで聞かされた時，自分の学校の悪口を言われた時，他の学校が自分の学校よりかわいそうだと思った時。

設問　１０

傾向として児童は，次の様な事がらで誇りを感じている。

・創立後の歴史の長さ　９０周年，１１０周年，１０７才

・自然環境の良さ　つげの木がある，学校園，いちょうの木，けやきの大木

・運動能力の高さ　水泳記録会の成績，○○体操，サッカーが強い

・施設・設備の良さ　プール，特別教室，グランド，岩石園，放送設備，スプリンクラー

・人間関係の良さ　仲が良い（異年令同士，男女）たてわり活動，協力し合う

・文化活動の高さ　図画コンクール入賞，合唱団，鼓笛隊がある

・卒業生の活躍　芸能，スポーツ，学者

・先生への信頼　やさしさ，親しさがある。とてもよくわかるまで教えてくれる。

・礼儀　あいさつ，会釈，礼儀正しい，話の聞き方がとてもよい。

・健康安全の習慣	学校閉鎖がない，事故が少ない，虫歯が少ない，欠席が少ない。
・給食のおいしさ	無農薬野菜を買っている。給食でいろいろなものが出る。
・特別活動について	他の学校にない行事をやっている。いろいろな行事がある。行事や集会がとても楽しい。委員会とかの仕事をしっかりやる。集会の準備をしっかりやっている。

設問　１１

校風ということばを聞いたことがあるとないとの比は，およそ１対４である。児童の中には予想通りまだこのことばが根付いているとは言えない。

4. 考　察

① アンケート全体を通して，児童にうかがえる「校風観」の内実には「誇り」の心情があると考えられる。「誇り」にうったえるというのはこの意味で校風づくりの一つの視点と考えることができる。

② 児童は，設問６にも見えるように，私たちが予期する以上に，豊かな心遣いを見せている。この心遣いが実際の活動にどう生かされているのかは，別に見極めなければならないだろうが，この児童の細やかさをより大切にしていかねばならない。

③ 設問１０に見えるように，校風づくりに児童会活動がはたす役割は，やはり大切だと考えられる。種々の児童会活動が充実して行われていることは，校風づくりの一つの条件になるのではなかろうか。

④ 「特色のある学校」が強調されている。その実践に際しては，本アンケートに見られるような，児童の側の見方，考え方，感じ方もより積極的に取り入れていくべきであろう。

＜児童会コーナー＞ 汗を流して働く集会

「みんなでつくった仲よし広場」での運動会が終わり，１１月の「感謝集会」の議題が提案される頃。折から台風後の強い風の後の木の葉を，主事さんや高学年の児童が掃除をしていた。その姿を見て，「みんなで校庭掃除をしよう」という声が聞かれた。やがて「みんなで働く集会をしよう」の議題が提案され，感謝集会の持ち方の工夫へと発展した。

話し合いの結果「たてわり班を中心にした活動」ということになり，代表委員会とたてわり班長会との拡大代表委員会へと話は進展していった。「日頃お世話になっている主事さんや，多くの人達に感謝することができる。」「働くことの苦労を知り合って，学校の人達みんなの気持ちがつながる。」などの児童の意見が生かされた。

校舎の内外から，公園，神社，そして通学路へと出かけて行った。先生も児童も，ほうきを持って，みんな汗を流して町をきれいにした。「汗を流して働く集会」を通し，清掃に対する意識が高まり，学校をきれいにしようという活動が広がってきている。

Ⅳ　授業研究（実践事例）

1. 運動会への主体的参加をめざす代表委員会の活動

「運動会のめあてを決めよう」―代表委員会―T区B校（１８学級）

(1)　児童会活動と本校の取り組み

①　求める望ましい児童像

本校の児童は，明るく，素直で，礼儀正しいとよくいわれる。しかし，自主的な活動や創造性に欠ける面が指摘され，この数年，「生き生きとした学校生活」のできる児童の育成に努めてきた。

昭和55・56年度は，主として特別活動の「学級会活動」を取り上げて，児童の自主的かつ創造的な活動を育成してきた。今年度も引き続き，その面の指導に努力することはもちろんであるが，学校全体を考えて，話し合い，実践に結びつける児童会活動にも，全職員で，指導にあたっている。

教育目標
みんなかんがえて
みんななかよく
みんなげんきに

⇩

◎所属する集団の一員としての役割を自覚して，集団の運営に進んで参加し，その向上発展に尽くす態度を育てる。
◎他の成員と協力して，楽しく豊かな生活を築くことができるようにする。

②　活動の実態

○児童会活動の組織

代表委員会
- 4年以上の各学級代表２名
- (3) 各委員会代表１名
- クラブ代表（必要に応じて）

議長団
プログラム委員会

○左記の組織により毎月第２，４週の金曜日，６時校に会を開く。１，３週の金曜日に，議長団と５，６年２名ずつと提案者でプログラム委員会を開き，会の準備をするようにしている。

○委員会活動は，５，６年の全児童が，１１委員会に希望を中心に所属し，第１，３週の６校時に会を開き，常時活動をしている。

○集会活動は，毎週土曜日の朝会時に児童集会として１５分間，集会委員会を中心に会を開く。ロングの集会は，代表委員会主催で，全校スポーツ大会，七夕集会，勤労感謝のつどい，クラブ発表会，六年生を送る会などを実施している。

③　指導上の配慮

○今までの代表委員会主催の集会などは，伝統として引き継ぎ，児童のアイデアを生かす方向で，行うようにし，できるだけ，教師の助言，指導を少なくする。代表委員会からの話し合いの記録はすぐに印刷し，全児童とともに全教師にも知らせ，共通理解をはかり，児童の指導にあたる。

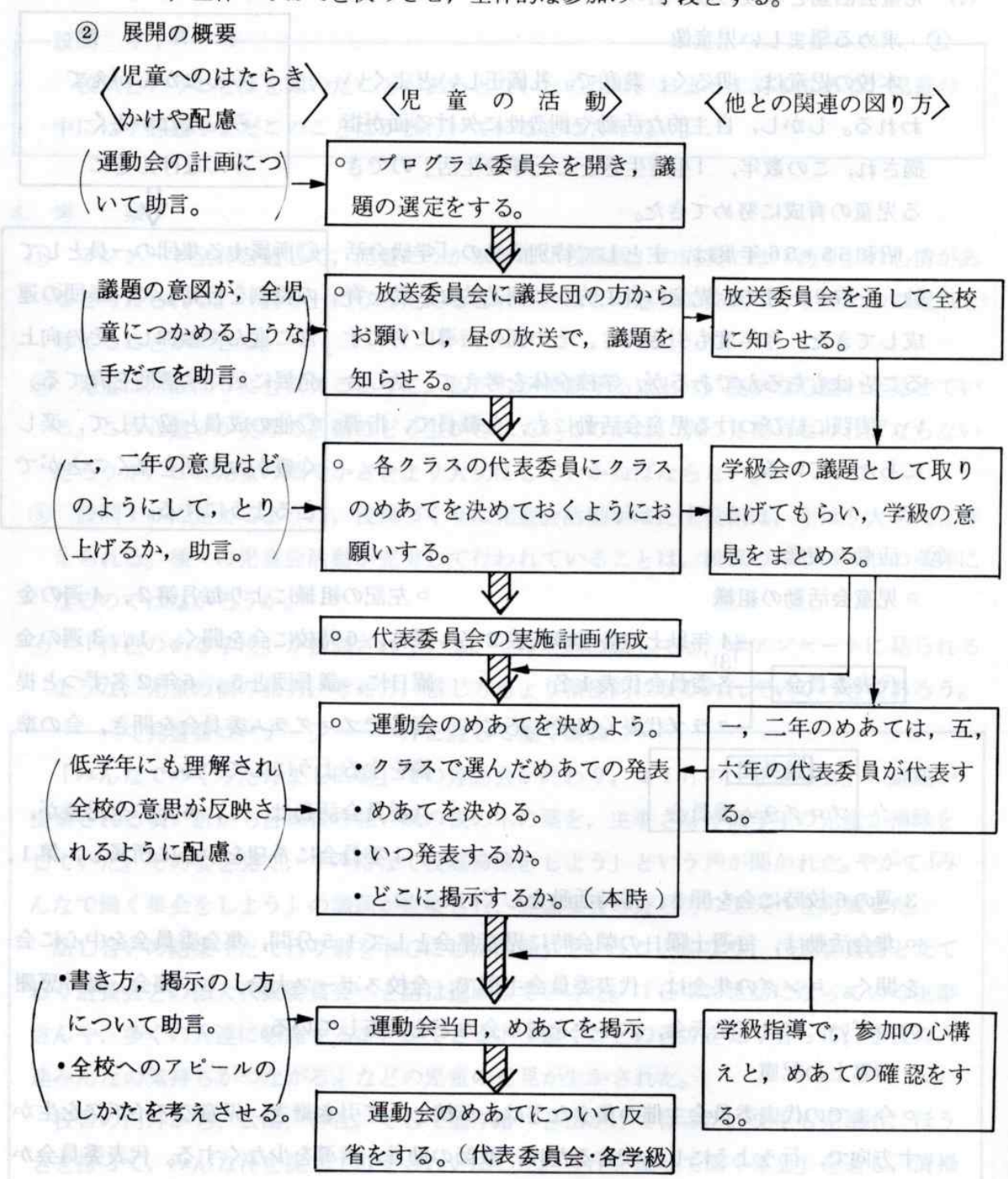
(2) 「運動会のめあてを決めよう」をめぐって

① 活動のねらい

運動会のめあてについては，昨年度まで，学校行事であるということから，教師側から，全体のめあてを提示し，それをもとにして，各学級でのめあてを決めていた。

本年度は，議長団やプログラム委員会での話し合いで，各学校から出ためあてをもとにして，全体のめあてを決めさせ，主体的な参加の一手段とする。

② 展開の概要



③　活動の実際

ア．事前の活動

二学期ではじめての代表委員会で，プログラム委員会を開き，クラスごとに決めていためあてを，みんなで一つのものを決めては，ということで，議題化された。学校全体のものとするために，昼の放送を通じ，みんなに呼びかけた。学級会で，各クラスのめあてを一つ決めておくように，各クラスの代表委員に依頼した。そして，短冊にクラスのめあてを書いてもらい，代表委員に臨んだ。

イ．実施計画

第１４回　代表委員会　　９月１７日（金）　６校時

議題	運動会のめあてを決めよう				提案者	議長団	
提案理由	運動会が９月２６日にあります。運動会をよりよくするために，みんなで一つのめあてを決めて，それにむかってはげんでいくようにすれば，いい運動会になるのではないかと思い提案しました。						
議長	Ｋ．Ｓ	副議長	Ｙ．Ｍ，Ｙ．Ｋ	ノート	Ａ．Ｎ	黒板	Ｋ。Ｈ，Ｊ．Ｄ

時間	話し合いの内容と順序	留意点
	1. はじめの言葉	
	2. 議題の確認	
５分	3. 提案理由の説明	・提案への質疑，特に主旨に賛成の意見がたくさん出ることによって意識も深めることができる。
	4. 提案理由への質問	
	5. 話し合い	
	① クラスで選んだめあての発表	・クラスごとに発表させる。
	② めあてを決める	１，２年のめあては，５，６年の代表委員が，かわって発表させる。
	③ いつ発表するか	
３５分	④ どこに掲示するか。（全校へのアピールのしかた）	・低学年にもわかり全校生にあてはまるものを選ばせる。
	6. 決まったことの発表	・③，④は，時間があったら，決めさせる。
５分	7. 先生の話	
	8. おわりの言葉	

（評価）　よりよい運動会を考えて，めあてを選ぶことができたか。

ウ．当日の活動

各クラスのめあてを出し合い，その中から，低学年のことも考えて，二つのめあてを選ぶことができた。

エ．事後の活動

運動会の当日，選ばれた二つのめあてを，三階から一階までとどくような大きな紙に書き，掲示し，児童会議長が，式次第の中で，みんなの前で，読んだ。

(3) 実践事例の考察

○ 育ちつつある子どもを信じるところからの出発

過去2年間，学級の重点研究として学級会活動を取り上げ，児童の自主性を育成し，創造的な活動の展開に心がけてきた。そうした試みのなかで，「生き生きとした学級や学校生活をめざそうとする児童の姿」が着実に根づきつつあるという感触から，「育ちつつある子どもたちを信じ，思い切ってまかせよう」との一致をみた今回の議題であった。

子どもを信ずる教師集団の願いが，運動会への主体的参加をめざす児童のねがいと一致点をみたと言ってもよいのではないだろうか。

○ 学校の目標を共有する子どもたち

各学級から持ち寄られためあては，運動会の主役である子どもたちの心意気が満ちあふれ，自分たちの力で，もり上げ成功させようという意気ごみが強く表れていた。また，それらの言葉の中に，「みんななかよく」「みんなげんきに」など，学校教育目標に通じる表語が数多く見られ，ねらいとする目標が，子どもたちのなかに息づいていることに喜びを感じた。最終的には「文成の3つの目標を守って思い出に残る運動会にしよう」と，「力を合わせて楽しい運動会にしよう」に落ち着いたが，話し合いの過程における子どもたちの意識の中に，本校の教育目標が生きていることに，深い感動を覚えた。

○ 自主的な実践を通し根づかせよう。

自発的・自治的な実践活動を促し，なすことによって学ぶ子どもたちの成就感こそ，誇りに結びつく。そして，その自校に対する好ましい誇りこそ，よい校風に通じるものであるとの実感を得た。

―＜児童会コーナー＞―― 代表委員会を公開する ――

S校では，運動会の標語を各学級から一点ずつ出して，代表委員会で，低・中・高学年の分として各一点ずつ決めている。本年は，その代表委員会の様子をビデオに撮って，昼に全校放送をした。

今までは，決まった標語にもあまり興味を示さなかったが，本年は自分たちの出した標語がどのような過程で一つにしぼられていくのかが，「なるほど」と納得され，全員に浸透した。また，自分のクラスの代表が発言すると，「いいぞ」「がんばれ」などと称賛や応援のことばが出て，代表委員も晴れがましい顔をしていた。中学年では，どういう児童が代表委員になったらよいかという話し合いも起こったし，次回の代表委員会では，いつになく早い集合で，ビデオの反響が話題となった。

発表の場を設けるとか，認め励ますことが効果的だとかいってもなかなか具体化することは難しい。しかし，体育館で代表委員会を開き，5，6年生が参観する学校もあるし，また，校長以下全校の先生が参加してくださる代表委員会もある。

2. 子ども達の発想を生かす手づくり集会

「全校スポーツ集会」 ― S区Y校（１８学級……含む心障学級２）

(1) 児童会活動と本校の取り組み

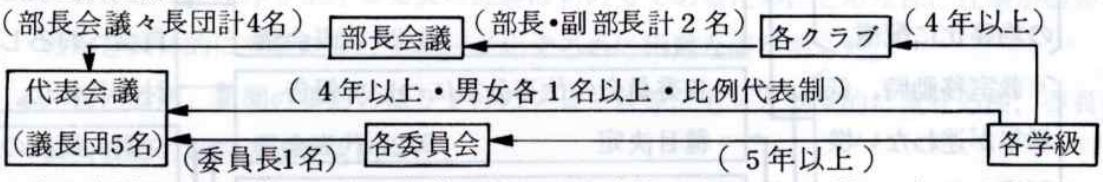
① 求める望ましい児童像

本校教育目標は，○豊かな情操を身につけ自他の人格を重んずる。○責任を重んじ勤労を喜び自主的に実践する。○真理を愛し創造性をもつ。○強い身体を育て健康安全の増進につとめる。となっている。

児童活動としては，先の学校教育目標を受け，全教職員の共通の理解（本校教育課程，指導に於ける重点，特別活動の項にうたわれている。）に立って，自主的，主体的，連帯的な自治精神を身につけた児童を，望ましい児童像と考えて指導にあたっている。

② 児童の実態（含む教師の実態）

○児童会組織の紹介



○定例会議及び活動数は，代表会議は月３回，委員会活動は毎月曜日，部長会議は月１回，クラブ活動は毎木曜日である。代表会議については臨時会議が多い。（任期通年）

○話し合いのルールが守れず，投げやりで意欲に欠ける児童が多い。この事は，各学級をはじめ全般に適切な指導がなされずに放置されているケースのためか。ときには，むしろ児童が話し合いを望んでも教師側からこわす場合がある。他の活動の場に於いても，児童の自主的活動を教師が取り上げてやってしまったりする。

③ 指導上の配慮（含む教師への配慮）

○児童の自発的・自治的活動に対する教師の共通理解を得るのに非常な困難をきわめ，事ある毎に共通理解をうったえ，その問題に関する資料も特別に何回か配布している。

○児童生活全体にかかわる諸問題を，児童自身が創意工夫しながら解決していく中で，主体的・連帯的な自治精神を学んでいけるよう指導助言していく。

(2) 「全校スポーツ集会」をめぐって

① 活動のねらい

スポーツ集会当日の成果のみではなく，全日程の児童の活動過程を大切にする。

○スポーツ集会の実施という大きな問題を解決していく過程で，自主的・主体的・連帯的な自治精神を学んでいく。

○みんなで協力してひとつのものを作り上げていく過程で，お互いを理解し思いやりを深めていく。

○自分達の手でスポーツ集会を作り上げ，学校生活をより楽しいものにする。

② 展開の概要（スポーツ集会に於ける活動の重点）

児童へのはたらきかけや配慮	児童の活動	他との関連の図り方
○自分達の手で作り上げていくことを理解させる。	○年間行事予定に従ってスポーツ集会について話し合う。 9/4 代表会議	○各学級代表による報告及び代表会議だよりによる全校への文書報告。
○議長団の事前指導。	○各学級からの意見吸い上げの方法，分担，司会について 9/9～10 代表会議	
○各学級担任は10分間の導入を行い会がスムースに流れるよう助言。	○第1回一斉学級会（学級別） 9/11	○代表会議員が，各学級に出張，直接意見吸い上げ。
	○出張しての意見・様子・感想報告 ○たて割班作成。 9/13 代表会議	
○各学年・男女数の均等化に配慮。	○第2回一斉学級会（班別） 9/18	○班毎の取り組み（旗づくり等）
	○各班・各学級からの報告 ○各委員会の仕事内容と分担 9/20 代表会議	○仕事内容を各委員会へおろし，検討・具体化。
○教室移動時，低学年が迷わない様配慮。	○各委員会の仕事分担について報告 ○種目決定 9/27 代表会議	○個人競技の競い方を各学級で検討。
○全委員会が仕事を分担する。	○スポーツ集会の取り組み・実践 9/30 各委員会	○各学級代表による報告及び代表会議だよりによる全校への文書報告。
○低学年への配慮をした種目決定となる様助言。	○たて割班競技ルール決定 ○主事さんへ協力依頼について 9/30 代表会議	
○必要な用具準備	○スポーツ集会の取り組み・実践 10/4 各委員会	○美化委員会ポスター作成・掲示。宣伝活動。
○学年差を考え，ハンデー・ペナルティーの助言。	○個人競技ルール決定 ○予行練習について ○仕事の進行状況確認 10/4 代表会議	○放送，新聞委員会，インタビュー，速報を全校に流す。
○各学級会の話し合いを基に，学年毎に決定。	○予行練習（たて割班の並び方，なわとび練習等） 於・校庭 10/5	○図書委員会，ルール，技術向上のための紹介発表
○班担当教師による指導・助言。	○予行練習（たて割班，最終打ち合わせ会） 於・各班別教室 10/6	
○教師の補助活動	○スポーツ集会当日 10/12	○遊び委員会，昨年のチャンピオンの登用。
	○主事さんへのお礼 10/13 議長団	
○評価・反省し，次への意欲をもたせる。	○各学級・各委員会・代表会議反省，まとめ 10/13～11/8	○代表会議，反省集約を全校へ報告。

③ 活動の実際（含む教師の活動）

ア．事前の活動

a．高学年あるいは一部児童のスポーツ集会にしないために，意見吸い上げの場として全校一斉学級会を行った。初めての経験でお互いにとまどいが見られたが，こういう学級会は良かったとの感想が出された。

b．一斉学級会での意見吸い上げの場で4年生から，代表会議で用意されていなかったにもかかわらず，スローガンを作って欲しいとの意見が出された。

c．進級カードの仕事を割当てられた委員会で，仕事の進行確認の代表会議席上で，「先生が配るからやらなくてよいと言われた。」と発言し非難を受けた児童が，会議終了後，会議指導者の元に「どうすれば良いのですか。」と聞きに来たので，「スポーツ集会はあなた達がやるのでしょう。自分達で話し合って決めたのだから，どうしたら良いか自分で考えなさい。」との助言をした結果，自分で判断し全クラスに配布した。

d．自分達の手で作り上げる集会の経験は初めてであるため，どんな係，仕事が必要なのかを具体的に考えたり，イメージ化するのに困難な面があった。

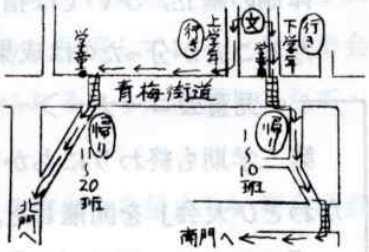
e．校内放送，新聞の事前の盛り上げのアピール等，もっと効果的に流せる様，委員会担当教師の助言の不足もあった。

f．児童の自主的・自治的活動として児童がとり組んでいるにもかかわらず，プログラムを教師が書いてしまったり，進級カードを先生が配るからやるなと言ったり，全校一斉学級会の導入時，他のことをやらせたり，話し合いの時間をとってもらえない学級があったりした。

イ．当日のプログラム抜粋（当日の係は各委員会が担当）

内　容	時間	内　容	時間
○開会式	9：22	○食後の遊び	12：50
○準備体操	9：30	○整理体操	13：00
○個人競技	9：40	○表彰式	13：20
○班対抗競技	10：25	○閉会式	
○昼食	11：30		

＜教師用引率案内図＞



ウ．当日の活動

g．上級生で思いやりに欠けている部分があり勝手な行動が目立ったが，わずかながら下級生が上級生に甘え，上級生がそれに答えている場面も見られた。

h．一部委員会は当日の役割をその場で決めるような場面があったり，児童の仕事を教師が代ってやってしまったり，児童が困惑していても自治活動なのだからといってそっぽを向いている等，教師の適切な指導の欠如が見られた。

i．教師はプリントを読んでいないためか引率しなかったり，順路を間違えて他の学年にまぎれ込んだ組があった。また，競技中，決まったルールを教師が破って違う指示

を与え，進行の妨げとなった。

エ．事後の活動

j．各学級，各委員会，代表会議は反省会を開き，文書で代表会議に報告し，議長団はそれを集約，解説を加えて文書により全校に発表した。

k．たて割班で創意工夫をこらした旗を体育館にかざり，チームの表彰状は児童会議室前壁面に掲示して全児童に紹介した。

1．反省会を先生が何もないからやらなくて良いと言ったので何もやらなかった，という報告が，ある委員会から代表会議に出されたが，自分達の反省なのだから次回までに反省をして来るようにと席上で決められ，次回に反省会の結果が報告された。

(3) 実践事例の考察

考察1. (2)の③のa，b，c，l等は，自治につながる芽と考えられる。

考察2. (2)の③のgは，上級生と下級生の連帯感を育む芽と考えられる。

考察3. (2)の③のe，f，h，i等を改めることが指導上必要である。

校風とは伝統であるとすれば，回を重ねて考察3を改め，考察1，2，を育てることが良い校風を作ることにつながると考える。

(4) 活動の成果と今後の課題

本年度初めて行われた児童の手による集会を通して，児童の中に，自分達の問題は自分達の手で解決しようとする態度や連帯感，意欲が生まれつつあることは一つの成果であり，この芽をどう伸ばし広げていくかが今後の課題である。次に，低学年からの活動経験がいかに大切であるかということと，学級担任の影響をいかに受けるかということがはっきりしたのは成果と同時に課題である。最後に，研究を通して，児童活動の共通理解や指導体制の確立，ひいては指導に際し，指導者自身の自主性，主体性，自治性が重要なカギとなることが分ったのは成果であり，指導者自身の自己変革を迫られる課題でもある。

―＜児童会コーナー＞―――自分でやっている姿を見せることに価値がある―

第二学期も終わりにちかい１２月中旬のことである。集会委員会が中心になり，「全校なわとび大会」を開催した。

「これから，学年ごとに３分間とびます。失敗しても続けてやってください。笛の合図で始めます。用意……ピー」

寒風の中，みんな夢中で縄とびを続ける。２・３回でだめになる子，規則正しく上手にとぶ子，上下左右に動きの激しい子……でも一生懸命にとび続けている姿は爽やかである。

私も学級の子の中に混じって，一筋の汗を流した。ふと，正面にいる集会委員を見るとどうだろう。何人かの子は，失敗してしまったのか続行しないで見張り役みたいにして，「失敗しても，早くやりなさい」と涼しい顔。二年生に「六年生の委員はやらないで，ずるいよ」といわれて，ちょっぴり当惑した様子。そこには集会委員の特権意識みたいなものが感じられた。自らも模範を示す姿勢が欲しいものである。

3. 地域社会との連携を図る感謝集会

「Ｉ小感謝集会」 ― Ｉ区Ｉ小（２３学級）

(1) 児童会活動と本校の取り組み

① 求める望ましい児童像

本校の教育目標の一つである「心ゆたかな子ども」では，感動や思いやりの心が深く，豊かな心情を持ち，みんなと協力して生活を向上させていこうとする子どもの育成をねらっている。これを，特に集会活動の場に位置づけ，ひとりひとりの参加意識を高めながら，望ましい集団活動が展開されるように実践を積み重ねている。

② 児童の実態

集会活動の場で，中心となって活動している児童は大変意欲的な活動であるが，その他の児童は，指示された活動しかしないという傾向がある。自分達で集会を創り上げるという意識に欠けている。そこで，集会活動の取り組みを通して，集団の一員としての個々の参加意欲を高めるよう指導している。

③ 指導上の配慮

・学年（合同）集会，全校集会など，たて・よこのつながりを重視した集団活動の場を設定して，学校全体の連帯感を高めるようにしている。

また，たて・よこのつながりの集団活動の経験を多く持たせることによって，教育目標のねらいである，感動や思いやりの心を一層深めさせることができると考え，次のような手だてをとっている。

○１・５年合同集会（火曜日）　○２・６年合同集会（水曜日）

○３・４年合同集会（金曜日）

これは，学年集会を発展させ，２学年合同で集会を行うもので，毎週，朝の１０分間をあて，合同学年が常に交流を持てるような内容になるように配慮している。全校集会，出張そうじなど，他の活動でも，合同学年の交流が一層密になるように配慮し，たて・よこのつながりを深めさせている。

・学期１回の特別集会（七夕集会・感謝集会・六年生を送る集会）を望ましい集会活動の軸としてとらえ，それぞれの集会の積みあげを大切にする。

(2) 「Ｉ小感謝集会」をめぐって

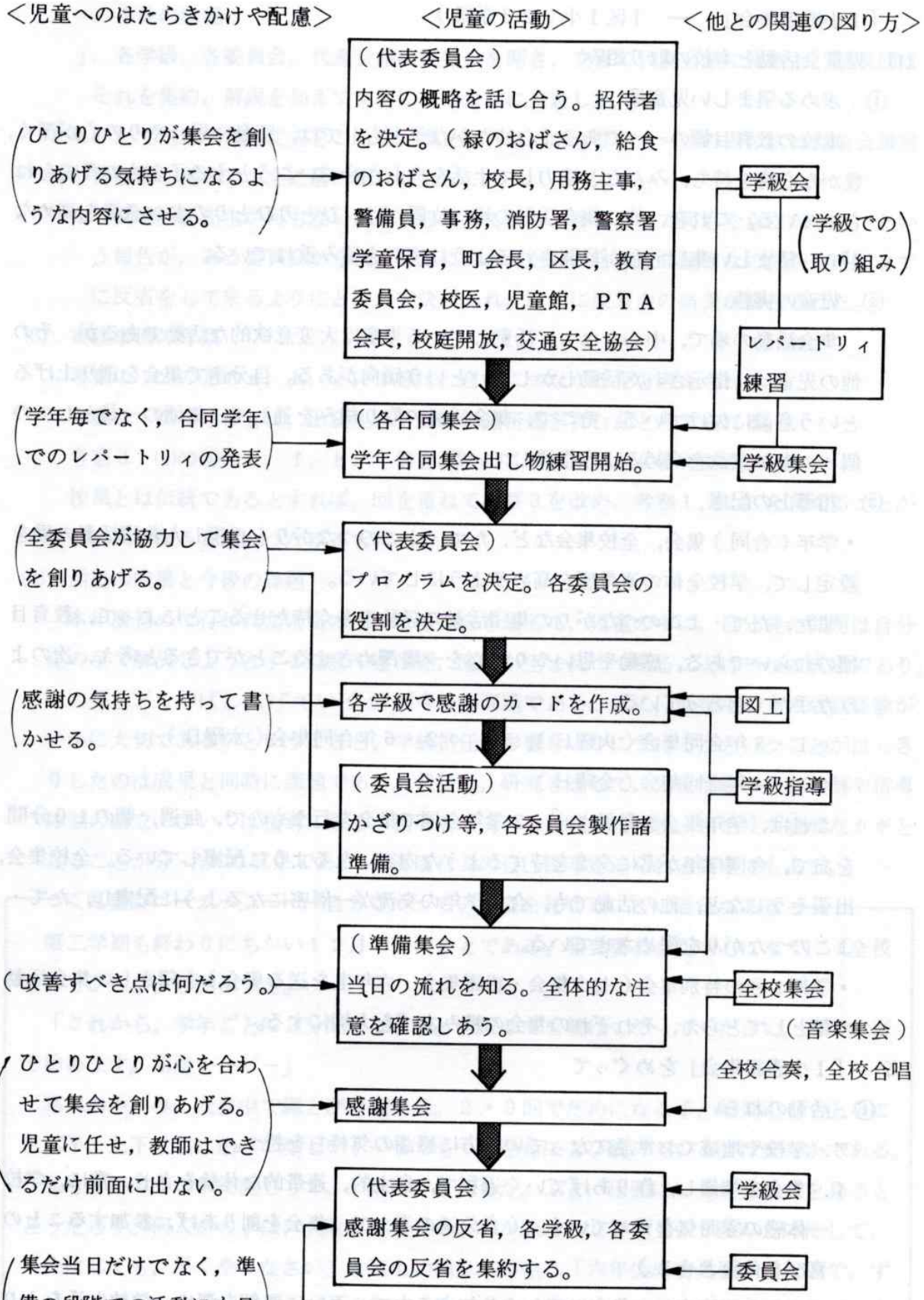
① 活動のねらい

ア．学校や地域でお世話になっている方に感謝の気持ちを持つ。

イ．集会を準備し，作りあげていく過程で，自主的，連帯的な体験をさせ，常に，学校一体感の雰囲気を育てていく。（自分達の考えで，集会を創りあげ，参加することの喜びを体験させる。）

ウ．みんなで協力し，集会に楽しく参加する中で，互いに理解を深め，学校生活をより豊かなものにする。

② 展開の概要


＜児童へのはたらきかけや配慮＞
＜児童の活動＞
＜他との関連の図り方＞
（代表委員会）
内容の概略を話し合う。招待者を決定。（緑のおばさん，給食のおばさん，校長，用務主事，警備員，事務，消防署，警察署学童保育，町会長，区長，教育委員会，校医，児童館，ＰＴＡ会長，校庭開放，交通安全協会）
ひとりひとりが集会を創りあげる気持ちになるような内容にさせる。
学級会
（学級での取り組み）
レパートリィ練習
（各合同集会）
学年合同集会出し物練習開始。
学年毎でなく，合同学年でのレパートリィの発表
学級集会
（代表委員会）
プログラムを決定。各委員会の役割を決定。
全委員会が協力して集会を創りあげる。
各学級で感謝のカードを作成。
図工
感謝の気持ちを持って書かせる。
（委員会活動）
かざりつけ等，各委員会製作諸準備。
学級指導
（準備集会）
当日の流れを知る。全体的な注意を確認しあう。
（改善すべき点は何だろう。）
全校集会
（音楽集会）
全校合奏，全校合唱
感謝集会
ひとりひとりが心を合わせて集会を創りあげる。児童に任せ，教師はできるだけ前面に出ない。
（代表委員会）
感謝集会の反省，各学級，各委員会の反省を集約する。
学級会
委員会
集会当日だけでなく，準備の段階での活動にも目を向けさせる。

③ 活動の実際

ア．事前の活動

○ 合同集会でのレパートリィ練習。感謝集会へ向けて，音楽集会で積み上げる。

○ 各委員会の役割分担を代表委員会で決定する。（代表委員会—司会進行・くす玉作製，集会—案内・プラカード作製，運動—プログラム作成，掲示—表示，放送—放送準備，栽培—かざりつけ，器楽—伴奏，図書—ポスター作製，給食・保健—アーチ作製，新聞・飼育—たれ幕作製）

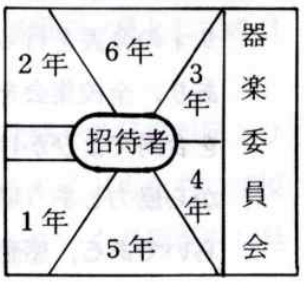
○ 各学級で感謝のカードを書く。全校児童ひとりひとりが心をこめて書く。

イ．実施計画

（略）

ウ．当日の活動（プログラム）

（当日の隊形）



1.＜お客様入場＞

プラカードを持った集会委員がお客様を案内して入場する。感謝のアーチをくぐりぬけて着席するまで手拍子が続く。

2.＜開会のことば・全校合唱＞

器楽委員会のファンファーレ，開会のことばのあと「おじさんおばさんありがとう」の大合唱。

3.＜1・5年集会の出し物＞

合奏—「たき火」，合唱—「アイアイ」。感謝のことば。

4.＜感謝のカード　首かざり贈呈＞

各学年の代表から，お客様にカードと首かざりが手渡される。

5.＜3・4年集会の出し物＞

合奏—「空とぶにわとり」，合唱—「あの青い空のように」，よびかけによる感謝のことば。

6.＜全校合奏＞

「こきりこ」1年生から6年生まで心を一つにして演奏，1年生も難しい曲を一生懸命演奏，お客様から拍手を受ける。

7.＜先生方の出し物＞

「あなたが夜明けをつげる子ども達」練習不足の為，声が小さく，会場がざわつく。

8.＜2・6年集会の出し物＞

合唱合奏—「しょうじょう寺のたぬき林」　「ボキー大佐」（6年生のみ）

よびかけによる感謝のことば。

9.＜校庭へ移動，ジェンカ＞

お客様と全校児童で楽しくジェンカを踊る。参会者の顔が生き生きと輝き，会の盛

りあがりは最高となる。　※校庭への移動，所要時間５分

10.＜お客様代表の話＞

校医さん（歯科）の話，招かれた喜びなどを話していただく。

11.＜学校長の話＞

心を一つにして，よい集会ができたと評価してもらう。

12.＜お客様退場＞

手拍子でお客様を送る。すっかり仲よくなり，低学年は手をふって別れを惜しむ。

エ．事後の活動

各学級，各委員会での反省をもとに，代表委員会で反省をし，来年度へつなげる。ひとりひとりが本当に自分達から進んで参加したかが問われた。

(3)　実践事例の考察

①　集会活動の積み上げ ― １年と５年，２年と６年，３年と４年の合同学年でレパートリィの発表を行った。これは，毎週行っている合同学年集会の積み上げの成果の発表であり，全校集会を成り立たせる基盤でもある。合同学年での出し物では，感謝のことばを合同でよびかけで行ったり，指揮を下学年にまかせるなど，上学年が下学年を導きながら協力しあう場面が見られた。これこそ，本校の教育目標の，「心ゆたかな子」のねらいである，感動や思いやりの深い豊かな心情の育成につながり，集会活動の成果と考えられる。また基底条件に照し合わせるならばねらい（教育目標）を達成するための，基底条件「活動内容，方法」（学年合同集会）といえるのではなかろうか。そんな意味でも，この感謝集会は，大きな意義があり，よい校風作りの一端を担っているといえよう。

②　招待者の決定 ― 代表委員会で決定した。これは，毎年，児童の声で招待者が拡げられていった。今では，町会長や校医，消防署など招待者の側も毎年楽しみにしているということである。都合で参加されなかった方も，招待に対しての礼状を送ってきた。招待者の方々の誠意と子ども達の気持ちが一つになり集会が成りたっているといえよう。このような背景の中で，児童の大きな願いや期待がこめられた集会は，よい校風を育てる一つの条件となり得よう。

(4)　活動の成果と今後の課題

学年の組み合わせは，次年度への発展とたてのつながりを考慮したものである。各学年とも，組み合わせによる成果（思いやり，感動，自主性，連帯感等）はあらわれてきている。しかし，目的によっては，組み合わせに変化をもたせ，幅のある，より効果的な学年合同集会を作っていくことが，今後の課題である。

V　研究の成果と今後の課題

全校児童を対象として展開される児童会活動は，自ずとその学校の特色が現れ，スクールカラーがにじみ出てくるものである。児童会活動研究部では，昨年度から「よい校風を育てる児童会活動のあり方」を求めて研究を進めてきた。本年度はその２年次として，いわゆる児童会活動の特質をふまえながら，①よい校風が育つ基底条件とは何か，②児童側からの意識分析，③よい校風づくりにつながる実践過程の解明の３方向から究明し，およそ次のような成果を得ることができた。

1. 研究の成果

○　一人一人の児童へ，自校への誇りを持たせる自主的な活動を心がける。

校風の担い手は，その学校に生活する子どもたち自身である。温かい教師集団の願いに支えられ，子どもたち自らめあてに向かって意欲的に実践する過程で，集団の一員としての自覚も高まり連帯感も育つ。

児童会活動の特質である自発的，自治的な実践活動から学び得た成就感や満足感が何よりも大切にされなければならない。そうした活動の積み重ねが，一人一人の子どもたちに学校生活への愛着心や自校への誇りへと転移し，好ましい児童像へと進展していく過程が少し見えてきたように思う。

○　児童，学校，地域が互いに連携し合い，めあてを共有し合う活動を展開する。

「よく考え進んで実践する子ども」「あたたかい心を持ち明るく元気な子ども」などの教育目標の具現化は，学校の教育活動全体からせまるものであることは言うまでもない。しかし，どのような教育活動を重点とし，どのような手だてを通してという明確な教育計画を持ち，ねらいとする児童像や活動への見通しが，教師集団はもちろんのこと，活動の主体である児童自身にも見えているとき，児童は生き生きと活動する。よい校風を育てようとする学校の意図が，父母や地域社会に共感的に受け止められ，温かい見守りや協力的態度が大きな力となり得ることも見逃せない。

○　児童会活動の特質をふまえ，よい校風づくりに結びつく活動過程を大切にする。

われわれ教師は，ともすると，育ちつつある児童の好ましい芽を指導という名のもとで，摘んでしまうことはないだろうか。特に，児童の自発性や自治的能力の育成を大切にし，「なすことによって学ぶ」児童会活動では，児童の活動過程に即し，いつ，どのような場面でどのような児童へのはたらきかけが有効であるかの見極めが大切である。児童の実態，活動の内容・方法に応じた指導のあり方が問われるところであるが，先進校に学ぶ視点をここに置いて，今後一層解明されねばならない。

本年度の研究では，各事例ごとに，展開の概要をおさえ，活動過程に即した指導助言のあり方を探ることができたが，児童の活動に即した評価の観点の洗い出しが必要である。

2. 今後の課題

児童会活動の窓口から「よい校風づくりのあり方」を求めて，二年間が経過した。遠大なテーマであるだけに，まだまだ多くの課題が残されている。

(1) よい校風づくりに結びつく児童会活動の実践で，いつも話題となったことは，共通理解を図ることの難しさであった。全校児童を対象として展開される児童会活動は全教師は常によき理解者であり，協力者でなければならない。一部の担当者のみの指導体制からの脱皮こそ，理想と現実を少しでも結びつけていく大きな決め手となっているのではないだろうか。よい校風が育つ基底条件の一つとして挙げているが，今後さらにその望ましいあり方を求めて解明されなければならない。

(2) 現在の子どもたちがえがいている「よい校風」へのイメージは，われわれの今後の研究に多くの示唆を与えてくれた。日常の指導のあり方を見直し，今後の指導に生かすためにも一層，この児童の実態のとらえ方が大切である。調査の観点に応じて明確な調査項目を準備し，指導に役だつ実態把握が必要である。

(3) よい校風づくりにせまる活動過程の分析から，児童の活動過程に即した評価のあり方がよく問題にされた。それぞれの過程における評価の観点の洗い出しや評価の方法についての研究も今後の大きな課題である。

3. おわりに

全職員の理解と協力を得て，今年もまた前後3回の授業研究を持つことができました。当該校の校長先生をはじめ，諸先生に深く敬意を表します。また，本研究部のために，その都度，適切なご指導と格段のご配慮を賜った講師の先生方，研究派遣にご協力いただいた各学校の校長先生に深く感謝いたします。

―＜児童会コーナー＞―― 街の一隅からの手紙 ――

１２月に入って学校に次のような手紙が２通学校長あてに届いた。

▶ 12月の寒い日聖母病院に見舞に行きました。バスから降りて病院をさがしましたがなかなかみつからず，面会時間のことも気掛りで，あせるばかりでした。静かな住宅街で人の姿がみえず困っている時に４年生ぐらいの女の子が３人で通り親切に教えてくれました。ある角を曲ろうとすると先ほどの女の子が，後ろの方から次の曲り角ですよ，とまた声を掛けてくれました。私の姿を後ろの方から見ていてくれたのです。……後略

▶ ６日の夕方二町目の交番の近くの歩道を二人で歩いていたら，後ろの方から５年生ぐらいの男の子が，「失礼します。」と声を掛けて，通り抜けていった。私が老人だったからでしょうか，その子の態度が非常にさわやかでした。……後略」 たずねていった所迄行ったが心配になりそっとついて行った子，老人の側を通り抜ける時ちょっと声を出す子，都会の子らしい積極性，優しさを伺うことができ，本校の校風の一端と思う。

Ⅲ　クラブ活動

テーマ「クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方」

Ⅰ　まえがき ― 研究のテーマについて・研究へのとりくみについて …… 58
Ⅱ　クラブ活動の実践 …… 59
　1.　集団構成の工夫 …… 59
　　ア．クラブの所属決定 …… 59
　　イ．クラブ活動の体験入部 …… 63
　2.　集団内の組織・運営 …… 64
　3.　クラブ活動の評価 …… 68
　4.　集団活動を高める指導者の役割 …… 72
Ⅲ　クラブ活動の実態調査と分析 …… 76
　1.　新設・廃止されたクラブの理由 …… 76
　2.　予算 …… 78
　3.　クラブ担当教師をめぐる問題点 …… 79
Ⅳ　研究の反省と今後の課題 …… 80

研究・執筆者名簿

部　長	関口　照治	墨田・菊川小
副部長	後藤　治司	江戸川・第七葛西小
副部長	湯田　耕司	三鷹・井口小
	原田規己子	千代田・千桜小
	尾形　公子	千代田・小川小
	寺内　昭	中央・泰明小
（記録）	野口　アヤ	新宿・淀橋第六小
	臼居都之男	文京・礫川小
	菅野　靖江	台東・東泉小
	内田　雅美	墨田・第一寺島小
	塚越　正昭	墨田・両国小
（記録）	中嶋美沙子	墨田・緑小
	福良弘一郎	品川・城南第二小
	中島　和利	品川・城南第二小
	松田　光一	目黒・大岡山小
	原山多恵子	調布・東調布一小

	松岡　治子	世田谷・笹原小
（発表）	佐藤　正吉	中野・北原小
	三浦　玉子	豊島・高松小
	中島　栄二	荒川・赤土小
	笠　和子	荒川・第二峡田小
	福島　尚子	板橋・板橋第九小
（発表）	青木　治人	板橋・板橋第四小
（発表）	窪田　正視	練馬・豊溪小
	新井　隆	足立・島根小
	中井由貴子	足立・梅島小
（司会）	宇都宮　透	八王子・陶鎔小
	瀬崎　耕一	立川・南富士見小
	永田　トイ	立川・けやき台小
	黒木　耕二	府中・第七小
	鶴見四方子	小平・第三小
	杉坂　昌子	稲城・第七小

I　まえがき

1. 研究のテーマについて

都特活の研究主題「豊かな人間性を育てる特別活動」を受けてクラブ活動では「クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方」を研究のテーマにした。

クラブ活動の研究にあたり昨年度の研究が，クラブ活動全体にわたって，総点検を試み，それをふみ台にして，さらにクラブ活動の特質をあらい出し，特に個々を生かす集団活動の指導を焦点に，つぎのことについて検討することにした。

- ○クラブ活動の授業研究
- ○クラブ活動の集団構成の研究
- ○集団内の組織化を計る

2. 研究へのとりくみについて

研究するにあたり「子どもの希望を生かすクラブ活動」「集団活動を高める指導者の役割」を中心に研究を進めていくことにした。

区部，市部に散在する幹事の数は六十余名である。区市部の特活研究部のもり上がりから都特活クラブ活動の研究の充実に努めてきた。

○ 研究の経過

57. 6. 28（月）	・本年度の研究テーマの決定　・研究の年間計画の作成　（各校のクラブ活動の問題点を出し合って，それに基づいて決定）
57. 7. 9（金）	・幹事校のクラブ活動の現状報告と問題点の検討および1つのクラブの指導計画について
57. 9. 10（金）	・過去2～3年で「なくなったクラブ，新設されたクラブ」の問題点の検討。クラブの予算の問題について
57. 10. 25（月）	・中野区立北原小学校のクラブ活動の見学 北原小学校のクラブの報告，クラブ活動の問題点の検討 講師　豊島区立朝日小学校　古橋　宏校長先生
57. 11. 5（金）	・幹事校のクラブ実践のまとめ
57. 11. 19（金）	・豊島区立朝日小学校のクラブ活動の見学 朝日小学校のクラブの報告，アンケートの集計および検討 講師　江戸川区立下鎌田東小学校　小野真澄教頭先生
57. 12. 3（金）	・研究集録原稿の内容の検討および原稿執筆者決定，研究発表について話し合い。講師　中央区教育委員会　大谷徹夫指導主事
58. 1. 21（金）	・研究集録原稿の校正，研究発表者決定，役割分担確認
58. 2. 10（木）	・研究のまとめ，研究発表準備（発表内容検討，資料準備等）
58. 3. 4（金）	・研究発表会

Ⅱ　クラブ活動の実践

1. 集団構成の工夫

ア．クラブの所属決定

「児童が生き生きと活動するクラブ活動」にするためには，子どもの希望を生かさなければならない。また，児童が生き生きと活動し終えた時には，「子どもの心にのこるクラブ」になっていると考える。それには，例えば次の４項目のことがら等を配慮することが大切である。

○　子どもの希望をより多く生かすために，種類の多様化を図る。

○　活動内容や方法の理解の多様化に努める。

○　児童が相互に認め合い，励まし合って，ひとりひとりが生かされるような雰囲気になるような好ましい人間関係を育てる。

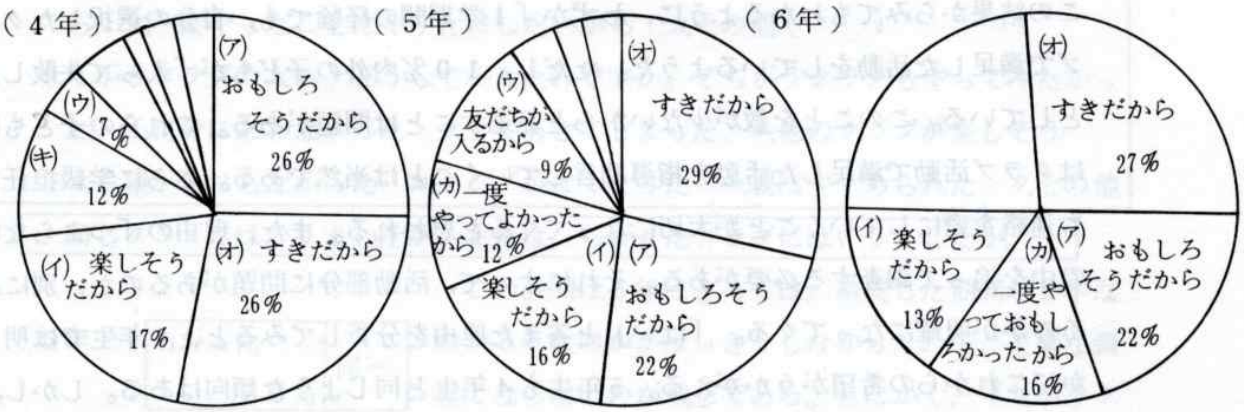
○　充実したクラブ活動を通して満足感，成就感を体得させるように工夫する。

これらの他に，入門期の選択指導が非常に大切だと考える。また，同一クラブを継続することが望ましいとされている。しかし，子どもはクラブをどのようにみ，感じているかを分析することにより，より一層生き生きとしてクラブ活動をさせる手だてをこの辺から切り込んでみようと考えた。

イ．実態調査と分析　　調 査 日　５７年７月　　調 査 校　１７校

調査人数　４年５６０人　５年５７２人　６年５６９人

(1)　どうして，そのクラブにきめましたか。あてはまるものに○をつけなさい。いくつでもいいです。　ア.おもしろそうだから　イ.楽しそうだから　ウ.友だちが入るから　エ.先生がすきだから　オ.すきなことだから　カ.一度やってよかったから　コ.その他（　）



５年，６年が「すきだから」と選ぶのに対し，４年生は「すきだから」と同時に「おもしろそうだ」をあげている。このことからも，はじめてクラブ活動に入いる４年生にとっては，各学校でいろいろな形でとりあげられている３学期のクラブ紹介が大切になっ

てくることがわかる。

(2) 今のクラブに入ってよかったですか。そのわけ。 （はい）ア.うまくなった　イ.いろいろできる　ウ.友だちができた　エ.上級生がやさしい オ.上手になりたい　カ.すきになった　キ.その他（　　） （いいえ）ア.上級生がいばる　イ.つまらない　ウ.いじわるされる　エ.その他（　　）

（4　年）	（5　年）	（6　年）
はい　93％ ／ いいえ	はい　89％ ／ いいえ	はい　92％ ／ いいえ

「はい」と答えた児童の理由として，おもなものをあげてみよう。

4年	・じょうずになりたい……21％ ・うまくなった……18％ ・友達ができた……13％	・いろいろできる……20％ ・すきになった……16％ ・上級生がやさしい……11％
5年	・いろいろできる……24％ ・友達ができた……12％ ・上級生がやさしい……6％	・うまくなった……21％ ・じょうずになりたい…21％ ・すきになった……12％
6年	・うまくなった……28％ ・じょうずになりたい……17％ ・友達ができた……10％	・いろいろできる……25％ ・すきになった……16％

「いいえ」と答えた児童の理由としては，

これは各学年共に「つまらない」が4年で68％，5年で57％，6年で93％と圧倒的に多くなっている。つぎは

4年	・上級生がいばる　15％	・いじわるされる　15％
5年	・〃　22％	・〃　11％
6年	・〃　4％	・〃　3％

この結果からみてもわかるように，わずか「1学期間の経験でも，自分の選択したクラブで満足した活動をしているようだ。ただし，10％内外の子どもが「入って失敗した」としている。このことを数が少ないからと見逃すことは問題がある。これらの子どもにはクラブ活動で満足した活動を指導助言していくことは当然である。さらに学級担任とも連絡を密にしていくことが大切になってくると思われる。また，理由の「つまらない」の中を追って調査する必要がある。それによって，活動部分に問題があるのか，別にあるのかが明確になってくる。「はい」と答えた理由を分析してみると，4年生では明らかにこれからの希望がうかがえる。5年生も4年生と同じような傾向はある。しかし，わずかながら，自分から進んでやるという意気込みを出している点が異なっている。6年生では，小学校最後のクラブということもあるが，自分のやっていることを的確にとらえ，評価している。このように，各学年の特徴を出し合いながら，クラブの特質が高

められていくと考える。特に，「友達ができた」「上級生がやさしい」「すきになった」をあげている。これは，クラブの特質でもある学年，学級のワクをはずした同好の児童の集団が，各自の特性や能力を十分発揮しながら伸び伸びと活動していることをあらわしていると思われる。

(3) 今のクラブをずっと，つづけたいですか。そのわけ。

（はい）	（やめたい）
ア.たのしいから　イ.おもしろい ウ.みんなやさしい　エ.もっと上手になりたい オ.責任をはたしたい　カ.同じものをやりとおしたい　キ.その他（　）	ア.いろいろなことをやりたい イ.上級生がいばっている ウ.つまらない　エ.その他（　）

	はい	やめたい
4年	54%	
5年	〃 66%	〃
6年	〃 86%	〃

学年が進むごとに，はっきりと「続けたい」と答えている。理由の方をみると各学年を通じて

①たのしいから　②もっとじょうずになりたいから
③おもしろいから　④みんなやさしいから

の順になっている。

また，「やめたい」と答えた子どもの理由の方をみると，4年で79%，5年で72%，6年で47%の子どもが「いろいろなことをやりたい」と答えている。必ずしも，興味本位にかえることは望ましい姿ではないが，子どもの本音をどうとらえていくかという点で問題を投げかけていると思う。特に，子どもは，技術の習得のみにねらいを持っているが，教師側には，自主的・自発的活動をさせたいなど，ねらいにズレが生じている点でもある。とすれば，子どもの希望を生かすクラブ活動をどのようにすればよいのかが考えられてくる。

実際にはどれくらいの子どもが，つづけているのかを調べてみることにする。

(4) あなたは今までずっと同じクラブでしたか。（5，6年の人）そのわけ。
（同じクラブ）ア.楽しいから　イ.すきなことだから　ウ.得意だから　エ.おもしろいから　オ.一度やったことはやりとおしたいから　カ.その他（　）
（ちがうクラブの人へ）どうしてかえたのですか。ア.ちがうクラブもやってみたかった　イ.自分にあわなかった　ウ.すぐあきてしまった　エ.他のクラブが楽しそう　オ.希望がとおらなかった　カ.クラブがなくなった　キ.親にすすめられた　ク.その他

・同じクラブにはいりましたか。または，ちがったクラブにはいりましたか。

	ちがった	同一
5年	73%	
6年	75%	〃

この設問は6年にとっては，継続した期間が2年なのか3年なのかがはっきりしなかったので，正確な調査にならないのが残念である。とにかく，「ちがうクラブ」を経験した児童は70%を越えていた。しかも，その理由として，前述と同様「ちがうクラブも経験してみたかった」としている子どもが，5年で55%，

6年で６０％となっている。その次にくるものにしても「他のクラブが楽しそうだった」が１３％となっている。ここにも子どもの本音が出ていると思われる。その他，「自分の性に合わない」「すぐあきる」等，個別的に指導を要するものがあげられている。

次に，同じクラブを経験した，５年で２７％，６年で２５％の子どもの理由を比べてみると，

5年	・すきなことだから……３３％ ・楽しいから……２８％ ・おもしろいから……１７％ ・得意だから……１１％ ・１度やったことは やり通したいから……８％	6年	・すきなことだから……３２％ ・楽しいから……２４％ ・おもしろいから……２１％ ・１度やったことは やり通したいから……１４％ ・得意だから……９％

１位から３位までは数も同じ位の上に，同一の項目になっている。これらの子どもは，選択時に適切な指導がおこなわれ，自分に合ったものだった様だ。その活動も満足するものを見い出せたと考えられる。これも，選択指導のみが影響あったのではなく，この項のはじめにあげたことがうまく活動に生かされていたからであろう。それら両者がからみ合っていくことが望ましいと思える。しかも，これらの子どもが，中心になって活躍することにより，伝統性も生まれてくるであろう。特に数はわずかであるが「１度やったことはやり通したい」とあげている。しかも６年の方がその傾向が少し上である。子どもによっては，執着心が強かったり，応用力がとぼしい等性格的な面があるかもしれないが，そのクラブを長く続かせたいという前向きに出したものととらえたい。

なお，A区では１月にさらに「つまらない」と答えたこどもの追跡調査をし，クラブ公開もし研究を深めた。

ウ．まとめ

実態調査のまとめと分析から，「こどもの希望をできるだけ生かしていけるクラブ活動」にするためには次の諸事項に一層留意し，その改善に努めることが必要であり，このことは今後の課題でもある。

(1) 実態調査など子どもの本音をより的確につかみ，それを生かすための工夫と努力。

(2) 選択指導も，ただ子どもの希望を聞き入れてやるにとどまらず，子どもの希望を開拓し視野が広められるように指導助言する。

(3) 子どもの本音とは多少ズレはあるが，クラブ活動を継続させることは望ましい。そのために指導者側の都合や設備等でせっかく続いたクラブをなくすようなことのない配慮。特に，規模のちがいでさけられない場合も生じるが，２期制にすることはよい傾向とはいえない。

イ．クラブ活動の体験入部

クラブの選択指導については，過去も様々な研究が行われ，実態調査もされているが，その中で最も多く見られる方法は，クラブ見学，クラブ発表会，学級担任による説明などである。しかし，そのどれをとっても，やはり断片的な知識，理解にとどまり，一人一人の児童が自信をもって，一つのクラブを選択するという材料にはなりにくい。特に，初めてのクラブを選択しなければならない3年生にとっては，その発達段階からしても，より具体性に富む選択指導がなされなければならない。つまり，自分自身が興味を抱いているいくつかのクラブに実際に参加し，上級生と活動を共にすることによって，自分に合ったクラブを見つけるようにさせるのである。以下に，体験入部の手だてと順序を示すので参考にしていただければ幸いである。

a　第一週　○3，4年生の各担任は，クラブの種類とその活動内容について紹介。
（準備）○児童は，入部してみたいクラブを三つ以内選択し，調査票に記入。
○各担任は調査票を集計し，次週以後の三週の体験入部がバランスよく円滑に行われるよう，学年会等で入部者や順序を相談。
○相談の結果を，学級の児童に伝達する。併せて，体験入部計画表を作成し，クラブ担当者に配布。

b　第二週　○体験入部
c　第三週　○体験入部
d　第四週　○体験入部

この期間，4年生は現在所属しているクラブを離れることがある。また，3年生は，授業時数が三週間にわたって，一時間ずつ多くなる。

○5年生とともに，第一次希望調査を実施。

上記のような計画を立てる場合，四週間を要するので，年度最後のクラブ活動から逆算して，四～五週間前から準備を進める必要がある。

また，実際の運用にあたっては柔軟な対応をしたい。例えば，四年生の児童で，来年度クラブを変わりたいと考えている児童以外は，他のクラブに体験入部させる必要はない。入りたいクラブが2つあって迷っている児童の場合には，第二週でAクラブ，第三週でBクラブ，第四週でAクラブに入部して意志を決めるという方法もあろう。その他各校の実態に応じて工夫できよう。

以上のようにして，一人一人の児童が，自分自身で参加し，活動したうえで選んだクラブの場合，活動意欲が高まり，望ましいクラブ集団が形成されていくことにつながると考える。しかしながら，学校規模，周囲の環境，指導者の体制など，各学校の置かれた状況は様々である。自校に最も適した選択指導を考えることが大切である。いずれにしても，児童が自信をもってクラブを選択できるよう，今後もその方途を探求したい。

2. 集団内の組織・運営

ア．所属期間とクラブ活動の特質とのかかわり

T区A校での協議会の折，クラブの所属期間について，「興味」か「自発的・自治的活動」で賛否両論がでて活発な論議がくり広げられた。A校のクラブ活動指導計画の組織と運営の項に「原則として，現5年生（来年6年生）のクラブ所属の変更は認めない」とあることが，話題の発端となった。やりとりの一部を記すと，

――「変更を認めない」というのは，おかしい。本来クラブというのは，子どもたちの興味や関心を追求していくものであるのに，それを奪うような考え方ではないのか。

――本校では，自発的・自治的な活動をねらっている。だから，できるだけ児童の手による運営をさせていきたい。運営が円滑に行われるためには経験者の育成が必要だ。5年生での経験がそのまま6年生で生かされれば，自治的な運営ができる。との考え方だ。

事実A校の先生の中にも「4年から6年まで同一クラブでという考えに対して，毎年かわってもいいという2つの考えがあり，それぞれに長所・短所があると思う。そのあたりは，各学校によってどっちをとってもいいという問題なのか，それとも小学生として，また指導要領からみても，どちらか一方の方が当然よいのだろうか，よくわからない」というような悩みの声がある。（A校のクラブ担当者へのアンケートより抜粋）

協議会で話し合われたもののうち，＜2年または3年継続させたい＞とする考え方について整理すると，下の表のようになる。

長　所	短　所
・児童の手による自発的・自治的な運営ができるのではないか。 ・クラブの伝統性も生まれるのではないか。 ・リーダーの育成にプラス。	・児童の興味や関心の範囲を，教師側が限定あるいは削減してしまわないだろうか。 ・クラブ存続のためのクラブ活動になりはしないか。 ・「自発的・自治的活動」から，指導者側の手ぬき，あるいは児童放任につながりはしないだろうか。

＜毎年かわっていい＞とする立場からは，次のような意見が出ている。

クラブ活動の原動力は，「興味・関心」である。だから，児童の希望を規制するような，つまり「来年も今のクラブを続けなさい」「いなくなると困るよ」などのような指導は好ましくない。自発的・自治的活動は，興味を原動力として，クラブの選択指導の中でクラブ選択の自由が認められているところから出発する。はじめはうまくいかない。リーダーとなった子どもたちは思い悩むだろう。「こまったなぁ。どうすればうまくいくんだろう」と考えるようになれば，しめたものだ。最終的には担当者の助言をあおぐことになるかもしれないが，少なくとも，はじめからお膳立てができているものとは違うものが生まれてくるはずだ。そこに，真の「自発的・自治的な活動」があるのではないか。子どもたちの本音の多くの「いろいろな経験をしたい」という気持ちを，できるだけ大切にしてやりたい。

「興味」と「自発的・自治的活動」というクラブ活動の特質を，所属期間とのかかわりで述べてきたが，最後に，A校でのクラブ参観の折かいま見た料理クラブの活動例を記して，以上触れてきた問題の参考としたい。

＜4～6年の学級数・人数＞

学年	男	女	合　計	学級数
4年	57	49	106	3
5年	55	58	113	3
6年	51	45	96	3
合計	163	152	315	9

＜料理クラブの実態＞

担当者	場　所	4年		5年		6年		合　計	
	家庭科	男	女	男	女	男	女	男	女
1名	室	3	4	2	3	3	4	8	11
		7		5		7		19	

＜料理クラブの活動内容＞

予想される活動	指導上の留意点
・自分たちで考えた料理の調理実習	・費用が高額にならないように注意する。
・話し合い，計画	・計画・買物係・会計係など学期ごとに分担させる

話し合いの場を参観した。男女混合の4つのグループで，リーダーが中心となり計画づくりが進められていた。フルーツ○○サラダとかいう料理を計画しているグループに聞いてみる。

——何を作るの？——フルーツ○○サラダです。いろんな野菜をいれた。

——いつ作るの？——今日計画ができるから，来週が実習です。

——材料なんかどうするの？——家にあるものを使ったり，ない場合は，材料係がいて，放課後買い物に行きます。

——お金は？——みんなで出し合って，集金係にわたします。

——楽しそうだね。——ええ，とっても。

最後に「うまくつくれるといいね」と言うと，にっこり笑った。この事例からは，A校のねらいがいい方向に進んでいることを示している。またこのクラブの場合，児童自身も，クラブ変更期に担当者や担任から「できるだけ今のクラブを続けなさい」と指導されなくても，自分たちの興味の追求で，今日の生き生きとした自主的な活動を築づき上げたであろうことは想像にかたくない。おそらく，この料理クラブの子どもたちの目の輝きを見るかぎり，彼等は，はじめはタマゴ焼きかなにかの，簡単なものを手がけた。うまくいった。そこで満足感を得た。次はもう少しむずかしいものを作ろうということになった。○○○を作った。苦労したがこれもうまくいった。そこでさらに，自分たちが考えた新しい料理に挑戦してみようということになった。材料の選定は勿論，調味料の分量や盛りつけなども工夫したに違いない。また，自分たちでその料理に名前もつけたろう。こうした興味の追求，課題への挑戦が，今日の「充実感」につながってきたのではないだろうか。興味・関心を最大限に生かしてやることが，子どもたちの活動を活発にすることになるのではないか。このように児童の興味・関心を大切にすることを基盤に，なお，クラブの伝統を育て集団性を高めることが大切であると考える。

イ．学校外へ出かける時

小学校のクラブ活動は一般的には校内で行われる。しかし，その活動の範囲を広げて校外に場を求めるクラブも増えてきている。

・施設，史跡の見学や野外観察……郷土クラブ，野外活動クラブ，鉄道クラブ等

・対外試合，コンクールへの参加あるいは出品活動……運動クラブ，音楽クラブ等

上のような例があげられる。これらは1年に数回のものもある。また，野外活動クラブのように夏季休業中に実習活動を行う例もある。

a　S区K校の実践　―　史跡見学の例　―

郷土クラブ活動計画（記録）　　11月～12月

○　11月4日（木）

12月の予定をたてる。

①　12月2日（木）　吉良邸跡見学。

②　12月9日（木）　義士討入りについて話し合い作文にまとめる。

○　11月10日（木）

クラブ見学実施報告書（吉良邸跡見学）を指導室に提出。

所定の報告用紙に下記の内容を記入。　（書式略）

目的地	本所松坂公園 安田庭園	実施月日　昭和57年12月2日
ねらい	歴史を知り郷土クラブ員の郷土を愛する心を育てる。	
日程	学校集合　14時　5分　集合より解散までの時間 学校解散　16時35分　2時30分 経路　（全コース徒歩） 学校―京葉道路―松坂町公園―安田庭園―京葉道路―学校	
経費	1人当り　0円	
実施学年 人員	4年　1名 6年　13名　計14名	
引率職員	2名　職・氏名・年令・性	

○　11月18日（木）

図書室で義士討入りに関係の本を借りたり，持参の資料で調べる。

見学について話し合う。

①　吉良邸までのコース確認（片道　徒歩20分）

②　見学上の注意を決める。―　安全面での事前指導

○　11月27日（土）

部長を通して，11月28日（日）NHKテレビ夜8時「峠の群像」（吉良邸突入）を観るように伝える。

◎　１２月２日（木）

吉良邸跡（本所松坂公園）見学

公園で吉良の首洗い井戸，絵や屋敷の図面を見てから当時の吉良邸の広さにあたる部分の道路を歩き広さを確かめる。

○　１２月４日（土）

休憩時間にクラブ員を集めて，１１月２８日のテレビの再放送がある事，明５日（日）の「上野介最後」を観ることを伝える。

○　１２月９日（木）

これまでの活動を資料に義士討入りについて話し合い作文にまとめる。

b．校外活動を生かすための配慮

クラブ活動は，児童の自発的な計画を大切にしながら実施されなければならない。その興味・関心や活動意欲を高めるためにも活動の範囲は広げられる傾向にある。そこで，校外活動の必要性を認め特質を生かすためには指導者側の十分な配慮が重要である。

①　指導計画，活動計画を十分にたて，校外活動の位置づけを明確にさせる。

○活動内容がクラブの目的とどのように関係しているか。特に児童から出された計画の段階で適切な助言をしてねらいをはっきりさせる。

ねらいが児童，指導者共に明確に理解されれば，その活動計画はスムーズに実践され事前の活動も一層生きてくる。

②　事前の指導，準備を充実させる。

○活動計画に従って事前指導を十分に行う。

○実地踏査をして，危険個所や状況を把握しておき，現地での禁止事項，集合場所などを含め安全指導を徹底させる。

○児童ひとりひとりをよく理解し，各個人の特性を知っておく。

児童の自主性，自治的な活動に偏り安全に対する指導，助言が不足したり，児童の理解が不十分であると，クラブ活動の開放された雰囲気の中での思わぬ事故をまねく危険性がある。また，活動自体ルーズになりねらいからはずれたものになる。

①②のいずれをとっても，他の行事や授業では当然配慮されていることばかりである。しかし，クラブ活動では比較的安易に処理されていることが多い。クラブ活動のねらいを充実させるためにも，校外活動は，指導者としての配慮，姿勢を再確認するよい機会であろう。

③　その他

児童の心身的・金銭的負担過重・職員や保護者の協力など配慮しなければならないし，校外に出ることについては，現状として管理上，指導上解決すべき問題が多い。そこでなるべく校内活動に止めると共に，特に休日および時間外見学はさけるようにしたい。

3. クラブ活動の評価

(1) 評価の方法

評価には，教師の指導計画・実践の改善のための評価と児童に対しての評価がある。学年や学級のわくがとり除かれた児童たちが，同じクラブの一員として認め合い，理解し合いながらその運営・活動に参加していくことは容易なことではない。指導者である教師は，その活動が，クラブ内の児童の人間関係が深まるような方向になっているか等，常に配慮していかなければならない。そのためにも特に評価が重要になってくる。

評価の方法は，ひとつに限定せず，評価の観点によっていろいろな方法で試みることが必要である。つぎに具体的に評価の方法を示しておく。

方法	具体的方法	おもな内容
話合いによる方法	教師の話合い	○クラブ活動の全般的な考え方や共通の問題点などについて，全職員で話し合う。
	児童の話合い	○実践活動の中で，1時限・1題材・全期間等の終了時に反省会というような場において，実施計画はどうであったか，クラブ内の雰囲気はどうであったかなどについて話し合う。
観察による方法	指導カード	○図1のようなカードを準備しておき，随所随所で観察した事を具体的に記録する。
記録による方法	クラブ記録簿	○各クラブに活動記録簿を備え，実施日の活動の様子や反省を記入させる。教師はこれを評価の参加にする。
	個人記録カード	○児童一人一人に，図2のような活動記録カードを持たせ1時限の終わりに記入させる。教師はこれを評価の参考にする。
調査による方法	面接質問法	○面接質問法・質問紙法などが考えられるが，クラブ実施学年が高学年であるため，質問紙法による調査が多く用いれられる。例えば活動内容・実施計画・クラブ成員の人間関係・クラブ指導教師の助言について質問し，それに対して記入させたことがらを分析することによって，指導計画や指導法・児童自身・教師自身，クラブそのものなどについての評価を行うことができる。
	質問紙法	

以上あげた評価の方法も一部である。例えば一単位時間の中で児童がどのように活動に参加しているかの様子を，時間を追って観察するということも大切な場合がある。このように一単位時間での評価と全期間終了時の評価とを総合的に行っていくことが必要であろう。

（図1）

（教師用）	クラブ活動指導カード	年　組（　氏　名　）
	観察記録	（　合唱クラブ　）
月　日	批判力はあるが，他の欠点を強調しすぎる	
月　日	初めの声に対する劣等感をもっていたが……。	
月　日		
月　日		
	評　　価	
自主性	×社会性　　○実践力　　etc	
評価の観点		
自主性（人に頼らず積極的に仕事を進める　etc）		

（図2）

（児童用）	活動記録カード　（合唱クラブ）	年　組（氏名）
月・日		
7. 3	○レコード鑑賞・クラブの歌合唱	歌ばかりでなく，たまには今日のようなレコード鑑賞もよい。

(2) 担当教師の評価の観点

a　計画性

クラブにおける活動が，その場的なものでなく，創意工夫に富み，計画性を持ったものであるか。

b　自発性

他を模倣したり，依存したりすることなく，積極的に活動できるか。

c　協調性

クラブの中での自己の位置，行動を考え，クラブの全員と協力して，クラブ全体の向上を図ろうとしているか。また，楽しいクラブにしようと努力しているか。

d　持続性の実践性

自己の持てる力を十分に発揮し，根気づよく活動することができるか。

(3) 自己評価のさせ方と観点

評価が，一人一人の児童の自己変革を促していくためのものであるという側面から見た時，個々の児童の自己評価を引き出す努力をすることも大切である。しかし，単に記録用紙を与えるだけでは形式的に終わってしまう。あくまでも，意図的，計画的に評価

の観点を設定して記録させる必要がある。クラブの種類や活動内容によって異なる場合があるが，主なものを挙げると，以下のような観点が考えられる。

a　進んで参加できたか。

b　計画を立て，実行することができたか。

c　自分の考えを持ち，工夫してできたか。

d　全員と協力してできたか。

e　楽しくできたか。

f　準備や片づけがきちんとできたか。

このような自己評価を記録する場合，児童によっては，過小評価や過大評価も予想されるので，卒直な事実を記録するよう指導しておきたい。そして，児童の評価に教師の評価（助言，賞揚，奨励）を加え，総合評価とし，それを生かして，更に新しい意欲的な活動への取り組みの姿勢を育てていきたいものである。

(4)　担任とクラブ担当者の連絡

同好の児童が集まり活動をするクラブ活動の場では，特に一人一人の児童の持っている可能性を発見し，望ましい成長や自己変革の動きの助長，促進のために教師がその評価を重視していかなければならないことはいうまでもない。一教室内での評価と異なる所にクラブ活動の評価の難しさがあるのも事実である。そのためには次の点に注意し，十分教師側の共通理解をはかることが大切になってきている。

(ア)　全教員で話し合いクラブ活動での児童の評価に共通理解を持つこと。

(イ)　各クラブがどんな活動をしていて，そこでの一人一人の児童の活動はどうなっているのかが常に全教員が把握できる体制をとる。

（例えば，クラブ活動記録簿を一括して所定の場所に置いておくなど）

(ウ)　学級担任とクラブ担当者の間での情報交換を密にする。

(エ)　クラブ発表の場（発表会，校内放送，全校の集会活動など）をしっかりと年間指導計画の中に位置づけ，児童の活動を学級担任も具体的に評価する。

このようにして，全校をあげてのとりくむ体制ができている時，一人一人の児童の可能性がより発揮されるようになる。今後も，よりよい評価の方法，そしてそれを支える学校全体の指導体制の確立を考えていきたい。

※　評価カードの例

ここに示すカード例は，H市小教研特活部の昭和５５年度紀要から抜粋したものである。参考資料となれば幸いである。

a　指導カードの例　（A：努力した　B：ふつう　C：努力が足りない）

クラブ	No.	年　組 担当					
		1		2		年	
1	出欠，準備のようす						
2	計画に従って，最後までがんばったか						
3	協力して活動できたか						
4	自分の役割を責任をもって実行したか						
5	自分から進んで楽しく活動できたか						
特記		担当	担当	担当	担当	担当	担当
		㊞	㊞	㊞	㊞	㊞	㊞

b　自己評価カードの例

月日	活動場所	活動内容と反省　努力した ◎　ふつう ○　努力不足 △	1 進んでする	2 計画をたてる	3 協力してする	4 準備や整理をする	5 くふうしてする	6 楽しくする	つぎの活動計画
2月3	校庭	体そう　キャッチボール 試合のときに人のエラーをからかってしまった	◎	○	△	○	○	○	ランニング キャッチボール，試合

（※）学期の反省	○	○	○	○	△	◎	※来学期の目標
だいたい楽しくできたけど，計画したことをわすれていて，準備がおくれたこともあった。 先生やみんなのはなしを，よく聞いていないこともあったので，こんどから気をつける。	先生のことば 楽しくできてよかったですね。 人のよい所を，もっと見ならうようにするといいと思います。 来年もがんばってください。						計画を守る じょうずな人のまねをする。 進んでやる

このカードは，各学期毎に一枚を用意し，クラブ活動の都度記入するようにさせたい。もちろん，クラブ活動の年間活動計画を作成したり，活動記録を残すなど，評価にまつわる周辺の資料の整備も大切である。※印については「来年の目標」など，表記を学期毎に改めれば，より具体的になる。

4. 集団活動を高める指導者の役割

ア．望ましい集団とは

ここでは，S区Y校（全校児童約550名，15学級）のゲームクラブをとりあげて，述べてみたい。このゲームクラブは，本年度（57年度）新しくできたクラブだ。4月にクラブの入部希望のアンケートを4～6年にとったところ，昨年度あった将棋クラブは10人に満たない人数になっていた。そして昨年度あったクラブ以外でやりたいと思うクラブの内容について書かせたところ，トランプ，オセロゲーム，百人一首という希望が出てきた。いろいろ検討した結果，将棋クラブは廃部とし，新しくゲームクラブをつくり，その中に将棋が統合されることとなった。このクラブは，トランプもやるし，オセロゲームも，囲碁，将棋もやるというクラブとして発足し，ゲームといわれるもの全般についてとりあげて活動しようということになった。クラブ担当者にとっても，子ども達にとって，新しいクラブである。どんな活動が展開されたのであろうか。

このクラブの構成は次の通りである。

学年	男子（名）	女子（名）	全体（名）
4年	5	2	7
5年	20	0	20
6年	3	2	5
計	28	4	32

上の表でわかる通り，男子が圧倒的に多く，全体のおよそ90％をしめている。

ⓐ 計画や実践は子どもの創意で行うこと・運営は子どもの手で行うこと

このクラブの発足当初，男女の人数にかたよりが多いので，女子の活動はどうなのか，クラブ担当者としては気がかりであった。クラブの最初の日，組織づくりが行われた。男子の人数の関係からもクラブ役員（クラブ長・副クラブ長・書記）は，男子によってしめられるかなとも思われたが，以外にも6年女子2名が副クラブ長と書記になった。

どんなゲームをするのか，それの方法はといった実践前の計画の段階での話し合いに，女子2名は積極的に参加していた。話し合いの内容について板書する，話し合いの中心を明確にする発言をして副クラブ長の女子が，男子のクラブ長を補佐する。ときには話し合いの中心になる。また対戦相手が決まりトーナメント戦と決定すると，その女子2名が，次のクラブまでにそのことを表にまとめてつくってき，黒板に掲示するといったように，6年女子2名の活躍が目立った。これはこのクラブが新しく，一つの積み上げもないクラブなので，子ども一人ひとりの考えや希望をもとに進めら

れなければならないという実状からもきていると思われる。それがかえって子ども一人ひとりの考えを生かすことにもつながり，集団にとってよりよい考えは男女に関係なく採用されたものと思われる。クラブを楽しくやるためなら，子どもは男女にはこだわらずうけいれるのだ。組織集団では子どもの創意はこのことからも大切なことだと思われる。

この女子２名にはこんなこともあった。オセロゲームの個人戦のトーナメントをやっていて，決勝戦が間近なクラブの日。「賞状を作って，優勝者にあげようよ」女子が言った。それに応じて役員の話し合いが始まった。その後，話がまとまったのか教師には何も言ってこなかった。放課後，クラブ長の男子と６年女子２名が賞状作りをしていた。そして優勝者にその賞状を渡したのである。一人ひとりの役割があり，個人の能力が生かされれば，クラブへの所属感も生まれてくる。そこで放課後まで残って，自分たちで仕事をつくりやっていく。強制されているのでないから楽しそうだ。だから自然に運営も子どもの手にゆだねられていく。一人ひとりが集団の中で生かされていることも，集団には必要のことだ。

ⓑ 目標に向かって取り組むこと

１対１のゲームの場面を紹介しよう。１対１の戦いに観戦者がいて，こうするといいよと口を出す。やっている子は，うるさいな，おれがやっているんだ，口を出すなと言う。ぼくの言う通りにすれば勝てたのにな。外野がまことにうるさい。しかしやっている本人は，自分の力でやりぬこうと必死。自分の力で勝つのだ勝ちたいと思っている。勝つという目標にむかって，ひたすら努力するところに，活動の意欲が出てき，勝った喜びが満足感となって，自信をつけさせる。そこに目標にむかって取り組む楽しさがある。敗者になればくやしさがある。なぜ負けたのかその原因をさぐり出そうとする。そして次の試合には同じことはくり返すまいと思う。

はげまし合う，教え合うだけでなく，きそい合うこともあってこそ満足感が生まれ勝つための努力が続けられる。だから勝ちたい気持ちはあっても，自分の可能性にむかって，より強い者を求めるようになってくる。自分と同じくらいの力をもつ者より少しでも自分より上のものと対戦したがるようになる。勝つという目標達成の楽しさを知ってきたのだ。

このゲームクラブは，望ましい集団の模範となるものでは決してない。しかし実際の活動の様子から，望ましい集団に必要な要素（計画や実践は子どもの創意で行うこと・運営は子どもの手で行うこと・目標にむかって取り組むこと）がわかってきた。

このほかにも，学年のわくをはずした集団であること等々あげられるが，事例から述べてみるということで，今回はこれにとどめたいと思う。

イ．指導者の条件

(1) 学校のクラブ活動では児童の集団活動能力や，技能面の能力が低いために，指導者の在り方によっては，活動に大きな違いが生じる。そこで，指導者としてどのようなことに配慮し努めたらよいかを以下にあげてみる。

ⓐ 指導要領のねらいを充分心得ておくこと。

ⓑ 組織の良い相談相手であること。

ⓒ どんなクラブの担当者になっても，児童の立場に立って努力すること。

ⓓ 活動内容に応じた活動形態を工夫すること。

ⓔ 担当クラブの特徴や，児童一人一を理解しようと努めること。

ⓐ 指導要領では，児童の自治的・自律的な集団活動をめざすこと，そしてそれは児童が共通の興味・関心を追求する集団としての活動であると記されている。この立場からすると，指導者は，たんに己れの得手不得手で担当を決めたり，技能面の習熟に指導の重点を置くのではなく，自治的活動を進める集団に育てようという基本姿勢を持つものでなければならない。また，児童共通の興味・関心を満足させるために，指導者自身も，ルールや技能の習熟に努めなければならない。それぞれの学校の条件によって異なりはするが，基本的には上述の姿勢が大事であると考える。

ⓑ 上述の基本姿勢から考えられることは，児童の立場を側面から援助し，育てるための指導である。そこに良い相談相手としての教師の立場がある。特に，児童が不適当なあるいは実施不可能な計画を立てようとしている場合，適切な時に，適切な助言が必要である。これを見逃したために，児童の計画を後になって指導者が変更し，教師に対する児童の不満・不信感を生じ，ひいては，そのクラブ活動への意欲を失った例もある。また，組織内のトラブルを全員の問題として解決しようと助言することは，児童が集団意識を培ううえからも大事なことであるし，教師への児童の信頼が高まる。助言上の留意点としては，断定的な発言や，命令的・結論的な発言は慎まねばならない。このことが，重なると，教師主導の活動となり，児童の中に自治的な精神は育たなくなり，教師が言わないと何もできなくなる集団になってしまう。技能ベテランの教師・自己中心型の教師に，時として見られる傾向である。

ⓒ 児童の自律性・自治能力を高めるという場合，各人のクラブ活動への期待や，組織上の立場を児童の立場に立って考える指導が極めて重要なことはいうまでもない。もちろん，児童のやりたいことを何でも受け入れてやらせることが良いという意味ではない。しかし，年度末の反省等に現れる児童の意見には，先生がみんな決めてしまので，自分達のしたいことができなかったとか，期待したクラブの活動内容ではなかったとか，係りでありながら，係りとしての活動をあまりさせてもらえなかった等のものがあり，これらの不満が，来年度は別のクラブへ転部したいという意

志表示にまでなっている場合がある。教科の学習指導でなく，クラブ活動である点に指導者である教師が，児童の立場に立って，何を指導すべきかをあらためて考えねばならないと思う。

ⓓ クラブには文化系・運動系というように，また，個々のクラブによって活動内容が大きく違っている。しかし，一般的には，運動系のクラブ活動を始めてしばらくすると毎週運動だけが行われている場合が多い。文化系においても計画ができあがると，あとは何かを作り続ける活動が続いてしまう。しかし，それぞれのクラブに合わせて，計画する活動，展開する活動，発表する活動，評価する活動等，活動形態が工夫されるべきであり，毎時間の中にもこれらがいくつか組み合わさって進められることが考慮されるべきではなかろうか。一週間に一回程度の活動であり，児童のクラブ活動に対する期待が大きいだけに，それにこたえうる活動を工夫したいものである。

ⓔ 上述のように週一回程度の活動であり，また担当教師が担任でない場合が一般的なので，担当クラブの特徴を理解することはもちろん，部員ひとりひとりについてもしっかりした理解をすることは活動をより効果的にするうえから極めて大事なことである。教師主導型の活動を避けるばかりでなく，およそ何か事を行うに相手を理解せずに行うことほど非能率的で危険なことはない。個性を伸ばすとか，個を大切にするとかいうことの基本は，指導者がまず児童を深く理解していることである。そのために，児童の顔と氏名，担任者，児童の集団内での役割り，人間関係，活動と疲労度，及び学級担任との連絡から，指導上留意すべき児童，親の要望や願い，学習意欲と活動意欲との関係，クラブ活動や学業上の技能・能力など，個人理解を十分なすべきである。

良い指導者の条件としていくつかあげてみたが，問題点が無いわけではない。それは，児童自身が技能の習得をめざして入部した場合，指導者がよほどしっかりしたクラブ活動本来の主旨を徹底しないと，興味・関心のみが助長され，大事な集団としての自律的な活動が忘れられてしまうことである。また，児童と教師の意図することが異なっている場合，教師がどんな場合に，どの程度のものを認めたり，指導したりすればよいかは，個々の教師の問題になってくるということである。ともあれ，クラブ活動の基盤は学級指導・学級会活動にあるのであり，それぞれの場の活動が相互に影響して特活本来の実をあげ得たら幸いというべきであろう。

Ⅲ　クラブ活動の実態調査と分析

1. 新設・廃止されたクラブの理由

調査校１４校　新設・廃止のあった学校　７校
廃止のあった学校　１校
新設のあった学校　６校

a　廃止されたクラブと理由

児童の希望がない	指導者の問題	施設・設備の関係	そ　の　他
囲碁，将棋	剣道	テニポン	習字
習字	料理	テニス	プラモデル
読書	やきもの	科学	陸上・水泳
書道	△折り紙	料理	
ゲーム	△剣道	△剣道	
テレビ	△郷土	△器械体操	
△郷土			
△折り紙			
△器械体操	（△は，理由が２～３あったクラブ）		

- 廃止されたクラブで，２校あったもの　剣道　習字　料理
- クラブの廃止理由は，児童が希望しない，指導者の都合，施設・設備関係がほぼ同数であった。
- 児童の希望がないため廃止されたクラブは，習字などのように個人中心の活動が主になるものが多い。
- 指導者が転出のため，剣道・郷土・やきもの廃止。折り紙クラブは，教員定数減のため，指導者の都合で２クラブを統合し，伝承クラブを設けて，折り紙を廃止した。

  料理クラブは，指導者の家庭科教師が他のクラブの指導を希望したために，後任の指導教師がなく廃止された。
- 施設・設備の関係で廃止のクラブのうち，テニポン・テニス・器械体操は活動場所が狭く思うように活動できないため，剣道は校舎改築中のため場所がないため，科学，料理は，仮校舎で理科室，料理室の設備がないためである。
- その他の理由は，習字は希望が同一学年にかたよるために，クラブとしての構成ができないため，プラモデルは，材料購入に金がかかりすぎるためである。

  水泳・陸上は，夏は水泳，春秋冬は陸上と併用した考えのクラブであるが，陸上を選んだ児童が水泳を好まないなど，活動面に矛盾が生まれ，陸上クラブに戻った。

b　新設されたクラブと理由

児童の希望が多い	指導者の問題	施設・設備の関係	新設理由が無答
料理			ゲーム
鉄道			球技
演劇			ソフトボール
球技			テニス
陸上			卓球
調理			鉄道
伝しょう遊び		△伝しょう遊び	演劇
△やきもの	△やきもの		発明
△ＶＴＲ		△ＶＴＲ	籐あみ
△影絵創作	△影絵創作		
△バレーボール		△バレーボール	
△昔遊び		△昔遊び	
	（△は，理由が２あったクラブ）		

・　新設されたクラブで３校にあったもの　　料理（調理を含む）　伝しょう遊び
　　２校にあったもの　　鉄道　演劇　球技　ゲーム

・クラブの新設理由は，児童が希望するが特に多い。

・　やきものクラブは，前年度写真クラブの教師が，やきものの担当となったために希望者がふえた。影絵創作クラブは，永年その研究をしている教師が担当となりクラブを新設したため，希望がふえた。

・　施設・設備があるので新設されたＶＴＲクラブは，学校がＶＴＲを購入したので，その活用をしたいとクラブの設置を考えた。昔遊びは，外遊び，内遊びとあり，また手作りをする遊びもあって，巾広い活動ができるクラブで，学校の内外を十分使えるので設けられた。今まで校庭を使用していたソフトボールが，造成地を使用することになり，校庭が使えるため，バレーボールが新設された。

c．新設・廃止理由によりクラブを考える。

・　児童の希望により廃止されたクラブは，他の学校でも希望による新設はない。

・　指導教師の転出入の異動に伴い，児童の希望も増減している。このことから，クラブ担当教師の指導力，魅力の大きさがうかがわれる。

・料理クラブなどのように，家庭科教師が担当しないために廃止されている。しかし，クラブ児童の主体的な取り組みで，内容をくふうし，他の教師で指導できないだろうか。教師がかわると児童の所属がかわるとか廃止になるのは問題がある。

・　新設では，①運動系　②創作的　③手技的なクラブの順に設けられている。限られた施設・設備の中で，多くのクラブが併用で活動しているのが，理由に多かった。

2. 予　算

昭和５７年度の，都内の小学校におけるクラブ活動の予算について正確なところはわからないが，数校の例を見ると，かなりまちまちの方法をとっていることが推察できる。特別活動費は，２～２６，８万円と開きがあり，クラブ活動費も０～１４万円というように，予算化されていない学校も少くないようである。また，クラブ活動費という項目がなく，特別活動費の中にばく然と含まれている場合もあるようだ。しかし，クラブ活動が，教育課程に位置づけられていることから，経費が必要となればそれは公費で負担するべきであろう。金銭をともなう活動は，なるべく制限する方が望ましいと思うが，学校の設備の中にはないものでも，そのクラブとしては利用価値の高い，必要なものもある。なんとかして予算化したいものである。

それにはまず，各クラブについて年間の実施計画を作ることが先決である。そして，それにともなう活動費，物品購入費などの予算書（予算請求調査書）を作成してもらいクラブ担当者が集約する。次に，特別活動部で検討し，学校予算に組みこんでもらう，という手順をとる。

その際，少ない学校予算の中で必ずしも予算化できるものばかりとは，限らないので，購入物品の中で，何年間かの計画で，順位をつけておくのも一つの方法である。また，品物によっては，各教科と共通で使えるものもあるであろう。それらについては，その教科の予算とタイアップする方が購入可能になると思われることも考慮したい。下記にいくつかの例を示しておく。

○演劇クラブ ― 国語，児童文化部（脚本集，・人形劇舞台，・紙芝居舞台・擬音の道具・効果音レコード

○絵画クラブ ― 図工（画板・写生台・画架）

○工作クラブ ― 算数（立体模型）

○球技クラブ ― 体育（野球用ベース・ポートボール台・サッカー用簡易ゴール・ボール収納用スタンド）

また，活動後，児童が作品を持ち帰り，自己所有とする場合も考えられる。その場合は，個人負担（教師が集金，支払い。児童が準備，持ち寄る。）となることもやむを得ない。しかし，教師分（自己所有でなく）や，保護家庭の児童の分などは，予算化しておく必要がある。

最後に，各クラブ用ではなく，クラブ発表会用，展示用，掲示用など，クラブ活動全体の運営や連絡・調整のための費用も，少額でも毎年予算化しておくことも大切である。

その学校の実状にあった方法を，ということになるのだが，いずれにせよ，クラブ活動の内容が充実すれば，予算が充実し，予算が充実すればクラブ活動も充実してくることは言うまでもない。

3. クラブ担当教師をめぐる問題点

毎年四月になると，児童のクラブ所属と併わせて担当教師の所属も決定される。

ここでは，各区のそれぞれの学校で，本務との関係等でさまざまな参加の仕方がとられている学級担任・専科教師以外のクラブ担当教師をめぐる問題点について考えていきたい。

○養護教諭のクラブ活動参加

（A区のB校で昨年起こった事例）

クラブ活動中に事故があり，その時養護教諭が他のクラブを指導していたため，適切な処置が困難であった。

B校は小規模校である。職員数からいっても養護教諭のクラブ担当をはずせなかったこと。また，これまでの慣例ということもあって，少人数のクラブを保健室を活動の場として一人で担当をしていた。

（B区のC校での事例）

養護教諭担当のクラブが校外に活動の場を拡げている。当然担当教師が引率していく訳であるが，前例のように事故が起こった場合を考えると，養護教諭の活動参加を改めて考えさせられる。

A区では32校中，養護教諭のクラブ活動参加は16校で，区内の約半数にあたる。学校の規模の大小・構成，また，本人の希望等，担当する理由はさまざまあると思うが，「養護教諭は児童の養護をつかさどる」ことを基本に考えてみると，活動参加は，あくまで補助的なものであり，常に本務につける体制にしておく必要があるのではないだろうか。

養護教諭以外にも，校長・教頭・事務職員等のクラブ参加の例は多くある。それぞれの学校で，やむを得ないことから担当をしていることと思うが，参加基本を全職員の共通理解のもとで行うようにしたい。

次に，参加する場合の考慮点をいくつか考えてみたい。

① 複数配置

「基本的には補助的参加を原則に」ということからしても，担当クラブには，複数の教師を配属させたい。校務分掌では，（ ）付きとし，職員の共通理解を得ることが必要であろう。

② 所在を明確に

クラブ活動参加の配慮点として，D校では，クラブ時間になると保健室の戸扉に，「体育館にいます。」という札がかかっている。いつ，どこで，何が起きるかわからないことを考えると，所在を明確にして，緊急な場合の対処に応えられるようにしたい。

ここにとりあげた事例の他にも，各区各校でさまざまな問題点や考慮点があると思われる。今後，各区の情報を交換しながら，さらに研究を深めていきたい。

Ⅳ　研究の反省と今後の課題

本年度は「クラブ活動の特質を高める集団活動のあり方」について研究を深めてきた。研究の過程をみると幹事の所属する学校や市・区の実態を持ちより，その中から問題点を凝集するように努めてきた。

1. 集団構成の工夫において「クラブの所属決定」のあり方は，研究対象としていつも問題となり，これでよいという目的まで到達することがなかなか困難である。そのため目的に1歩でも近づけるために努力してきた。子どもの希望を生かすクラブ活動にするため，選択指導をより充実し，子どもの本音をより的確につかみ，クラブ活動の特質を高めるとともに選択指導のあり方の研究を深めなければならない。そのため子どもの興味・関心と自発的・自治的な集団活動の調和をいつも念頭に研究を行なう必要がある。

2. 評価の目的は，いつも子ども達に自信を持たせ，やる気を起こさせるためが重要な部分を占めている。児童による評価，担当教師による評価，その評価のやり方にも種々な方法がある。今後は学校においてより具体的に評価の方法を工夫し，改善点を持ち寄り研究を深めていくようにしたい。

3. 集団活動を高めるために指導者を必要とする。クラブ活動は，子どもの自発的・自治的な集団活動であるが，学級集団と異なり，集団として活動するためにやりにくい面を持っている。そのため指導者としての配慮しなければならないことを研究してきた。教師透導型にならないよう実際面での研究を望んでいる。

4. 都内の小学校のクラブ変遷はどうだろうか。クラブの多様化が計られてきている。この実態調査は１４校にすぎない。今後はもっと多く集め傾向をつかむと同時に，クラブ活動の内容の多様化を研究の対象に進めたい。

5. クラブ活動の予算の活用については，市・区による違いや，学校間による違いが大きく表われていた。クラブ活動を充実するためには，どうしても経費を必要とする場合が多い。備品については教科から借りて使用する場合が多くみられるが，消耗品については，特に年度当初に計画を立て予算要求をするように心がけねばならない。今後予算や経費について継続的に調査して研究していくと，クラブ活動の充実に連らなるとおもわれる。

東京都全般の傾向として，児童数の減少をみている。これがクラブ活動にどのように影響していくだろうか。児童数の減少からのクラブ数の減少，教師数の減少からのクラブ数の減少というようにクラブ活動の発展の妨げとならないよう配慮する必要がある。また，学校行事，学校裁量時間との関連なども今後の課題となるものと考えられる。

終わりにご多忙のなかご指導いただきました中田英義会長，中央区教育委員会大谷徹夫指導主事，古橋宏副会長，岩園敏明専門部長，小野真澄会計副部長の五先生をはじめ，クラブの授業を快く引受けていただきました中野区・北原小，豊島区・朝日小の校長先生と諸先生ならびに，幹事会の会場を提供していただきました千代田区・番町小の校長先生，お世話になりました先生方に厚くお礼申し上げます。

Ⅳ　学　級　指　導

テーマ　「授業を通して，指導過程の在り方と資料の活用を考える」

Ⅰ　まえがき …… 83

1.　研究主題について …… 83

2.　研究への取り組み …… 83

Ⅱ　なぜ学級指導を行うのか …… 84

Ⅲ　指導案を作成するにあたって …… 85

・主題・主題設定の理由・指導の経過と計画・本時のねらい

・本時の展開・事後の指導・評価

Ⅳ　授業研究とその考察 …… 88

1.　「運動と休養」（６年） …… 88

2.　「疲れ」（５年） …… 91

3.　「最上級生としての実行」（６年） …… 94

Ⅴ　資料の活用事例 …… 98

その１　「じょうぶな歯」（１年） …… 98

その２　「おとしもの」（４年） …… 101

Ⅵ　研究の反省と今後の課題 …… 104

＜　学級指導コーナー　＞

望ましい集団の条件 …… （ 95）

岡本先生の講演から …… （100）

風邪の授業をやってください
運動と休養と学養を 1単位時間で

○ 研究の経過

57. 5. 27	（木）	定期総会，部会，組織づくり，研究への迫り方	
57. 6. 17	（木）	情報交換，研究テーマについて，研究の内容と方法について	
57. 7. 2	（金）	学級指導の指導展開について，次回指導案の検討	
○ 57. 9. 29	（水）	研究授業	荒川区立赤土小学校　6年　篠崎学級
○ 57. 11. 4	（木）	研究授業	豊島区立仰高小学校　5年　橋本学級
○ 57. 12. 3	（金）	研究授業	新宿区立落合第三小学校　6年　棚木学級
⊗ 57. 12. 11	（土）	集録の編集計画，執筆者決定，執筆内容の検討	
58. 1. 12	（木）	執筆原稿内容の検討，発表者決定，役割決定	
58. 2. 23	（火）	研究発表の準備，発表内容の検討	

研究・執筆者名簿

部長	米本　滋雄	葛飾・梅田小		山田　善久	豊島・馬込小
副部長	鈴木　和子	港・白金小		飯田　公一	北・滝野川三小
（発〃表）	橋本　肇	豊島・仰高小	（発表）	篠崎たか子	荒川・赤土小
副部長	森山　裕夫	三鷹・井口小		金子　和明	板橋・志村第六小
	吉仲ミチ子	千代田・九段小		阿部　好三	板橋・上板橋四小
	飯田　良一	千代田・西神田小		田中　豊一	板橋・志村坂下小
（記録）	篠原　昌子	中央・月島第一小		安岡　正凱	練馬・光和小
（司会）	重松　誠	港・高輪台小		桜井　悦子	練馬・大泉第六小
（司会）	冨田　嘉子	新宿・東戸山小		日比野政好	足立・舎人小
	棚木　敦子	新宿・落合第三小	（記録）	赤岡　幸子	葛飾・東柴又小
	建守　紀子	台東・待乳山小		矢作　君子	葛飾・梅田小
	菊池　啓子	墨田・文花小		鷲尾　健一	立川・柏小
	嵯峨　悦子	墨田・錦糸小		石田　恒久	立川・多摩川小
	岩堀　早苗	江東・越中島小		芦沢　知江	三鷹・高山小
	加村　隆治	江東・東砂小		朝倉深太郎	三鷹・三鷹第五小
	山懸　良明	品川・杜松小		加村　直美	東久留米・南町小
	金子小夜美	目黒・八雲小		高橋　大造	府中・住吉小
	菅　芳則	大田・大森第六小		田中　尚子	小平・小平第一小
	飯島　隆之	大田・入新井二小		井上　芳子	小平・小平十一小
	朝田　幸子	大田・馬込小		森本　善美	清瀬・清瀬第九小
	岡本　恵子	世田谷・用賀小	（記録）	二田　孝	多摩・東愛宕小
	中島　久江	渋谷・常盤松小		佐久間英明	稲城・稲城第八小

Ⅰ　まえがき

1. 研究主題について

本年度は，昨年度のテーマ「実践的態度を育てる学級指導の計画と展開」を受けるとともに，副題として「授業を通して指導過程の在り方と資料の活用を考える」を設定して研究を深めることにした。

わたくしたちは，年度当初の部会において，部員の一人一人がかかえている学級指導に対する問題点や悩み，学校全体を見渡したときの問題点を生のまま出し合った。そのとき出された問題点や悩みは次のような事柄である。

・ひとりひとりに問題意識を高める導入がむずかしい。

・学級指導のねらいは，実践的態度の育成というが，指導内容を定着させることは非常にむずかしい。研究授業でやっても２週間程すると崩れてしまう。

・子どもたちにわかりやすく，考えを深めさせる資料が作れない。資料作りの時間不足。

・効果的な資料を，どこでどう与えたらいいか。

・終末の指導が特にむずかしい。

・年間計画があるといっても，主題一覧ができているだけ。どんな内容をもり込み，どんな資料を使って展開したらよいかわからない。

・校内の先生方が，指導計画に基づいて授業をやってくれているか非常に疑問である。

以上に見られるように，学級指導を効果的に展開するにはどうしたらよいか，資料をどこでどう活用したらよいかが，共通の問題点だったので，上記テーマを設定した。

「学級指導は，学級で指導するすべての教育活動の基盤である。」「日常生活を営むために必要な行動の仕方を身につけさせる。集団の中で，自己を正しく生かすことができるようにさせるのが学級指導のねらいである。（指導書）」と，学級指導の重要性が叫ばれている。しかし，学級指導の歴史は浅く，問題は山積している。

わたしたちは，まず，授業の重要性に着目し授業研究を重ねることにした。そして，ねらいに対する授業の進め方と適切な資料の在り方を究明したいと考えた。

2. 研究のねらいと方法

○　学級指導を行う必要性を原点に立ちかえって考える。

○　学級指導を展開するに当たって基本的におさえるべき事柄を明確にする。

○　学級指導の指導計画の在り方，学級・学校生活への適応に関する指導の在り方などについて研究紀要（１２～１８集）を参考にする。

○　年間３回の研究授業を行い，指導過程の在り方と資料の活用を協議する。

○　研究授業の際は，講師を招へいし指導と助言を受ける。

○　実践例を持ち寄り，研究の幅を広げると同時に研究を深める。

・学級指導 ・授業 } である ── だから他教科と同じく指導過程がなければならないのか。

特活で一番大切なのは内容意識をもつこと

Ⅱ　なぜ学級指導を行うのか

1. 学級指導が授業として位置づけられるまで

学級指導が，児童活動，学校行事と並んで特別活動の内容の一つとして位置づけられたのは，昭和43年（1968年）7月の学習指導要領の改訂においてである。

しかも，児童活動や学校行事が，改定前の学習指導要領において既に設置されていたのに対し，学級指導は，この年の改定においてまったく新しい名称のもとに新設されたのであった。

それは，43年の改定において，既にあった学校行事等の内容を精選し，「学校行事」とよぶのにふさわしい「儀式，学芸的行事，保健体育的行事，遠足的行事，安全指導的行事」の5種類の行事が位置づけられたことに起因する。というのは，従来の学校行事には含まれていながら，今回の精選によって行事とよぶことのできなくなった教育活動 ── 学校給食指導，遠足の事前・事後の指導，清掃の仕方の指導など ── をどうするかという問題が生じたのである。それらは，学校や学年，学級の実態に応じながら，学級を中心として指導されてきたものであり，児童の人間形成の上からも欠かせない教育活動であった。

43年の改定にあたり，行事とよぶことのできない教育活動などを精選して「学級指導」と名付け，授業として意図的，計画的に実施すべく特別活動に位置づけたのである。

ここに学級指導は授業として行われることとなった。したがって，教科と同様に，導入・展開・終末のある指導過程に従って指導がなされることが要求されるわけである。

2. 学級指導の授業を行わないと

学級指導の具体的なねらいは，「現在生じているか，あるいは近い将来に生ずることが予想される児童の生活現象面の問題にどう対処するかを指導すること」である。また，指導後の即事性・即効性が期待される教育活動である。

したがって，適切な学級指導が行われないと，次のような問題が生じる危険性がある。

① 学級や学校生活に関して適応できないことがあり，人間関係を疎外する。

② 施設や用具の正しい利用法を知らなかったり，自己の健康に対する関心が薄かったり，災害や危険に対する理解と対応のし方を欠く結果，自らの生命を断ったり，他人の生命をおびやかすことにもなる。

③ 食事の正しい在り方を体得できない。

④ 図書館利用に必要な知識・技能・態度が身につかない，等。

3. 授業として成立するための条件

① 指導計画に基づいた指導であること。（教師の思いつきの指導や説教の時間にしない。）

② 少なくても，$\frac{1}{2}$単位時間または1単位時間の時間をかけて指導するものであること。

③ 原則として，学級を単位として指導されるものであること。しかも，同一学年の全学級が，基本的には同じ内容の指導を行うものであること。

④ 明確なねらいと指導内容があり，指導過程が設定されていること。

Ⅲ　指導案を作成するにあたって

学級指導の授業は，直接的に児童の生活を望ましい方向へ変容させることであり，指導後の児童の考え方や行動にはっきりとした違いがみられる必要がある。しかも，具体的な日常生活の中で実際に生きて働く知識，態度，技能を実践させていくようにしなければならない。このようなことから次の点を考慮しながら計画を立てていくことが望ましい。

1. 主　題

主題の表現のしかたは，できる限り端的に，本時で何を指導するのかを示したい。また，児童にも，本時で何を学ぶのかが理解されるような主題名としたい。例えば，「清掃指導での協力」をとり上げる場合にも，「みんなで協力しよう」というよりも，「そうじの工夫」とか，「じょうずなそうじ」というような表現をとりたいものである。

以下，4点列挙してみる。

(1)　ねらいや内容がより具体的でわかり易い表現であること。

(2)　積極的な実践活動に結び付く表現であること。

(3)　児童の記憶に残り，自主的行動を促す表現であること。

(4)　期待感をもたせ，意識を高めさせる表現であること。

2. 主題設定の理由

主題設定の理由は，主題を設定した理由を明らかにすることにある。なぜこの学年のこの時期に，この主題を取り上げて指導するのか，その理由を明らかにすることである。そのためには，次の内容をおさえておくことが大切である。

(1)　教師の意図…本主題の指導を通して，児童や学級の問題を改善し，児童にどのような力を身につけさせたいか。また，どのような学級にしたいかなど，具体的に記述する。さらに，この時期に本主題を取り上げた理由についても記述する。

(2)　児童の実態…主題やねらいにかかわる学校や学年の児童の生活実態に関する内容を記述し，今後起こると予想される問題点や改善点についても記述する。

(3)　準備した資料…その資料を使った理由やねらい，活用について記述する。

(4)　その他…上記の3点以外に，特にこの主題を取り上げた理由があれば記述する。

3. 指導の経過と計画

学級指導が，その時間だけで終わってしまったり，1時間の中に，指導したいことをすべてもり込もうとする傾向が見られるが，清掃指導にしろ，適応指導にしろ，系統だてて考えられなければならない。本時に至るまでの大きな「指導の流れ」と，今後それをどう発展させていくのか，長期の展望についても明らかにしておくことが望まれる。

4. 本時のねらい

具体的に問題をしぼり，指導後直ちに実行可能なねらいを立てる。本時のねらいが大まかすぎると，焦点がぼけて，児童が問題を正しく把握できない。「協力する心を養う」というような，どの授業にも当然含まれるような「ねらい」ではなく，児童の実践をふまえて，「ねらい」をたてるべきである。このことは，学級指導のもつ，即事性，即効性という特質から考えても，特に重要である。

5. 本時の展開

学級指導の効果を高めるためには，各主題の指導にあたって，十分考慮された指導過程を工夫することが大切である。下のような指導過程が一般的に考えられているが，ねらいに合った指導過程を考え，資料を活用し，内容の定着を図ることが望まれる。

(1) 指導過程

導入段階		問題の意識化，共通化	・ねらいとする生活現象面の問題を，児童一人一人に意識させる段階 ・問題の存在に気付かせたり，焦点化を図る段階
展開段階	前段	問題の原因理由の追求把握	・共通課題化された現象面の問題の背景を理解させる段階 ・問題発生の原因や理由を話し合い，考えさせ，一人一人に確認させたり，理解させる段階
	後段	問題の解決対処の仕方の追求把握	・問題の解決の方法や問題への対処の仕方を理解させる段階 ・具体的な行動の仕方や技術を会得させる段階 ・問題の解決や改善の方法及び技術の個別化を図る段階
終末段階		実践への意欲化	・問題への対処の方法を実践していこうという意欲を高め，実践していくための具体的な手だてを図る段階

導入にあたっては，児童自身が自分の問題として受けいれるように，問題を明らかにしておくことが必要である。学級成員の共通の問題や，学級における生活事象，児童の体験の中から，問題に気づかせることが大切である。

展開にあたっては，児童が真剣に考える授業にするために，一人一人が，自分の問題として受けとめさせるような配慮をする。その時こそ，集団としての解明が行われ，具体的な方法が生み出される。授業の中にも，集団としての話し合いや活動を多くもりこむことを考えたい。

終末では，「自分自分の具体的な実践方法」をもたなければならない。集団として解明されたことをもとにして，ひとりひとりが主体的に意志決定をするようにする。それが，集団として認められ，励まされる状態の時には，「実践への意欲づけ」がしやすい。明日からの児童の生活を変容させるために，実践意欲と具体的な方法を必ずもたせるようにしたい。このことは，「学級指導」の授業展開として重要な事柄である。

(2) 資料の活用

学級指導は，教師の意図的，計画的な指導であるから，教師の考える望ましい方向に結論を導き出さなければならない。さらにこの結論に対しては，児童一人一人が納得し，実践しようとする意欲を持たせることが大切である。指導を進める時に，児童の心情をゆさぶったり，好ましい行動の仕方を教えたり，児童自らが自分に最も適した対処の仕方など解決の手だてを発見するようにするために，各指導段階に即した適切な資料の活用が大切である。このことから資料の望ましい条件として次の点があげられる。

① その時間の「主題，ねらい」と密接に関係するもの。

② 資料の内容が児童に理解しやすく，具体的で身近なもの。

③ 問題の解決方法や対処の仕方を考えさせる場合には，多様な考えや方法の示唆をあたえるもの。

④ 保健，安全などの指導での基本的行動様式を身につけさせる場合には，具体的な行動を明確に示したもの。

⑤ 一部の児童ではなく，学級全員に共通するもの。なお，資料の活用に当たっては，あまり数多くのものを提示するのではなく，問題の焦点化を図るためにより効果的な資料を提示することが望ましい。又，資料作りに当たっては観点を決めて，子どもと共に作成することも考えられる。

	指導効果を高める資料
導入	・問題場面の絵，写真，作文 ・問題内容を示唆する録音 ・調査結果を示すグラフや表
展開	・児童の体験や感想の発表 ・原因を示唆して考えさせる絵，説話，読み物など ・対処の仕方(具体的な行動)を示す絵や写真など ・心構えや留意点のまとめ
終末	・個人の決意発表や作文，TP/スライド ・実践を記録するカードなど

学級にあった資料

6. 事後の指導

指導の効果を高めるには，事後の指導に負うところが多い。個別指導・随時指導との関連や「道徳」など他領域との関連などもおさえる。

7. 評　価

本時の指導についての評価の観点と，継続的な指導についての評価の観点とに分けておさえておく。さらに，本時の授業と指導計画との関連や児童の実践についての評価は，だれが，いつ，何によって評価するのか，具体的にしておきたい。しかし，本年の研究ではそこまで到達できなかった。

Ⅳ　授業研究とその考察

事例1

授業者　荒川区立赤土小学校　篠　崎　たか子

6年（行事の事前指導）$\frac{1}{2}$単位時間

1. 主　題　運　動　と　休　養

2. 主題設定の理由

運動会を一週間後にひかえ，日々の練習にもいっそう熱が入ってくる時期であり，児童の生活も学年の練習，全校の練習，運動会の係の仕事とたいへんせわしないものとなっている。それに従いなんとなく体がだるい，授業に集中ができないといった児童の数も増えてきている。しかし，疲労についての認識は低く，疲れたままの状態で，次の活動を開始している者が大半である。

そこで，疲労の種類と，それに応じた回復の方法を知り，自分の体を常にベストコンディションに近い状態で維持しようとする態度を育て，実践ができるようにと考え，本主題を設定した。

3. 指導の経過と計画

事前指導	小学校最後の運動会	1単位時間	運動会にどのように参加し行動することが望ましいのか実際的な方法について考え，意欲的に運動会に参加できるようにする。
	運動と休養	$\frac{1}{2}$単位時事（本時）	疲労の種類に応じた回復方法を実践できるようにすることにより，運動会の練習に積極的に参加できるようにする。

運動会当日　6単位時間（学校行事）

事後指導	運動会の反省	$\frac{1}{2}$単位時間	小学校最後の運動会にどのように参加できたか自己評価をさせる。
	○事前指導をおこなったあと，朝の会，帰りの会などを通じ，意欲を高め，やる気を促すような指導をしていく。		

4. 本時のねらい

疲労を回復するための具体的な方法を考え，実践し，積極的に運動会の練習に参加できるようにさせる。

5. 展　開

段階	指　導　内　容	指導上の留意点	資　料
導入	1. 運動会練習後の自分の体の調子に気づかせる。	○どんなところが，疲れたり，だるくなっているか，具体的につかませる。	人の体の略図
展開	2. 疲労には，いろいろな種類があることに気づかせる。	○心の疲労と体の疲労があることに気づかせる。	板　書
	3. 疲労の種類に合わせた回復の方法を，グループで考えさせる。	○体の疲労を回復する方法を中心に，学校ですぐにできるものを考えさせる。	カード
終末	4. グループで考えたことを発表しあい，学習のまとめをする。	○その場でできる回復の方法の場合は実際にやらせてみる。 ○疲労をそのままにせず，種類に応じた回復方法を実践していこうという意欲が持てるようにまとめる。	

6. 評　価

疲労を回復するための具体的な方法がわかり，疲労した時にはその種類に応じた方法で，回復をはかろうとする意欲が持てたか。

7. 資料（板書の流れにそって）

(1) 導　入

① T.「この子の体の状態は，どんな様子ですか。」

C.「疲れている。」

カードをはりながら，体の各部位の疲労を具体的につかませる。

② T.「疲れた時の体は，どんなふうになりますか。順に考えていってみましょう。」

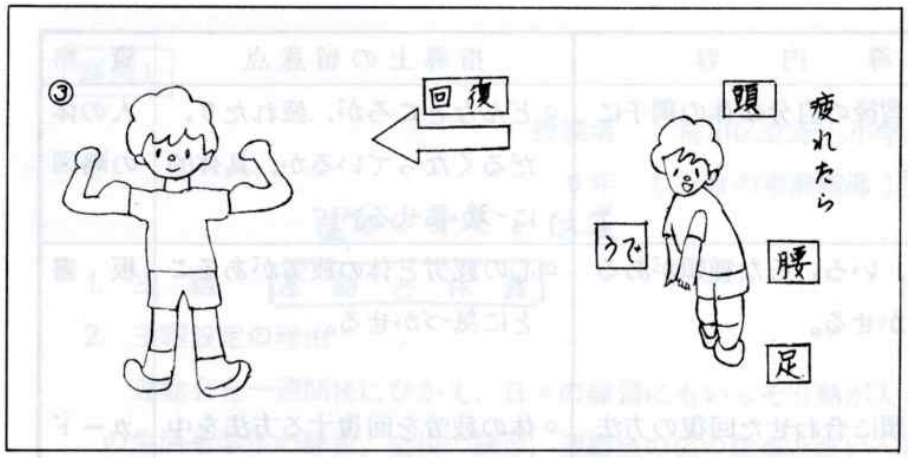
C.「頭が，ボーッとする。」

C.「頭がいたくなる。」

⋮

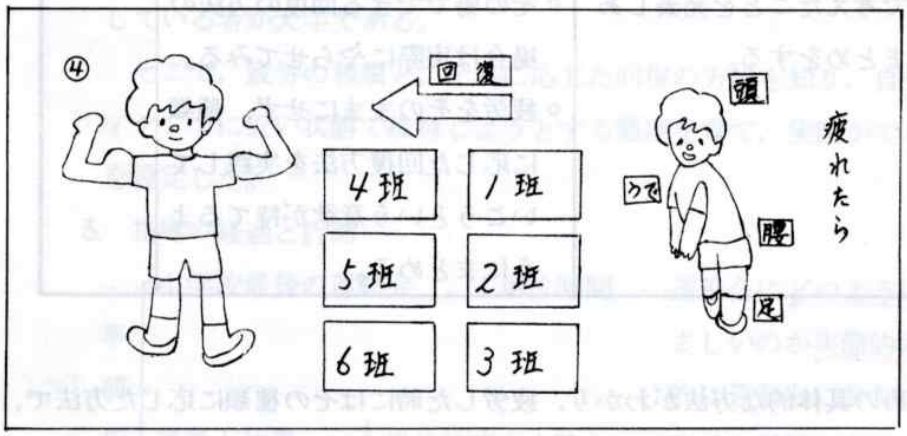
C.「足が重くなる。」

(2) 展　開



③T.「体を元の元気な状態にもどすためには，どうしたらよいでしょう。」

体の各部位の疲労をとり除く方法をグループで話し合わせる。



④T.「グループで話し合ったことを，発表しましょう。」

各グループで話し合ったことを，カードにまとめて発表させる。

8. 反省と考察

○実際に授業を行っみると，疲労の種類を理解させ，回復の方法まで考えさせるには２０分間では，無理があったと思う。時間にとらわれ，「学校ですぐにできる疲労回復の方法を考える」というねらいが，ぼけてしまった。

○中心資料として，導入の段階で，人の体の略図を用いたが，体の各部分の疲労をつかむために効果的に使うことができた。しかし，子どもに，「疲労をそのままにしておけない」という，緊迫感を持たせるような資料が，展開の段階にほしかった。

○授業後，休み時間の子どもの様子を見ていると，使った筋肉をもみほぐしたいという行為が見られるようになり，疲れをそのままにせず，少しでも，回復しようとする態度が身についてきたと思われる。

○各班のカードの記入は，日頃の指導が行き届いていたため，分担と記入が速やかに行われたが，もう少し時間のゆとりがほしかった。２０分授業のむずかしさを感じる。

事例２

授業者　豊島区立仰高小学校　橋本　肇

５年　（保健）　$\frac{1}{2}$単位時間

1. 主　題　疲　れ

2. 主題設定の理由

学芸会を明後日にひかえた今日だが，毎日続いた練習の疲れが児童の学校生活にもみらるようになってきた。学芸会終了後も連合学芸会への参加をひかえており，ここで疲れを回復させ，更に，平常の学校生活においても自己の健康を守れるように考えて，この主題を設定した。

疲労の原因としては，学芸会の練習の他に，合唱団の朝練習，剣道の朝げいこ，進学塾をはじめとする習い事の負担などが第一にあげられている。また，高学年となり，好きなテレビも放映時間が遅いものが多くなっている現状から，これが原因で睡眠不足となっている児童も多い。その他，学級や学校，家庭での人間関係のつまずきも疲れの大きな原因となっていると考えられる。

そこで，本時はこのような疲労の様々な原因を考え，話し合うことにより，児童ひとりひとりにあった疲労回復の方法や予防の方法を見出させ，実践できるようにさせたいと考えている。

3. 本時のねらい

疲労の様々な原因を知り，児童ひとりひとりが自己にあった疲労の回復や予防の方法を実践できるようにさせる。

4. 展　開

(1) 事前の準備

◎ 実態をつかみ，問題点を明らかにする。

ア．主として児童の目から

・アンケート調査（現状の自己評価，習い事の実態）

・日記，作文，学級新聞等

イ．主として教師の目から

・日常観察（学習や生活の態度等）

・他教師からの話（専科，養護等）

・親からの相談

・けが，病気の調査（保健室の利用状況）

↓

◎ 問題をにつめる。

→

◎ 意識づけのための資料づくり

↓

◎ 児童への意識づけ

・朝や帰りの会での話

・掲示物

・給食時や休憩時での話しかけ

↓

◎ 授業のための資料づくり

(2) 本時の展開

段階	指導内容	指導上の留意点	資料
問題の具象化	1. 気がつかないうちに疲れていることや，その原因に気づかせる。 （疲れると） だるい。頭が痛い。 ねむい。あくびが出る。 いらいらする，乱暴になる。 （原因は） 身体面で 睡眠不足（テレビ，勉強時間）。姿勢の悪さ，等 精神面で 自信がない。いじめられる。悪口をいわれる。等 家庭面で	○アンケートの結果や養護教諭や専科教諭の話を紹介して，学級の疲労の状態をつかませる。 ○児童に経験談を話させ，具体的な原因を話し合わせるようにする。 △気分が悪くなったり，けがをした児童 △いらだちのめだつ児童 △時間に追われる児童 △人間関係に悩む児童 △家庭環境に悩む児童	専科や養護教諭の話のテープ 疲れの原因のイラスト 広報委員会のミニニュース
解決方法の発見	2. 疲労の主な原因に合わせた回復の方法や予防の方法を見出させる。	○より具体的な方法を見出させるために，原因別グループでの話し合いも考える。 ○他の児童のために気をつけなければいけないことも考えさせる。	アンケートの集計
実践化	3. 自分がしなければいけないことを決め，実践カードに記入させる。	○どんなことを，どんな方法でするのか具体的に記入させる。	実践カード

(3) 事後の指導

実践カードの点検，日常生活の観察，日誌，父母の話，他教師の話等から，決めたことが実践されているか確かめて，助言や励ましを与える。

5. 評　価

児童ひとりひとりが疲労の回復や予防の具体的な方法を見出して，実践する意欲を持つことができたか。

資料の意味するもの
授業動機を高める資料とは？

6. 研究協議から

(1) 資料の活用

ア．資料は二種類が考えられる。

・主となる資料（学校・学年として準備されるもの）

・補助的資料（学級として用意されるもの）

イ．資料を使う場所も，a．導入の部分　b．展開の部分（前段，後段とわけられる）

c．終末と分けて考えられる。

ウ．資料はどのようなものを，どこで提示したらよいか工夫しなければならない。

エ．学級指導の資料と学級経営の資料を区別し，授業のねらいにあった資料を選ばなければいけない。

オ．資料の量は多すぎてもいけない。しぼって使いたい。本時は多すぎた。

カ．資料は授業の中で子どもとともに作成することもできる。作ることが，考えることにつながることが多い。

キ．終末に使われる資料（実践カード等）の使い方の工夫を考えてみたい。

ク．この授業では，「1日の生活の時間の使い方」の活用法を工夫したい。

(2) 指導過程のあり方

ア．教師のねらいがあいまいであった。児童の疲れは，ぐっすり寝ればとれる。すい眠に問題をしぼって考えるべきであった。

イ．ショートの学級指導の場合，指導内容をしぼっておく必要がある。ショートの時間は問題提起にとどめ，次回に解決することもあってよいのではないか。

ウ．疲労のねらいを肉体的面，精神的面のどちらかにしぼって指導する必要がある。集団を高めるためには，精神面にしぼった方がよいと思う。

エ．学級指導は，校内の問題に的をしぼった方がよいと思う。

オ．実際には，校外の問題もとり上げられている学校が多い。校内生活をよりよくするためには，校外の生活をとり上げてもよいのではないだろうか。

カ．そういう場合もあるが，のぞましい活動ということと，しかたなく取り上げるのとは区別して考えることが大切ではないか。

キ．学級指導には　・くり返しのための指導　・段階的指導　・1回だけの指導とある。単純な問題はショートでできるし，段階的指導は，はじめはロングの学級指導で行った方がよい。

(3) 本時の指導でよかったこと

ア．児童ひとりひとりの理解がしっかりしていた。

イ．学級経営が学級指導の授業に生かされていた。

事例3

授業者　新宿区立落合第三小学校　棚　木　敦　子

6年　（適応指導）　1単位時間

1. 主　題　最上級生としての実行―くずの葉活動―

2. 主題設定の理由

最上級生になり，1年生の世話，委員会やクラブ活動，週番などでの責任の重さを感じ始めた5月初旬，学級に関する意識調査を行った（p.96のグラフ参照）。それに関連して，「学校をよくするために何をするか。」を考えた。そして，「協力して学校をよくする。きれいにすること。」等について話し合った。その結果，

(1) 体育館の見回りをしよう　(2) 校内のごみを拾おう　(3) 掲示物をきちんとしよう　(4) 1年生の世話をしよう（4月から実施）

と決め，休み時間や下校時に見回ろうということになった。1学期は，わり合い張り切っていたようだった。

2学期になると，9月は運動会の練習，10月は校庭の舗装があり，11月には学芸会の練習などと，心を奪われる事がつづいて，これ等の活動は，いつの間にか実行されなくなってきた。

頭ではわかっているのだが，行動が伴わなくなっている。そこで，本主題をとり上げた。

3. 指導の経過と計画

(1)　4月　6年生になって。（S）

(2)　6月　プールそうじ（S）

(3)　7月　地区班のリーダー（S）

(4)　9月　学校へのプレゼント（L）

(5)　12月　最上級生としての実行―本時―（L）

(6)　1月　心に残る卒業式（L）

(7)　3月　中学生へのステップ（L）

4. 本時のねらい

最上級生としての生活をふり返り，学校に役立つために何をするか見通し，実践させる。

5. 展　開

段階	指導内容	指導上の留意点	資料
導入	1. 本時の学習の目あてをつかませる。 ・写真を見て話し合う。 ・主題「最上級生としての実行」について学習することをつかむ。	・校内の様子 廊下の箒，掲示物， 体育館のマット，ボール のしまつ，図書室	写真

展開	2. どうすれば実行できるか。 解決方策を決めきせる。 ① 決めたことが何故，実行できなかったか話し合う。 ・できなかったことは何か。 ・できなかった理由，原因は何か。 ② 実行策を考える。 ・実行できそうなことを見通す。 （ごみ拾い，ボールのしまつ，かさ立ての整頓，箒のしまつ，掲示物をきちんとする，等） ・特に努力して実行しようと思うことを決める。 ・決めたことをいつやるのか。 ・誰とやるのか話し合う。	「学校のためにしたいこと」を考えさせる。 （誰かがやる。忘れた。いそがしい。うっかりした。めんどう。時間がない。自分のせいではない。） ・今までに実行したこと ・やらねばならないこと ・できそうなこと ・実行した時の気持ち等を具体的に話し合わせる。 ・具体的なことがらの中から焦点をしぼって深く追求させる。	グラフ
終末	3. きょうからの実践計画をまとめる。 ・実践記録を書くことをつかむ。 ・記録の書き方を話し合う。 ・「くずの葉活動」と名付け，実行する約束をする。	・実践記録カードを効果的に活用させる。 ・グラフ 「学校のためにしたいこと」	カード

6. 評　価

○ 今まで活動の反省の上に立って「くずの葉活動」の計画をたてることができたか。

○ 最上級生として「くずの葉活動」に取りくむ姿勢ができたか。

＜学級指導コーナー＞

望ましい集団の条件　（研究集録第１４集より）

○魅力のある集団（目的的集団）
○親和感に結ばれている。
○のびのびと行動することができる。
○孤立する者がいない。
○集団内小集団の相互結合がなされる。
○自らその一員であることを願っている集団
○拘束されずに意見が述べられる。
○一部の者に人気が集中しないで，状況によって地位が変わる組織。
○集団内成員は支持的であって防衛的でない。

7. 資　料

(1) 導入部分 ― 「学校内の様子」（VTR）

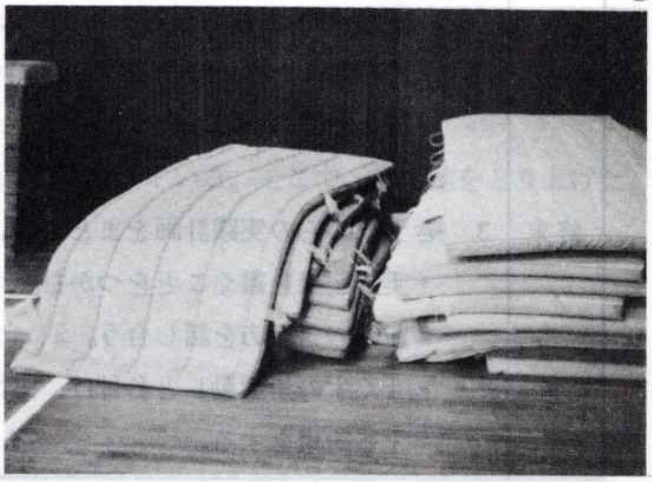
① …「廊下のほうき」

② …「体育館のマット」

他に「掲示物」「ボールの始末」「図書室」（掲載省略）をＶＴＲカメラで撮影し，テレビに写す。

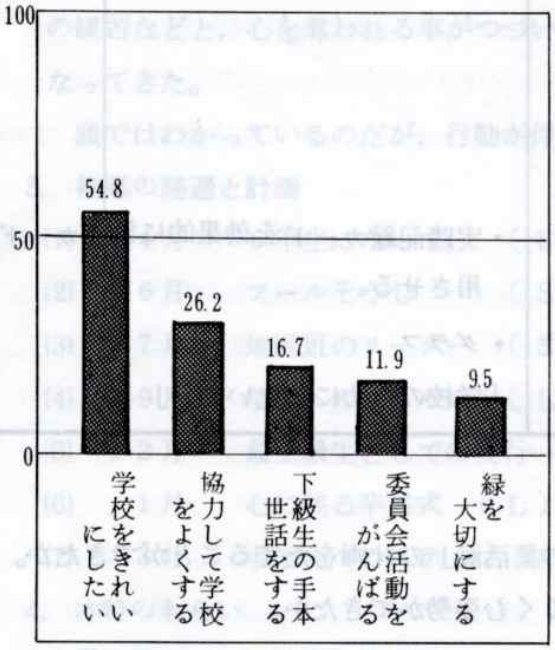
①

②



(2) 展開部分 ― 「学校をよくするためにしたいこと」（グラフ）

学校をよくするためにしたいこと 5-8



(3) 終末部分 ― 「実行表」（カード）

「くずの葉活動」　仕事の内容「　　」

月／日	班	氏　名	いつ	したこと・感想など
／				
／				

8. 研究協議から

(1) 資料の活用

ア．導入部分の５つの写真は，自校のものなので，子どもにとって非常に関心度が高かった。子どもの中から「ワァー」とか，「整理ができてない」の言葉が自然に出てきた。問題意識を一人一人に持たせるのに適切な資料であった。

イ．導入で使用した写真は，一般的にはスライドで投影されることが多い。本時は，写真をテレビカメラがとらえ，それをテレビに写し出すという手法をとった。スライドのように暗幕も要らず活用範囲が広いことがわかった。

ウ．展開部分での資料「学校をよくするためにしたいこと」のグラフの活用に工夫がほしかった。「こういうことをしようと約束したのに，途中で実行できなくなってしまいました。できなくなってしまった原因なんでしょう。」と１分程の呈示で終わってしまったのは残念であった。実行策を考え出させる場面でもっと活用すべきではなかったか。

エ．資料は，教師が前もって作ったものが多い。しかし，授業を進めながら，子どもが作っていく資料，子どもと共に作っていく資料を考えていく必要があるのではないか。本時の場合のように，解決策を生み出す段階で特に有効と考える。

オ．実践記録カードは，グループで記入，点検させると実行が長続きする。教師は，根気強く点検し励ましていくことが必要である。

(2) 指導過程

ア．本時のねらいをつかませた上で，なぜ実行できなかったかを考えさせ，では，これからどうするかという基本がしっかりした指導案で，授業も，その通り行われた。

イ．展開の前段で，今までできなかったことは何か，できなかった原因はどこにあるかの話し合いは，非常にだいじである。本時の場合，基本にたちかえっての指導が十分になされたが，そのための実行策を考えたり，実施の計画を立てるところの時間が不足してしまったのは残念である。

ウ．教師の熱意により，子どもをぐいぐいと引っぱっていく授業で迫力があった。展開の後段での実行策は，子どもから出させるような配慮がほしかった。

エ．週番活動のよし悪しは別として，本校では週番活動が行われているので，週番をして感じた点を話させれば，一層授業にのってきたのではないか。

オ．授業の柱が，ていねいに板書され，反省点や実行策などが，きちんと整理された授業であった。

(3) その他

ア．学級指導は，事件が起きてからでは遅い。しかし，子どもの中に，切迫感とか必要性がないとお説教の授業になってしまう。本時は，卒業を前にして，目的を持った生活をしよう，させようと，子どもと教師が同じ目標をもって追っているので，「くずの葉活動」への実践が，素直に受け止められたのだと思う。

V　資料の活用事例

その１

授業者　小平市立小平第十一小学校　井　上　芳　子

１年（保健）１単位時間

1. 主　題　じょうぶな歯

2. 主題設定の理由

歯が痛んだりしみたりして給食が食べられなかったり，学習中でも涙ぐんでいたりする子がいる。多くの児童が虫歯のつらさを経験しながらも，予防については関心が薄い。

永久歯に生えかわり始めたこの時期に，歯の大切さを理解させ，虫歯の予防についても一年生なりの知識を持たせ，実践化をはかりたいと思って本主題を設定した。

3. 本時のねらい

歯の大切なことをわからせ，虫歯にならないために，食べ物に気をつけたり正しい歯みがきやうがいができるようにさせる。

4. 授業の流れ

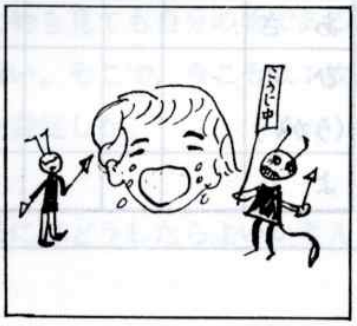
指　導　内　容	留意点・資料
○「むし歯予防のつどい」の話と絵の内容を再確認し，本時へ意欲づける。	○保健委員会の児童が作ったパネルの絵を借りてきて活用する。　資料(1)
○自分の歯の様子に関心を持たせる。	○虫歯の本数や状態を友だちと見合う。
○虫歯で困った経験を想起させる。	○つらかった経験を具体的に話させる。
○虫歯の原因と，その進み方を理解させる。	○食べかす，とけていく歯等の様子をＴＰにして，順に見せていく。　資料(2)
○虫歯の予防方法を理解させる。 ・虫歯になりやすい食物 ・歯をじょうぶにする食べ物	○常掲の掛図を見て食品名を言わせる。
・正しい歯のみがき方 ・ぶくぶくうがいの方法 （ぶくぶくうがいとがらがらうがいの違いをわからせる。）	○指で動作するだけにとどめる。 ○水道のところで練習させる。
・いつやるか	○学校では給食後にやらせる。
○歯みがき，うがいの実践を意欲づける。	○継続することの大切さをわからせる。 ○１週間分のがんばり表　資料(3)

5. 資料の活用について

資料(1)　全校集会で使った虫歯に関するイラスト的なパネル

保健委員会の児童が苦心して作った模造紙の絵数枚を借りて教室へ持ち込んだ。集会に一回使うだけでなく，いつでも資料を活用していきたい。

例1.　虫歯で泣いている子

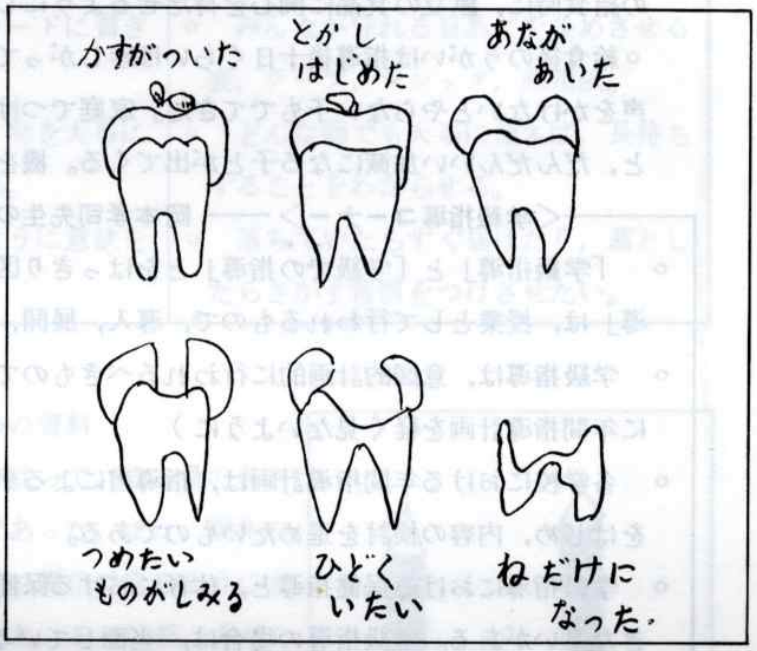


例2.　よい歯を，ガリガリと

資料(2)　虫歯の原因とすすみ方の説明ＴＰ（自作）

○　虫歯がどのようになってすすんでいくのかがよくわかり，いっそう関心を深めることができた。

○　低学年の特性を生かして擬人化した方法を考えたが，効果的であった。ただ，最後までそれで終わらせないで科学的な説明を少ししておいた。



資料(3)　歯みがき，うがいのがんばり表

・つけ方をよく説明して持たせる。
・1枚分の日数が長いとかえっていい加減になるので1週間分とし，続けたい時には，新しい用紙を渡す。
・間をおいてときどき行い習慣化をはかる。

はみがき・うがいがんばりひょう

1の3（　　）

○できたら○，できなかった△をつける。

日								うちの人のことば	せんせいのことば
よう	げつ	か	すい	もく	きん	ど	にち		
あさ									
ひる (うがい)									
よる									

6. 反省と考察

○全校集会「むし歯予防のつどい」に参加した児童が，虫歯に関するパネルの絵と話にずっかりひき付けられている様子と，「あのパネルの絵はとてもよい資料だ」と思ったこととから，集会に引き続いて本時を設定した。

本時の略案と資料(2)(3)はすでに用意して実施時間を考えていた矢先だったので，すぐに心が決まった。案の定，導入段階では，パネルを目前にしたので「あっ」「わあっ」ともっとよく見たかったという思いが声になってとび出した。「つどい」の感想も沢山出され，学習への意欲づけに役立った。集会や行事そのものを資料として活用できると思った。

○本時の焦点化をはかるため，歯によい食べ物悪い食べ物は簡単にふれるだけとし，以後の給食時に，献立の食品に関心を持たせるようにした。

○給食後のうがいは指導後十日くらいは珍しがってみんなよくやったが，やはりそのうち声をかけないとやらない子もでてきた。家庭でつけている表も，き帳面にやって記録する子と，だんだんいい加減になる子とが出てくる。機を見て指導を続けなくてはならない。

＜学級指導コーナー＞―― 岡本孝司先生の講演から（抜すい）――

○　「学級指導」と「学級での指導」とをはっきり区別することが大切である。「学級指導」は，授業として行われるもので，導入，展開，終末を基本的にもったものである。

○　学級指導は，意図的計画的に行われるべきものである。（「適宜」という言葉のもとに年間指導計画を軽く見ないように）

○　各学校における年間指導計画は，指導書による例示にこだわりすぎていた。適応指導をはじめ，内容の検討を進めたいものである。

○　学級指導における保健指導と，体育における保健指導の違いは，とり上げる動機に大きな違いがある。学級指導の場合は，当面している課題であり，適時性，即時性，即効性をねらっている。体育の場合は，教科であり，内容の理解がねらいである。

その２

指導者　大田区立馬込小学校　朝　田　幸　子

４月　（適応指導）　１単位時間

1. 主　題　おとしもの

2. 主題設定の理由

物が豊富で使いすての現代，鉛筆をはじめ多くの落とし物が絶えない。児童は落としても気がつかなかったり，落とし物を見ても自分の物であるのかさえわからない。当然落とし物をさがそうとする意識も低い。そこで，今こそ紙１枚，鉛筆１本の大切さを知らせる必要があると考えて，本主題を設定した。

3. 本時のねらい

鉛筆をなくさないようにするにはどうしたらよいか考えさせる。

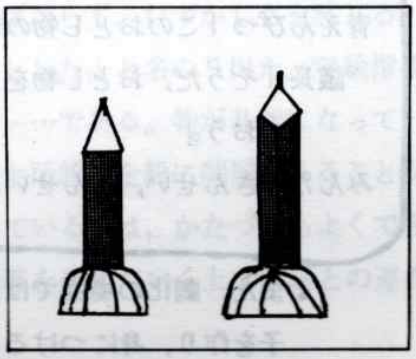
4. 授業の流れ

指　導　内　容	留　意　点　・　資　料
○　落とし物が多いことをわからせる。	○　落とし物をはった黒板
○　「落とし物の会議」を読んで劇化させる。	○　鉛筆の気持ちになって読ませる。プリント
○　落とし物をしないようにするには，どうするか考えさせる。	
・　落とし物をしない人の話を聞く。	○　多くの児童に発表させる。
・　落とし物をしないようにするには，どうしたらよいか，グループで話し合う。	
・　落とし物をしない方法をカードに書き発表する。	○　みんなが守れる目あてを決めさせる表，テープ，マジック，画用紙。
○　長く使っている品物を見て，物を大事にしようとする気持ちを持たせる。	○　どんな物でも大事に使えば，長持ちすることをわからせる。
○　落とし物「０」の日が続くように意欲を持たせる。	○　落ちていたらすぐ届けたり，落としたらさがす習慣をつけさせたい。

5. 資料の活用について

○　落とし物の意識を高めるための資料

今までの落とし物を小黒板にはって，その量の多さを感じとらせたことは効果的であった。また，劇化の場面では，鉛筆の気持ちになって劇化できるようにするため，右のような帽子を作った。その結果，ふだん消極的な児童も，意欲的に学習に参加した。一方，役を調整するのに時間を要した。



○　落とし物の心情にせまるための資料

落とし物を擬人化して「落とし物の会議」という物語を創作した。

おとし物の会議

ここは，おとし物の国，たくさんのえんぴつたちが集まって，何やら相談中です。

議長「まだほかに，このはこから出た人は，いないか。」

テーブルをたたきながら，ミッキー議長がいいました。

さんかくえんぴつ「ぼくは，一学期から人間に見すてられたままです。」

にこにこえんぴつ「わたしも早く，きょうだいの所へ帰りたい。」

二人は，なきそうな声を出して，ミッキー議長にうったえました。

みどりえんぴつ「ぼく，この国じゃきゅうくつでいやです。どんどん人間に見すてられたえん筆がやってくるんだもの，前のように，もっと広い所へ行きたいなあ。」

と，えん筆たちの間をかきわけて出てきたのはみどりのえん筆です。

赤えんぴつ「わしの持ち主ときたら一回もかわいがっちゃくれなかったさ。何しろ買った日から見はなされ，だれかにごみばこに入れられ，あぶなく死ぬところだったよ。」

と，赤いけずられていないえん筆がいいます。

みんな「いや，まったくひどい。」（口々にいう）

議長「こう見まわすと，まだまだ人間どもに無視されたえん筆たちがたくさんいるんだね。」

（みんな，がやがやさわぐ。）

議長「静かにしてください。たいせつなことは，ぐちをいい合うことじゃなくて，この悲しさ，つらさをどうしたら人間の子どもたちにわかってもらえるかなんだ。どうしたらいいだろうね。」（大きなため息をついてすわる。）

にこにこえんぴつ「わたしたちの気持ちをもっと人間の子どもたちにうったえましょうよ。」

と，すみの方で，にこにこえん筆がいいました。

赤えんぴつ「そうだ，そうだ。人間だって心があるんだもの。きっとわかってもらえるよ。」

みどりえんぴつ「ぼくのこと，きらいになってしまったのかな。」

青えんぴつ「いや，遊ぶのにむちゅうになってしまうからよ。」

さんかくえんぴつ「買った時は，ぼくをたいせつにしてくれたもの。いつかきっとさがしに来てくれると思うな。」

青えんぴつ「このおとし物の国にこない人たちは，かわいがってもらえていいなあ。」

議長「そうだ，おとし物をしないよい子は，どんなことに気をつけているか，きいてもらおう。」

みんな「さんせい，さんせい。」　ボンボン教室の時計が朝の5時を知らせました。

・また，劇化の場面では，写真のように発泡スチロールで鉛筆を型どってぬいつけた帽子を作り，身につけることによって鉛筆の気持ちを理解させた。

○　実践化を図るための資料

ふだんひとりでは，実践にまで結びつかない児童が多い。そこで，班員相互の協調性や班ごとの競争心を高めるためにグループごとに目標を決めさせた。さらに，各班で決めた目標から共通な目標（物に名前を書く，朝の会で鉛筆の数を調べる。）を決めて，学級全体で実践することにした。そして，落とし物が「0」の日には，シールを与えて意欲を持続させた。

班	目　あ　て	シール
1班	○自分の鉛筆に名前を書く。	
2班	○班長がふで箱を調べる。 ○持ち物に名前を書く。	
3班	○家で鉛筆の数を調べてくる。	
4班	○帰りの会で落とし物をしたか調べる。	
5班	○物に名前を書く。 ○身のまわりの整とんをする。	

6. 反省と考察

○　小学校の4年でも，擬人化した物語を読んで，鉛筆に対する関心が高まり，「落とし物の鉛筆がないているようだ。」「鉛筆がかわいそうだ。」と言った心情的な面に訴えることができ有効であった。

○　そうじのとき，紙が落ちていると「これ使えるよね。」「もったいないなあ。」といって持ってくるようになった。

○　鉛筆が落ちていると，素通りするのでなく進んで拾って，名前があると届けるようになり，受け取った時は，「ありがとう。」と言って感謝の気持ちを表すようになった。そのためか学級内でのあたたかい人間関係が形成されつつある。

○　どの班も，翌日から落とし物が「0」になった。このことは，鉛筆への関心が高まり学級指導の効果があったと考えられる。しかし，この傾向は，2週間ほど続いたが，時間が経過するにつれて，また落とし物が目立ってくる。そこで，習慣化するまで場に応じた継続した指導が今後とも必要である。

○　目先の変わった筆記用具，漫画の絵入り商品など子ども達の周りには物があふれている。しかし，手軽に手に入る品物に対して，子ども達は十分な愛着心を持っているとは言いがたい。

物を大切にすることは，物への愛着心を育てなければならず，むずかしさを感じる。

○　整理整頓のにがてなJ君が4日目に「コンパスを落とした。」と名のり出た。学級指導前は落としたことがわかってもそのままだったJ君が……である。物が乱雑になっていても平気な子や落とし物が目立つ子などは，その子の生活態度全般に問題があることが多い。言いかえれば，基本的な生活態度がきちんとしている者は，かたづけもよくでき，落とし物も少ないということである。従って，今後指導を進めていく上で家庭との連携は欠かせない。

・資料
・指導計画
・問題意識をもて

厚くて温かい指導
深い指導

Ⅵ　研究の反省と今後の課題

東の端，西の果てから集う研究会。研究を深める間もなく1年は過ぎ，協議を深めるには，余りにも短い午後の時間であった。研究授業は，当初の計画通り，3回行うことができたが，指導案の検討は，1回しか行うことができず，授業者の努力に負うところが多かった。また，実践例を5つ載せたが，紙面が少なく，意を尽せない点が多い。

1. 指導過程について

本年度の研究は「授業を通して，指導過程の在り方と資料の活用を考える」をテーマとした。研究授業を行い，研究協議を重ねてきたが，研究協議会では，指導過程の話題に入る前に，本時の主題と学校の学級指導年間計画とを対比したり，主題設定の必要の是非論も出し合った。そして，本時のねらいが明確であったか，ねらいに対して適切な指導案が立てられたか，実際の授業の展開はどうだったか，児童の実践意欲を高めるには，導入，展開，終末の各段階で，どこをどうすればよかったかを話し合ったが，この課題は，永遠の課題であると痛感した。また，今回，$\frac{1}{2}$単位時間の授業を2つ行ったが，$\frac{1}{2}$時間の授業は非常にむずかしい。ねらいに迫るために思い切った指導過程を組み，工夫していくことが必要だと感じたが，この点，さらに研究を深めたい。

2. 資料について

3つの研究授業を通して言えることは，導入段階の資料が効果的で，授業に取り組む姿勢が非常に高まったということである。これは，部員の先生と講師の先生の共通の意見であった。しかし，問題に対する原因追求の資料と，児童自身に意志決定させたり，問題解決のための対処のし方を助ける資料の工夫が足りなかったという意見が出された。展開部分の資料の選択と活用について研究を深める必要がある。また，子どもとともに作る資料，授業の中で作っていく資料についても研究を深めたい。なお，集録に，活用事例を2つ載せたが，3つの研究授業と同様に自作資料の迫力を感じる。研究資料の交換をこれからもすすめたい。

おわりに

学級指導部幹事の先生方には，要職にあり多忙のところ，また遠方からお出で頂き，遅くまで研究に参加下さり，ありがとうございました。また，荒川区教研特活部長那須先生と部員の先生，および新宿区教研学級指導部の先生には，たいへんお世話になりました。厚く御礼申し上げます。快く，執筆，授業，実践例を引き受けて下さった先生方に感謝しております。

あとになってしまいましたが，岡本先生からは学級指導の本質をわかりやすくご指導頂き，斉藤先生からは指導過程と資料についてご指導頂き，岩園先生からは適切なご指導を頂いた結果，研究がより深まったことを付記し，感謝の意を表します。

会場を提供して下さった赤土小，仰高小，落合第三小，番町小，梅田小の校長先生と先生方，ありがとうございました。

昭和５７年度

東京都小学校特別活動研究会
役員・理事・幹事名簿

1 顧問

氏名	校名・職名
小谷　威	芝山小長
小島　明	第三松江小長

2 役員

役職名	氏名	校名・職名
会長	中田英義	番町小長
副会長	広瀬英二	滝野川四小長
〃	外村　近	南貝取小長
〃	古橋　宏	朝日小長
〃	斉藤　斌	小谷野小長
庶務部長	小河一久	月島一小長
〃 副部長	石川和男	誠之小頭
〃	門倉昭三	竹芝小頭
会計部長	大西　弘	二葉小長
〃 副部長	島田泰介	野増小長
〃	小野真澄	下鎌田東小頭
専門部長	岩園敏明	清水小長
〃 副部長	岩下紀夫	天神小頭
〃	新倉　剛	千歳小頭
〃	安岡正凱	光和小
学級会部長	大谷武夫	青山小
児童会部長	星野隆治	桃園三小
クラブ部長	関口照治	菊川小
学級指導部長	米本滋雄	梅田小
事業部長	竹石善一	蓮根小長
〃 副部長	松野彰夫	志村一小
〃	渡辺　寿	開進三小
編集部長	小川国寿	桧町小頭
〃 副部長	高見沢豊栄	六小頭
〃	合原　渡	成増ケ丘小
会計監査	北村康富	篠崎小長
〃	早坂　一	栗島小長

3 本部幹事

役職名	氏名	校名・職名
庶務	吉仲ミチ子	九段小
〃	篠原昌子	月島一小
〃	池田令子	礫川小
〃	古家千鶴子	駒本小
〃	菊地裕美	大塚小
〃	小山恭子	昭和小
〃	嶋根弘子	仲町小
会計	金子てる子	第一日暮里小
事業	木場住郎	多聞小
編集	小林繁人	護徳小
〃	鶴井　毅	白金小

4 理事

No.	区名	氏名	校名
1	千代田	○香川昭男	富士見小
2	中央	小川泰三	東華小
3	港	○五十島良治	南海小
4	新宿	小川進一	西戸山小
5	文京	池田和栄	金富小
6	台東	○大高正義	石浜小
7	墨田	○木場清八	第二寺島小
8	江東	○長門邦雄	香取小
9	品川	○岡野高雄	源氏前小
10	目黒	○山田一夫	東根小
11	大田	○広江信夫	東調布第三小
12	世田谷	○安本百合子	池之上小
13	渋谷	日根野光	大和田小
14	中野	石原美子	丸山小
15	杉並	影山兼道	沓掛小
16	豊島	○入江実	池袋第一小
17	北	池田　簇	四岩小
18	荒川	那須正義	第四日暮里小
19	板橋	松野彰夫	志村一小
20	練馬	○沼田定次	南町小
21	足立	○外山悦三	高野小
22	葛飾	・前田昭義	半田小
23	江戸川	○小笠原探源	第四葛西小
24	八王子	板山幸雄	五小
25	立川	飯沼　宏	柏小
26	武蔵野	奈良友康	一小
27	三鷹	佐藤治子	大沢台小
28	青梅	・土方順蔵	河辺小
29	府中	○藤本　学	南町小
30	昭島	・家田哲夫	中神小
31	調布	三浦勝也	大町小
32	町田	八巻八郎	南四小
33	小金井	河西　労	小金井東小
34	小平	○佐藤　堯	鈴木小
35	日野	畑中隆宏	平山台小
36	東村山	○吹毛井啓一	東萩山小
37	国分寺	○守屋博行	第三小
38	国立	赤池正人	国立第五小
39	田無	・増沢喜美雄	柳沢小
40	保谷	星　憲彦	保谷小
41	狛江	山中忠雄	2小
42	東大和	関口主一郎	第九小
43	清瀬	・片岡恵次	清瀬小
44	東久留米	安田康隆	小山小
45	武蔵村山	○小林昭二	第八小
46	多摩	○小林耕一	北豊ケ丘小
47	稲城	佐久間英明	稲城第八小
48	西多摩・秋川	・新井皎一	屋城小
49	大島	○島田泰介	野増小

（○長　・頭）

編　集　後　記

都特活では，話し合いを中心とした研究協議よりも，実際の授業を通して実践的な研究を進めようと提案してから，年々，その成果を高めている。このことは，教育が実際の子どもたちの姿をとらえ，出来ないことを出来るようにし，わからないことをわかるように子どもを変えることにあるからである。

人間性豊かな児童の育成は，特活ばかりでなく全教育課程をもってなされるが，特に，児童の主体的な活動を育て，自主性や自発性をねらう特活では，そのかかわりが極めて大きいと言わざるを得ない。

都特活の4部門は，それぞれに実践的な研究を積み重ね，問題解決への方途を打ち出しているが，実際の授業公開に当っては，子どもたちの条件や，学校の実情などもあって，なかなか困難を伴ない，諸条件を克服して研究に取り組まれた4部門の研究同志に，改めて敬意を表わすしだいである。

さて，このような研究の中で，学級会活動研究部では昨年に引き続き，「一人一人の役割」を取り上げ，児童の参加意識をどう育てるか，役割分担をどのように解決させていくかなど，学級会活動の根幹にふれて研究が進められ，児童会活動研究部でも昨年の研究を土台に「よい校風の育成」を取り上げ，全校的な視野に立った児童会活動に，主体的な実践活動を展開していく姿をとらえた研究であった。

また，クラブ活動研究部では，「クラブ活動の特質と集団活動」を取り上げ，異学年集団，目的集団のあり方を追求し，学級指導研究部では，「指導過程での資料の活用」を取り上げ，指導効果を高める資料の吟味と，活用の方法を実地に検討していった。

このように，都特活4部門が，実践的な研究を積極的に展開し，一歩でも二歩でも前進して問題解決を図ろうとしている姿は，東京都だけと言わず日本全国の同志に貢献できるものと確信して疑わない。

本年度の研究をしめくくるに当って，多くの困難や条件を克服し，実践授業を通しながら積極的な研究を進められた4部門の各位に，心からの感謝をおくり，最後に，多くの指導・助言をいただいた講師の先生方に，厚くお礼を申しあげて筆をおく。

専門部副部長　岩　下　紀　夫

研究集録　第19号
豊かな人間性を育てる特別活動

印　刷　昭和58年2月28日
発　行　昭和58年3月　4　日
編　集　東京都小学校特別活動研究会
発　行　会長　中　田　英　義
千代田区六番町8
番町小学校内

印刷所　株式会社　三　誠　社
代表取締役　茂呂　弥兵衛
文京区本郷2－22－4
TEL　812-0241・811-2062